

神
野
々
Ⅰ
遺
跡

— 県道山田岸上線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 —

二〇一一年三月

財団法人
和歌山県文化財センター

神野々Ⅰ遺跡

— 県道山田岸上線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 —

2011 年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

神野々 I 遺跡

— 県道山田岸上線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 —

2011 年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

序

橋本市所在の神野々Ⅰ遺跡は、和歌山県北部を西流する紀の川と和泉山脈の間の河岸段丘上に位置しています。

神野々Ⅰ遺跡の南側には、近接して奈良時代創建の神野々廃寺が位置しており、発掘調査事例の増加に伴い考古学的なアプローチによる地域史の解明が期待されているところです。また、神野々Ⅰ遺跡の西側には、県内でも著名な応其条里が広がり、古代から中世にかけての開発史の中でも注目される地域の一つに挙げられます。

財団法人和歌山県文化財センターでは、県道山田岸上線道路改良工事に伴い平成19年度・同21年度に発掘調査を実施しました。小規模な調査ではありましたが、弥生時代から鎌倉時代にかけて断続的に続く生活遺構を発見し、当時の地域の一景観の変遷を明らかにすることができました。

平成22年度に整理作業を進めて参り、このたびその成果をまとめることができましたので、発掘調査報告書として刊行する次第でございます。本書が県民の皆様のみならず、広く一般の活用に資することができれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に対し厚くお礼申しあげます。

平成23年3月

財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 鈴木 嘉吉

例 言

- 1 本書は、和歌山県橋本市神野々に所在する神野々Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、県道山田岸上線道路改良工事に先立つもので、平成19年度・同21年度に神野々Ⅰ遺跡の発掘調査業務を行い、同22年度に出土遺物等整理業務を実施した。
- 3 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、和歌山県の委託を受けた財団法人和歌山文化財センターが、和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。
- 4 現地調査に際し、伊都振興局・大鉄工業（紀伊山田・高野口間岸上架道橋新設工事）をはじめ、橋本市教育委員会関係機関および隣接する地元の方々から多大なご協力を得た。
- 5 本書は、各発掘調査・出土遺物等整理業務担当者が執筆し、土井が編集した。
- 6 図版に使用した遺構写真は、各調査担当者が撮影し、遺物写真は土井が撮影した。
- 7 発掘調査にあたっては、次の諸氏から多大なご指導・ご教示を賜った。
金原正明（国立大学法人奈良教育大学 教育学部）、神埼 勝（妙見山麓遺跡調査会）、若林邦彦（同志社大学 歴史資料館）、大岡康之（橋本市教育委員会）、前田正明（和歌山県立博物館）
- 8 発掘調査・出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は、財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。
- 9 本書に掲載した出土遺物は、膨大な量の中から任意に抽出したもので、各検出遺構・堆積土層の出土遺物を網羅するものではない。
- 10 発掘調査・出土遺物等整理業務の調査組織は、以下に示すとおりである。

調 査 組 織

事 務 局	平成19年度	平成21年度	平成22年度
事 務 局 長	松田長次郎	田中 洋次	田中 洋次
事務局次長	山本 新平		
管 理 課 長	山本 新平（兼務）	富加見泰彦	富加見泰彦
埋蔵文化財課長	村田 弘	村 田 弘	村 田 弘
発掘調査業務担当	2007－Ⅰ・Ⅱ区	2009－Ⅰ～Ⅲ区	
埋蔵文化財課	（主任）土井 孝之 （専門調査員）手島英実子	（技師）村田 祐介 （主任）佐伯 和也	

出土遺物整理業務担当

埋蔵文化財課 (主任) 土井 孝之

凡 例

- 1 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター 発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006年4月）に準拠して行った。
- 2 遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）に基づき、値はm単位で使用している。また、図面に示した北方位は、座標北を示す。
- 3 遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T.P.+）表示である。
- 4 発掘調査及び整理作業で使用した調査コードは、以下のとおりである。

07-12・55 （2007年度一橋本市・神野々Ⅰ遺跡）

09-12・55 （2009年度一橋本市・神野々Ⅰ遺跡）

出土遺物・記録資料の整理に当って、全て上記の調査コードを使用している。

- 5 地区割の詳細については、本文の第Ⅲ章第3節に記述する。
- 6 遺構番号と遺物番号は、調査時毎（2007年度及び2009年度）に1番からの通し番号とし、遺構番号には必要に応じて末尾に種類（性格）を付した。

例：1水溜め遺構、173 堅穴建物・・・

- 7 本書の遺構・土層実測図は、特に縮尺を統一していないが、各々に明示している。図の表現で、遺構、任意掘削・掘り残し、攪乱でケバの表現を各々変えている。



- 8 遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。
- 9 遺物実測図の縮尺は、原則として1/3で、それ以外の場合は必要に応じて縮尺を明示している。
遺物写真の縮尺は、特に統一していない。
- 10 調査時の土層の色調・土壌の粒径区分及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修 小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（2000年版）を使用した。

土層名で2種類以上の記載のある場合は、前者が主体で、後者が副になることを示す。

本文目次

第Ⅰ章 調査の位置と経緯・経過	1
第Ⅱ章 神野々Ⅰ遺跡の歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 神野々廃寺の調査.....	6
第Ⅲ章 発掘調査の方法と成果	9
第1節 調査現場の記録作業	9
1 写真撮影作業	9
2 実測図作成作業	9
3 航空写真撮影・基準点測量	9
第2節 出土遺物等資料の整理	10
1 出土遺物応急整理等	10
2 出土遺物等整理業務	11
第3節 調査地の地区割	13
第4節 調査成果	15
1 基本的な層序	15
2 検出遺構と出土遺物	18
1) 2007－Ⅰ・Ⅱ区の調査	18
2) 2009－Ⅰ～Ⅲ区の調査	38
第Ⅳ章 総括	43
Ⅰ・Ⅱ区 出土遺物実測図	50
出土遺物一覧（凡例）	60
出土遺物一覧	61
引用・参考文献	70
報告書抄録	
写真図版遺構・遺物	
奥付	

付図 2007・2009 神野々Ⅰ遺跡遺構全体平面図（S＝1：150）

挿 図 目 次

図 1	神野々Ⅰ遺跡と周辺の遺跡	4
図 2	調査位置と区画割（100 m区画）	7
図 3	調査地の地区割模式図	13
図 4	調査範囲と地区割（4 m区画）	14
図 5	調査範囲と周囲の地形（4 m区画）	16
図 6	調査地の基本層序	17
図 7	2007・2009 調査区 遺構全体平面図	19・20
図 8	2007－Ⅱ区 173 竪穴建物実測図	21
図 9	2007－Ⅱ区 173 竪穴建物細部断面土層図	22
図 10	2007－Ⅱ区 318 土坑実測図	22
図 11	2007－Ⅱ区 188 竪穴建物実測図	23
図 12	2007－Ⅱ区 188 竪穴建物貯蔵穴実測図	24
図 13	2007－Ⅱ区 掘立柱建物 1 実測図	25
図 14	2007－Ⅱ区 300 土坑実測図	26
図 15	2007－Ⅰ区 掘立柱建物 3 実測図	27
図 16	2007－Ⅰ区 柱穴列実測図	28
図 17	2007－Ⅱ区 各土坑実測図	29
図 18	2007－Ⅰ区 各土坑実測図	31
図 19	2007－Ⅰ区 1 水溜め遺構実測図	33
図 20	2007－Ⅱ区 C 段 緩傾斜地面堆積層 断面土層図（A－A'）	35
図 21	2007－Ⅱ区 A・B 段 谷地形堆積層 断面土層図（B－B'）	35
図 22	2007－Ⅱ区 D 段 緩傾斜地面堆積層 断面土層図（C－C'）	36
図 23	2009－Ⅰ～Ⅲ区 遺構全体平面図	38
図 24	2009－Ⅰ・Ⅲ区 調査区各壁面断面土層図	39
図 25	2007・2009 調査区 弥生時代中期の 遺物分布図	49
図 26	出土遺物実測図 1（各遺構出土遺物 1）	50
図 27	出土遺物実測図 2（各遺構出土遺物 2）	51
図 28	出土遺物実測図 3（各遺構出土遺物 3）	52
図 29	出土遺物実測図 4（各遺構出土遺物 4）	53
図 30	出土遺物実測図 5（各遺構出土遺物 5 木製品）	54
図 31	出土遺物実測図 6（谷地形堆積層出土遺物 1）	55
図 32	出土遺物実測図 7（谷地形堆積層出土遺物 2）	56
図 33	出土遺物実測図 8（谷地形堆積層出土遺物 3）	57
図 34	応其条里と発掘調査位置 1 （2003 年作成地図）	58
図 35	応其条里と発掘調査位置 2 （1977 年作成地図）	59

表 目 次

表 1	発掘調査・出土遺物等整理業務工程表	1
表 2	神野々Ⅰ遺跡と周辺の遺跡地名一覧	5
表 3	2007・2009 調査区 各層序別遺物数量	46
表 4	2007－Ⅱ区 遺物合関係一覧 1	47
表 5	2007－Ⅱ区 遺物合関係一覧 2	48
表 6	弥生時代中期の土器内容	48
表 7	弥生時代中期の石器他内容	48

写 真 目 次

写真 1	柏原遺跡の方形周溝墓群（北東から）	3
写真 2	名古屋墳墓出土の蔵骨器	6
写真 3	神野々廃寺塔心礎（南から）	6
写真 4	2007－Ⅱ区 1 水溜め遺構図面作成 （西から）	9
写真 5	2007－Ⅱ区 航空写真撮影	10
写真 6	出土遺物の洗浄（応急整理）	10
写真 7	1 水溜め遺構についての調査指導	10
写真 8	遺物（土器）への登録コード注記	11
写真 9	遺物の接合	11
写真 10	遺物充填材による補強・復元	11
写真 11	金属製品の錆取り	12
写真 12	出土遺物の実測図作成（須恵器）	12
写真 13	出土遺物の実測図作成（弥生土器）	12
写真 14	遺構図面デジタルトレース（レイアウト）	12
写真 15	遺構写真のアルバム収納	12
写真 16	集計登録データ等入力	12
写真 17	2007－Ⅱ区 173 竪穴建物遺物	

	出土状況（北から）	22
写真 18	2007－Ⅱ区 318・315 土坑（北から）	23
写真 19	2007－Ⅱ区 188 竪穴建物壁溝の遺物 （西から）	24
写真 20	2007－Ⅱ区 掘立柱建物 1 3 柱穴断面土層（北東から）	26
写真 21	2007－Ⅱ区 246 土坑（北北東から）	29
写真 22	2007－Ⅱ区 1 水溜め遺構細部（南から）	32
写真 23	2007－Ⅱ区 1 水溜め遺構東側	

	崩落石の状況（東から）	32
写真 24	2007－Ⅱ区 開析谷（南南西から）	34
写真 25	2007－Ⅱ区 173 竪穴建物の焼成粘土の 取上げ（北西から）	37
写真 26	2007－Ⅱ区 基盤層成因の粗砂礫	37
写真 27	2009－Ⅰ区 調査区北壁断面土層（南から）	40
写真 28	2009－Ⅲ区 遺構 15 調査区北壁 断面土層（南から）	41

写真図版目次

写真図版 1 旧高野口町・橋本市 応其条里周辺の航空写真（昭和 23 年）

写真図版 2 2007－Ⅰ・Ⅱ区航空写真（デジタルモザイク写真）

写真図版 3 2007－Ⅱ区 調査地全景

- 1 2007－Ⅱ区 調査地全景航空写真（北側上空から）
- 2 2007－Ⅱ区 調査地全景航空写真（西側真上から）
- 3 2007－Ⅱ区 調査地全景（北から）
- 4 2007－Ⅱ区 調査地全景（南から）

写真図版 4 2007－Ⅱ区 E・F 段 173 竪穴建物

- 1 2007－Ⅱ区 E・F 段 173 竪穴建物 焼失状況（北から）
- 2 2007－Ⅱ区 E・F 段 173 竪穴建物 建築部材倒壊炭化状況（東から）
- 3 2007－Ⅱ区 E・F 段 173 竪穴建物 北側高床部焼成粘土貼り土状況（南から）
- 4 2007－Ⅱ区 E・F 段 173 竪穴建物 北側高床部焼成粘土 貼り土断面土層（東から）
- 5 2007－Ⅱ区 E・F 段 173 竪穴建物 南側高床部焼成粘土検出状況（北北東から）
- 6 2007－Ⅱ区 E・F 段 173 竪穴建物 北端壁面焼成粘土貼り土状況（西南ら）
- 7 2007－Ⅱ区 E・F 段 173 竪穴建物 南側高床部下部焼成粘土塊検出状況（北北東から）
- 8 2007－Ⅱ区 E・F 段 173 竪穴建物 南端壁面焼成粘土貼り土断面土層（東から）

写真図版 5 2007－Ⅱ区 E 段・F 段 調査遺構

- 1 2007－Ⅱ区 E 段・F 段 遺構検出状況（北から）
- 2 2007－Ⅱ区 E 段・F 段 173 竪穴建物掘削状況（北から）
- 3 2007－Ⅱ区 E 段・F 段 173 竪穴建物炭化材・焼成粘土貼り土検出状況（東から）

- 4 2007－Ⅱ区 E 段・F 段 173 竪穴建物 焼成粘土塊検出状況（北から）
- 5 2007－Ⅱ区 F 段 188 竪穴建物掘削状況（北から）
- 6 2007－Ⅱ区 F 段 188 竪穴建物堆積土断面土層・焼土遺構（北から）

- 7 2007－Ⅱ区 F 段 186・187 土坑（西から）

- 8 2007－Ⅱ区 F 段 186 土坑南北断面土層（西から）

写真図版 6 2007－Ⅱ区 D 段・F 段 調査遺構

- 1 2007－Ⅱ区 F 段 188 竪穴建物（西から）
- 2 2007－Ⅱ区 F 段 188 竪穴建物 北西隅貯蔵穴遺物出土状況（東から）
- 3 2007－Ⅱ区 F 段 188 竪穴建物 柱穴 1 柱材据付状況（西から）
- 4 2007－Ⅱ区 F 段 188 竪穴建物 焼土遺構検出状況（北から）
- 5 2007－Ⅱ区 F 段 188 竪穴建物 柱穴 5 丸瓦出土状況（188 竪穴建物に先行する柱穴）（東から）
- 6 2007－Ⅱ区 F 段 251 土坑掘削状況（188 竪穴建物に先行する土坑）（東から）
- 7 2007－Ⅱ区 D 段 300 土坑 遺物出土状況（南東から）
- 8 2007－Ⅱ区 D 段 362 土坑墓 遺物出土状況（南西から）

写真図版 7 2007－Ⅱ区 C 段・D 段 調査遺構

- 1 2007－Ⅱ区 C 段南西範囲 遺構検出状況（北から）
- 2 2007－Ⅱ区 C 段南西範囲 遺構掘削状況（北から）
- 3 2007－Ⅱ区 C 段南西範囲 掘立柱建物 1（北北東から）
- 4 2007－Ⅱ区 C 段南西範囲 鎌倉時代の耕作跡検出状況（北から）
- 5 2007－Ⅱ区 C 段南西範囲 42 土坑掘削状況（北から）
- 6 2007－Ⅱ区 C 段南西範囲 42 土坑南北断面土層（西

から)

7 2007 - II区D段 遺構検出状況(北東から)

8 2007 - II区D段 遺構掘削状況(北東から)

写真図版8 2007 - II区A段・B段 調査遺構他

1 2007 - II区A段・B段 谷地形堆積層掘削状況(北北東から)

2 2007 - II区A段・B段 谷地形法面堆積層断面土層(南南東から)

3 2007 - II区A段 谷地形堆積層 第4b層遺物出土状況(東から)

4 2007 - II区A段 1水溜め遺構上部構造と石組み崩壊状況(南から)

5 2007 - II区A段 1水溜め遺構上部構造(南から)

6 2007 - II区A段 1水溜め遺構上部構造(北西から)

7 2007 - II区A段 1水溜め遺構下部構造(東から)

8 2007 - II区A段 1水溜め遺構下部構造(東から)

写真図版9 2007 - I区 調査地全景

1 2007 - I区 調査地全景航空写真(北側上空から)

2 2007 - I区 調査地全景航空写真(西側真上から)

3 2007 - I区 調査地全景(北北東から)

4 2007 - I区 遺構検出状況全景(北北東から)

写真図版10 2007 - I区C段・D段・F段 調査遺構

1 2007 - I区 調査地全景(南から)

2 2007 - I区D段・C段 調査地全景(北北東から)

3 2007 - I区F段 掘立柱建物3(北から)

4 2007 - I区F段 柱穴列1(北から)

5 2007 - I区F段 土坑群(西から)

6 2007 - I区F段 柱穴列1 495柱穴台石出土状況(東から)

7 2007 - I区F段 454土坑(北東から)

8 2007 - I区F段 455土坑(北北東から)

写真図版11 2007 - I区F段 調査遺構

1 2007 - I区F段 473土坑(北から)

2 2007 - I区F段 490土坑(北西から)

3 2007 - I区F段 517土坑(北西から)

4 2007 - I区F段 521土坑(北から)

5 2007 - I区F段 527土坑(南西から)

6 2007 - I区F段 537土坑(西から)

7 2007 - I区F段 542土坑(北西から)

8 2007 - I区F段 555土坑(東から)

写真図版12 2009 - I～III区 調査遺構

1 2009 - I～III区 航空写真(デジタルモザイク写真)

2 2009 - I区 調査地全景(東から)

3 2009 - I区 調査地東半部(南から)

4 2009 - II区 調査地全景(東から)

5 2009 - III区 調査地全景(北東から)

写真図版13 2007 - I・II区出土遺物1

写真図版14 2007 - I・II区出土遺物2

写真図版15 2007 - I・II区出土遺物3

写真図版16 2007 - I・II区出土遺物4

写真図版17 2007 - I・II区出土遺物5

写真図版18 2007 - I・II区出土遺物6

写真図版19 2007 - I・II区出土遺物7

写真図版20 2007 - I・II区出土遺物8

写真図版21 2007 - I・II区出土遺物9

写真図版22 2007 - I・II区出土遺物10

写真図版23 2007 - I・II区出土遺物11

写真図版24 2009 - I～III区出土遺物

第Ⅰ章 調査の位置と経緯・経過

今回の調査の対象となる「県道山田岸上線」は、橋本市を東西に横断する国道 24 号線と南北に縦貫する国道 371 号線に連絡し、大阪南部へのアクセス道路としての役目を担っている。現状では、既設路線としての「県道山田岸上線」は 1 車線であるため交通混雑の悪化と安全性の低下が進み、主要幹線道路として十分に機能を発揮できない状況にあった。そのため、対象となる新設路線は、現道の交通問題に対処し、地域に活力とゆとりをもたらすために、2 車線道路として整備することになっている。

このような役目を担って県道山田岸上線道路改良工事が計画されたが、予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地「神野々Ⅰ遺跡」（図 1 の橋本市 55）内に位置するため、事業課である伊都振興局建設部道路課より文化財保護法 94 条の通知が県教育委員会に提出され、これに対して県教育委員会は、平成 16 年 9 月 21 日付け文第 8 号の（30）で確認調査の必要な旨と工事立会を通知した。

ただし、歩道拡幅工事部分については立会調査の措置をとることが適当であると県教育委員会により判断されたため、歩道拡幅予定地のうち国道 24 号線神野々交差点付近の工事立会が平成 18 年 1 月 26 日・29 日に実施され、平成 18 年 2 月 17 日付け文第 159 号の（10）で立会調査結果について伊都振興局建設部道路課に報告がなされた。

その後、平成 18 年 2 月 21 日に J R 和歌山線付近の本体工事部分及び工事部分に取り付く仮設道部分の工事立会が県教育委員会により実施された結果、後述するように包蔵地範囲外の地点において遺物・遺構が確認されたため、和歌山県知事より平成 18 年 2 月 24 日付け伊建道第 164 号で遺跡発見通知が県教育委員会に提出された。その結果、平成 18 年 3 月 9 日付け文第 547 号で和歌山県教育委員会教育長により周知の埋蔵文化財包蔵地範囲変更が通知され、「神野々Ⅰ遺跡」の範囲が拡大した。

また、J R 和歌山線付近の本体工事部分については、以南の道路工事に先立ち平成 18 年度当初より工事に着手する予定であったが、当該工事部分が遺構・遺物が発見され包蔵地範囲に包括されることとなったため、遺跡の取扱いについて県教育委員会と伊都振興局建設部道路課との再度の協議が行われた。その結果、当該工事部分における遺構の分布する範囲については、県教育委員会が工事立会を引き続き実施することにより記録保存の措置を取ることとし、2 月 28 日・3 月 3 日に調査が実施された。

その後、当該工事立会地点以南の工事予定地のうち神野々字竹之垣内 526－1、530－2 について、平成 18 年 9 月 1 日付けで伊都振興局建設部長より発掘調査依頼が県教育委員会に提出され、平成 18 年 9 月 6 日付け文第 116 号の（2）によりこれが受諾された。確認調査は、県教育委員会により平成 18 年 9 月 12～19 日に実施された（図 4 の第 1～8 トレンチ及び 1・2 グリッド）。

確認調査の結果、工事立会及び確認調査地点の内、道路本体工事予定地について遺構の展開する範囲と認識され、記録保存のための本発掘調査を要する範囲が第 1 次調査範囲として示された。当該発掘調査は、平成 19 年 9 月 4 日～平成 19 年 12 月 14 日にかけて、面積 1,300 m²（対象面積 1,357 m²）について

表 1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程表

調査回数	年度	平成19年度												平成21年度												平成22年度												
	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
第1次調査	I区 II区																																					
第2次調査	I～III区																																					
出土遺物等整理 報告書印刷期間含む																																						

実施した。

その後、平成 19 年度本発掘調査の南側に隣接する神野々字竹之垣内 525－3 については、平成 20 年 9 月 1 日付けで伊都振興局建設部長より確認調査依頼が提出され、和歌山県教育委員会教育長は平成 20 年 10 月 16 日付け文第 329 号の（3）で受託し、第 2 次確認調査（第 9 トレンチ）が実施された。

さらに、第 2 次確認調査対象地の東側に隣接する神野々字下長尾 573－2 についても、平成 21 年 2 月 16 日付けで伊都振興局建設部長より確認調査依頼が提出され、和歌山県教育委員会教育長は平成 21 年 5 月 13 日付け文第 128 号の（2）でこれを受託し、第 3 次確認調査（第 10 トレンチ）が実施された。

平成 20 年度の確認調査の結果を受けて、道路本体工事予定地について遺構の展開する範囲と認識され、記録保存のための本発掘調査を要する範囲が第 2 次調査範囲として示された。当該発掘調査は、平成 21 年 11 月 3 日～平成 22 年 4 月 20 日にかけて、面積 256 m²（対象面積 298 m²）について実施した。

今次の調査地は、神野々 I 遺跡全体の中では北端に該当し、近隣の開発に対処するための基礎資料を得るために調査の行われた神野々廃寺（図 1 の 42）の北側に位置する。このことから寺院造営に係わる奈良時代から中世における遺跡周縁部の土地利用の在り方が解明されるところであった。

なお、今次の調査地の隣接地範囲においても随時、和歌山県教育委員会が伊都振興局建設部と遺跡の取扱いについて協議していくことになっている。

地元への対応

今回の調査を地域史の流れを総合的に理解する手助けとして、当文化財センターでは、地中に埋もれた文化財としての歴史的な観点から、調査の内容を近隣の住民の方々に普及・広報することを一つの目的として業務を実施した。

当該地区では、古くから神野々廃寺の塔跡がよく知られていたことから、遺跡の所在することへの認知度は高い状況にあった。そこで、遺跡調査の開始を地元の説明したところ、一様に高い関心を示された。また、第 1 次発掘調査時には、近隣住民の方々も非常に高い関心を示し、すぐに現地説明会の開催の要望が出ていた。そんな中、橋本市立西部小学校 6 年生の現地見学の希望があり、平成 19 年 10 月 25 日（木）に児童 46 名・引率教員 3 名の現地見学会を行った。

別途、伊都振興局より当該地区自治区関係者に対して、文化財調査の着手・工程に関する説明要請があった。また、2007－Ⅱ区の調査状況の概要が把握できた段階で段取りを進め、平成 19 年 10 月 28 日（日）に現地公開・説明会を開催した。説明会では、地元の方を中心に約 30 名の参加を得ることができた。

また、調査地北側では、既に大鉄工業株式会社による「紀伊山田・高野口間岸上架道橋新設」工事の着手施工が成されており、調査対象地の一部は既に工事用進入路となっていた。調査中においても工事用機材等の搬入・搬出車両の通行のための工事用進入路を確保する必要があった。そのため、発掘調査工事の施工に当って、伊都振興局建設部道路グループ・大鉄工業株式会社との間で綿密な工程調整が必要であった。

さらに、第 2 次発掘調査では、調査対象地が隣接する店舗の駐車場への出入り口となっていたため、地権者から調査へのご理解とご協力を得て、調査期間の中で中止期間を挟むものの調査を完了することができた。

第Ⅱ章 神野々Ⅰ遺跡の歴史的環境

第1節 地理的環境

神野々Ⅰ遺跡（図1の橋本市55）は、和歌山県橋本市神野々に所在し、紀の川河口から約40km遡った右岸に位置する。従来、弥生時代から中世にかけての遺物散布地として知られていた。古代には紀伊国伊都郡村主郷、中世には高野山領官省符荘紺野村に属し、近世には伊都郡官省符荘神野々村と呼ばれていた地域である。

神野々Ⅰ遺跡は、和泉山脈を後背に控えた紀の川の北岸に形成された標高87～93m前後の低位段丘上に位置する。遺跡の東側は、紀の川へ注ぐ吉原川の開析によって比高10m以上の深い谷が形成されており、西側にも浅い谷が存在したことが確認されている。現在は、神野々廃寺（市42）の東方で西流する紀の川が大きく南へ蛇行し、河岸段丘に沿って張り出す平地が形成されているが、寺院跡の南約200m、吉原川の東側に紀の川の旧堤防の痕跡を確認することができる。

また、この吉原川以西から旧高野口町へ広がる紀の川北岸には応其条里とよばれる良好な条里型地割が遺存していることから、本来紀の川は河岸段丘に沿ってほぼ真っ直ぐ西流していたと考えられる。紀の川北岸は和泉山脈の南縁であり、南岸は紀伊山地の北縁にあたる竜門山脈である。兩岸の山脈は並走してその間に紀の川河谷が形成され、低位段丘上に多くの遺跡が分布している。

第2節 歴史的環境（遺跡番号の数字は、橋本市は「市」、旧高野口町は「町」を冠して表現する）

紀の川流域は、大和に都が置かれていた時代、大和から紀伊を経て淡路に至る南海道が通じていた。伊都郡、那賀郡を経由して名草郡に至り賀太から淡路へ渡る沿道には、神野々廃寺をはじめ佐野廃寺（伊都郡かつらぎ町）、西国分廃寺（岩出市西国分）、上野廃寺（和歌山市上野）など7世紀後半に創建された10箇寺と紀伊国分寺、国府や萩原、名草、賀太の各駅家が点在しており、古代における主要交通路であった。平安京に都が移り官道としての機能を失った後には、大和の社寺参詣のための大和街道、あるいは伊勢神宮に参詣するための伊勢街道と呼ばれてきた



写真1 柏原遺跡の方形周溝墓群（北東から）

周辺の遺跡としては、紀の川北岸では縄文時代から古墳時代にかけての市脇遺跡（市23）、弥生時代の柏原遺跡（市48：写真1）・東家遺跡（市74）、名古屋Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡（旧高野口町5・

6・10）などの集落遺跡、奈良時代から中世にかけての遺物散布地である神野々Ⅱ遺跡（市56）がある。また、名古屋Ⅰ・Ⅲ遺跡、高尾遺跡（町9）では搬入品を含む弥生時代中期の土器、神野々廃寺（市42）の瓦窯である山田瓦窯跡（市34）では弥生時代後期の土器が、神野々廃寺でも中期弥生土器が出土している。そして、丁ノ町・妙寺遺跡（かつらぎ町丁ノ町・妙寺）では縄文時代後期・弥生時代中期から中世にかけての遺構・遺物が数多く検出されている。

表2 神野々Ⅰ遺跡と周辺の遺跡地名一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	立地	摘要
橋本市(旧高野口町)						
1	平山城跡	応其	城館跡	中世	丘陵	曲輪、城山、消滅
2	平山城抜穴	応其	城館跡	中世	山麓	水路跡、消滅
3	名古曽墳墓	名古曽	墳墓	奈良	丘陵	石櫃、三彩蔵骨器
4	名古曽廃寺跡	名古曽	寺院跡	奈良	丘陵端	塔、金堂、法起寺式伽藍配置?、瓦、須恵器
5	名古曽Ⅰ遺跡	名古曽	散布地	弥生～奈良	河岸段丘	弥生土器、須恵器、石器、溝、土坑
6	名古曽Ⅱ遺跡	名古曽	散布地	弥生～中世	河岸段丘	石鏃、弥生土器、中世屋敷跡
7	応其古墳	応其	古墳	古墳	丘陵	円墳
8	応其窯跡	応其	窯跡	平安～鎌倉	丘陵裾	瓦
9	高尾遺跡	名古曽	館跡	中世	河岸段丘	土師質土器
10	名古曽Ⅲ遺跡	名古曽	集落跡	弥生～	河岸段丘	石鏃、方形周溝墓、竪穴住居跡
11	小田遺跡	小田	散布地	古墳～	河岸段丘	須恵器
12	名古曽Ⅳ遺跡	名古曽	散布地		丘陵裾	溝、土坑
13	応其Ⅰ遺跡	応其	散布地	弥生～奈良	河岸段丘	弥生土器、サヌカイト片、須恵器、溝、土坑
14	応其Ⅱ遺跡	応其	散布地	奈良	丘陵	須恵器
15	応其Ⅲ遺跡	応其	散布地		丘陵端	須恵器
16	伏原Ⅰ遺跡	伏原	散布地	縄文～中世	河岸段丘	縄文土器ほか
17	伏原Ⅱ遺跡	伏原	散布地		河岸段丘	
19	名古曽一里塚	名古曽	一里塚	近世	丘陵裾	北塚残存
20	名古曽中世墓	名古曽	墓地	鎌倉	丘陵	瓶子
21	塙坂屋敷跡	名古曽	屋敷跡	中世	河岸段丘	
22	小田屋敷跡	名古曽	屋敷跡	中世	河岸段丘	
23	塙田屋敷跡	伏原	屋敷跡	中世	河岸段丘	堀跡?
橋本市						
20	陵山古墳	古佐田	古墳	古墳	丘陵	円墳、周濠、玉類、鉄刀、小札、土師器、須恵器、埴輪(円筒・形象)
21	古佐田遺跡	古佐田	寺院跡?	奈良	丘陵上	瓦多数(窯跡の可能性有り)
22	橋本一里塚	橋本	一里塚	江戸	河岸段丘	
23	市脇遺跡	市脇	集落跡	縄文～古墳	丘陵端	竪穴住居、土坑、縄文土器、石鏃、土錘、弥生土器、石包丁、土師器
24	陀羅尼寺跡	東家	寺院跡		丘陵端	
26	東家古墳	東家	古墳	古墳	山腹	円墳、須恵器
27	善福寺跡	向副	寺院跡	中世	山腹	
28	定福寺九重塔	賢堂	石塔	鎌倉	丘陵端	
29	市脇古墳群	市脇	古墳群	古墳	山麓	円墳8基
30	医王寺跡	市脇	寺院跡		丘陵端	
32	堂の浦古墳	柏原	古墳	古墳	丘陵端	円墳
33	仏性寺古墳群	柏原	古墳群	古墳	山麓	円墳2基
34	山田瓦窯跡	神野々	窯跡	奈良	丘陵端	瓦
35	時雨山遺跡	神野々	散布地	弥生～奈良	山頂	石斧、須恵器、神功開宝
36	神野々古墳	神野々	古墳	古墳	山腹	円墳
37	西畑古墳	西畑	古墳	古墳	山腹	組合式石棺、須恵器
38	学文路砦跡	学文路	城館跡	中世	山頂(国城山頂)	
39	学文路Ⅱ遺跡	学文路	散布地	弥生	丘陵端	弥生土器
40	学文路Ⅰ遺跡	学文路	散布地	弥生	丘陵端	石剣、土器
42	神野々廃寺	神野々	寺院跡	奈良	河岸段丘	塔跡残存、瓦
48	柏原遺跡	柏原	散布地	縄文～中世、近世	丘陵	竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓群、弥生土器、サヌカイト、土師器、須恵器、瓦器、管玉、土偶
50	学文路Ⅲ遺跡	学文路	散布地	弥生	河岸段丘	弥生土器
53	東家Ⅱ遺跡	東家	散布地	旧石器	台地	
55	神野々Ⅰ遺跡	神野々	散布地	弥生～中世	河岸段丘	弥生土器、サヌカイト片
56	神野々Ⅱ遺跡	神野々	散布地	奈良～中世	河岸段丘	土師器、須恵器、瓦、陶磁器
57	南馬場遺跡	南馬場	散布地	室町～江戸	河岸段丘	土師器、陶磁器
58	市脇東膳那古墳群	市脇	古墳群	古墳	丘陵端	円墳3基
60	銭坂城跡	野	城館跡	中世	台地	堀、土塁、空堀
61	妙楽寺	東家	寺院跡	中世	丘陵端	瓦
74	東家館跡・東家遺跡	東家	集落跡 城館跡	弥生～中世	台地	弥生土器、瓦器、空堀
76	土居の腰跡	向副	城館跡	中世	台地端	
77	神谷屋敷跡	西畑	城館跡	中世	山麓	
78	薬師山砦跡	学文路	砦跡	中世	山麓	
79	西尾山砦跡・畑山出城跡	学文路	砦跡	中世	丘陵	
80	学文路土居跡	学文路	城館跡	中世	山麓	
90	神野々Ⅲ遺跡	神野々	出土地	弥生	河岸段丘	弥生土器
九度山町						
1	真田古墳	九度山	古墳	古墳	河岸段丘	横穴式石室、須恵器、土師器
5	入郷遺跡	入郷	散布地	縄文	丘陵端	石鏃、サヌカイト片
9	真田屋敷跡	九度山	城館跡	中世	河岸段丘	郭
10	横ノ尾砦跡	九度山	中世		台地	
	遺跡内での調査履歴有り					和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地地名表』 2007年3月31日発行を一部改変・補筆

これらの遺跡が位置している中位段丘から低位段丘上には古墳が点在しており、なかでも陵山古墳（市 20）は 5 世紀後半に築造された周濠をめぐらし割石積みの横穴式石室をもつ円墳である。群集墳としては市脇古墳群（市 29）、市脇東膳那古墳群（市 58）、仏性寺古墳群（市 33）があり、これを除けば応其古墳（町 7）、神野々古墳（市 36）、東家古墳（市 26）、堂の浦古墳（市 32）、八幡宮古墳（市 7）などいずれも群を構成しない横穴式石室をもつ円墳である。一方、紀の川南岸では弥生時代の上田遺跡（市 17）、学文路Ⅰ・Ⅱ遺跡（市 40・39）が確認されているのみで、遺跡の数は少ない状況となる。

奈良時代には、調査地の南方約 200m に神野々廃寺、神野々廃寺の西方約 1.2km には名古曽廃寺（町 4）、東北東方 3.5km に古佐田遺跡（市 21）、そして西方約 8.5km に佐野廃寺（かつらぎ町佐野）の 4 箇寺が建立され、紀伊国における造営寺院の一密集地域を形成している。また、名古曽廃寺の北東方の丘陵斜面には、応其条里を前面に見渡せる位置に三彩蔵骨器（写真 2）の出土で知られる名古曽墳墓（町 3）が所在する。



写真 2 名古曽墳墓出土の蔵骨器

また、中近世においてこの地域一帯は、高野山領官省符荘の地であったことから、荘園に関連した条里型地割の景観が良好に遺存している地域でもある。このことから、当地域には往時の条里型地割の土地利用を反映した小字名が良好に遺存している（図 34・35）。

このように、神野々Ⅰ遺跡の周辺部は、縄文時代から現在に繋がる紀の川中流域東部の中心的地域の一つであったと言える。また、紀の川に並走する古代の南海道や中近世の街道・河川交通路によって、現在に至っても奈良県（大和盆地）や大阪府（南河内・河内）と密接かつ重要な関係を保ってきた地域と言える。

第 3 節 神野々廃寺の調査（図 2・35、写真 3）

ここでは、神野々Ⅰ遺跡と密接に関係する神野々廃寺の範囲確認調査について、経過と成果の概略を記述しておく。神野々廃寺の発掘調査は、国庫補助事業として昭和 51 年度、同 56 年度・同 57 年度にわたる 3 次の調査が実施された。

神野々Ⅰ遺跡に近接する神野々廃寺では、南側約 200 m に塔跡だけが残るのみで、寺院伽藍を構成した他の主要な金堂・講堂・中門などの堂宇については明らかではなく、過去に埴仏、あるいは軒平瓦・軒丸瓦などの遺物が採取されていた程度である。そのため、昭和 50(1975) 年代に至って塔跡周辺の開発が急速に進展し、早急に神野々廃寺の伽藍配置を明らかにすると



写真 3 神野々廃寺塔心礎（南から）

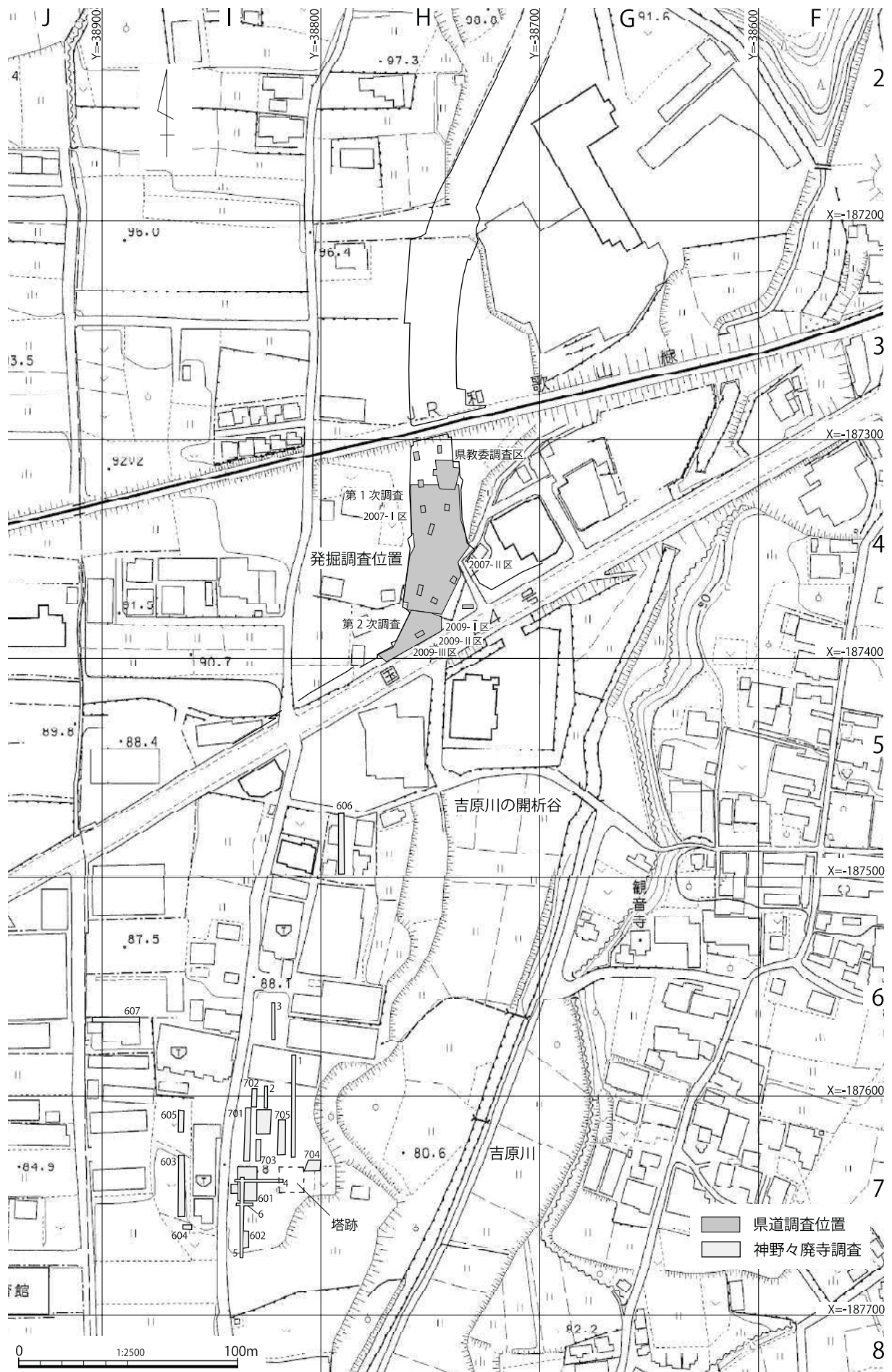


図2 調査位置と区画割(100m 区画)

もに、今後の保存措置の基礎資料を作成する緊急性が生じ、橋本市教育委員会は、昭和 51 年より調査を実施した。

この調査では、金堂の確認に主眼を置き現存する塔跡を中心に調査区を設定している（図 2 の 1 ～ 6 トレンチ）。塔跡は、基壇縁に川原石をめぐらす乱石積みの基壇で、土壇は版築を伴うものであることが明らかとなった。金堂の推定地に設定された調査区では、掘立柱建物・溝などが検出されたが、いずれも中世以後のものであった。

その後、神野々地区をはじめその周辺部の生活環境が整備されるのに伴い、周辺部から急速に開発の波が寺域内にまで及ぶようになってきた。この動きに対処するため橋本市教育委員会では、寺域の保存資料を作成する必要性が生じ、昭和 51 年度の調査で確認に至らなかった主要伽藍の確認調査を昭和 56 年度の国庫補助金の交付を受けて実施する運びとなった。

調査は、前回の調査に一部重複する位置に調査区を設定して行った（図 2 の 601 ～ 607 トレンチ）。現存する塔跡の位置と周辺の地形及び周辺に僅かに名残を止める条里型地割の遺構等から判断して塔の西側に金堂を、その背後に講堂を配した法起寺式伽藍配置をとるものと推定して行われたが、寺跡と結びつくものは伽藍の西端に限ると推定される南北溝を検出したにとどまった。この調査においても、瓦溜まり・土坑・溝・柱穴等を検出しているが、いずれも中世のものであり、出土遺物も須恵質捏ね鉢、土師器土鍋・土釜・皿、瓦器碗等があり、前回の調査と同様に寺院廃絶後の中世集落の存在を示唆するものが多かった。また、神野々 I 遺跡に関連するものとして、当該年度の調査の内、寺域推定地の北西側に設定した 607 調査区において、整地層とみられる灰褐色土層から、奈良時代や中世の遺物と共に弥生土器が出土している。

昭和 51・56 年度の調査によって主要伽藍を確認することができなかったため、引き続いて、昭和 57 年度国庫補助事業として主要伽藍の確認調査を再度実施する運びとなった。

この調査においても、各地点（図 2 の 701 ～ 705 トレンチ）から瓦の出土はみるものの堂宇を確認するまでには至らなかった。北側に続く一段高くなった講堂跡推定地についても寺院の存在を裏付ける遺構の確認ができなかったことは、塔跡を遺し後世に削平されたものと考えられている。

それ以後、周辺部の開発が急速に進んでいるが、本格的な調査が実施されることはなく、開発に伴う工事立会が主な対応となっている。その中でも、今回の神野々 I 遺跡の調査地を挟んで、国道の南側では弥生時代中期の土器の出土が確認されている。

これらの調査から、神野々廃寺は、寺跡が立地する段丘の東側は吉原川の深い谷に隔てられ、西側も発掘調査で浅い谷が確認され、条里の境界が塔跡のすぐ東側にくることなどから、塔が東側にある法起寺式伽藍配置であったと推測されていた。神野々廃寺の創建時の瓦は川原寺式で、後に藤原宮式になるが、以降の瓦の出土はみられず、短期間で法灯が絶えたと推測されている。

第Ⅲ章 発掘調査の方法と成果

本事業は、県道山田岸上線の道路改良工事に伴って発掘調査を実施した。平成 19 年度・同 21 年度の対象地区は、橋本市神野々字竹之垣内 526－1 番地・530 番地・531 番地、下長尾 573－2 番地等に位置する。また、北側は小字「東竹鼻」、西側は「西竹鼻」、南側は「下長尾」と称されている。調査地は、『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』（2007 年（平成 19 年）発行 和歌山県教育委員会）では、神野々 I 遺跡の範囲内にあたる。

平成 19 年度の調査は、既に着手施工されている「紀伊山田・高野口間岸上架道橋新設」工事の進入路確保のため対象地を 2 分割して実施した。平成 21 年度の調査では、隣接する店舗への進入路確保のため、調査区を南北に 3 分割して実施した。盛土・表土層・耕作土、中近世に係る耕作土等は重機で掘削・排土し、弥生時代後期から奈良時代の遺物を包含する堆積層及び遺構は人力で掘削を行った。掘削作業と併行して、遺構の実測及び写真撮影を実施し、調査記録を作成した。また、発掘調査と併行して出土遺物の洗浄作業等を主とした応急整理作業を行った。

調査地の遺構図面作成等のため、既存の公共基準点から 3 級基準点を設置し、各調査地内に 4 級基準点を設置した。また、ラジコンヘリコプターを使用して調査地全体の写真撮影を実施した。

第 1 節 調査現場の記録作業

神野々 I 遺跡の調査に伴い、下記に示す記録作業を行った。

1 写真撮影作業

記録保存としての写真撮影作業は、中判カメラ（6×7 判：白黒フィルム・カラーポジフィルム）・小判カメラ（35mm 判：白黒フィルム・カラーポジフィルム）・小型デジタルカメラにより、主に発掘調査の状況、検出遺構・遺物の出土状況、断面土層等を撮影した。また、速攻性に優れた小型デジタルカメラにより作業状況や作業工程をメモ用の記録画像として撮影している。これは、従来の小判カメラ 35mm 判でのカラーネガフィルムの代替で、メモ記録としては非常に有効な手段である。

2 実測図作成作業（写真 4）

記録保存としての実測図作成作業は、各遺構面の検出遺構の遺構位置全体図（縮尺＝1／100）・全体の遺構平面実測図（縮尺＝1／20 or 1／50）・個別遺構や遺物の出土状況図（縮尺＝1／10 or 1／20）・個別遺構の断面土層図（縮尺＝1／20）を作成した。

また、調査地区の遺存状態の良好な壁面に対して断面土層図（縮尺＝1／20）などを記録として作成した。



写真 4 2007－Ⅱ区 1 水溜め遺構図面作成（西から）

3 航空写真撮影・基準点測量（写真 5）

今次の調査地の遺構図面作成や遺物の取上げ等のため、既設の公共基準点を利用して3級基準点（3-1、補助点S1・3-1A・3-1B）を設置し、国土座標第VI系（世界測地系）により各地区内に4級基準点を設置した。併せて、4級基準点にも水準測量を行っている。

発掘調査により検出した遺構は、ラジコンヘリコプターで調査地全体の航空写真撮影を行った。基準点の設置と撮影作業を併せて、第1次発掘調査では、「平成19年度 神野々Ⅰ遺跡発掘調査に伴う航空写真撮影・基準点測量」として、第2次発掘調査では、「平成21年度 神野々Ⅰ遺跡発掘調査に伴う航空写真撮影・基準点測量」の委託事業名で、専門業者（株式会社 南紀航測センター）に委託して実施した。今次の調査では、確認調査の結果を受けて、遺構密度が低いと判断されていたため航空写真測量は実施していない。



写真5 2007-Ⅱ区 航空写真撮影

第2節 出土遺物等資料の整理

1 出土遺物応急整理等

応急整理作業（写真6）

出土遺物については、調査の進捗に伴い、調査方法の判断資料として時期決定を行い、調査を円滑に進めていく必要があるため、また、現地公開・説明会において公開する目的をもって、調査現場の監督員詰所において出土遺物の一部について応急的な洗浄作業を実施した。

また、出土遺物の総体的な把握と調査報告書作成までの収納・管理を目的とした出土遺物登録台帳の作成作業を行い、ほぼ全てを完了した。しかし、出土遺物の詳細な内容登録までは行っていない。



写真6 出土遺物の洗浄（応急整理）

2007-Ⅱ区A段 1水溜め遺構（写真7、写真図版8）

1水溜め遺構については、立地と構造上から鎌倉時代の水洗トイレの可能性が考えられるが、検出遺構のみでは俄かに判断が付き難いため、遺跡での古環境やトイレ状遺構に関して造詣の深い金原正明氏（国立大学法人奈良教育大学 教育学部准教授）に調査現地において指導を賜った。金原氏も検出遺構のみでは判断し難いため、1水溜め遺構に関する堆積土壌を採取して持ち帰り、寄生虫卵の分析及び微化石分析を行って頂けることになった。



写真7 1水溜め遺構についての調査指導

2 出土遺物等整理業務

調査で出土した遺物は、応急的な整理のみであったため、調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行うと共に、遺構図面・遺構写真などの調査資料の整理を行い、資料登録台帳などを作成した。

出土遺物は、通常の遺物収納コンテナ（28ℓ）にして55箱と遺物収納コンテナに収納できない水溜め遺構の曲物・側板材・側板石等である。出土遺物の整理は、『財団法人和歌山県文化財センター 発掘調査マニュアル（基礎編）』に準拠して、全遺物を対象に台帳登録数量化・遺物洗浄・遺物の調査コードと出土遺物登録番号の注記（写真8）・遺物破片点数等の集計（表3）・接合作業（写真9）を行った。

これらの作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材等による補強・復元（写真10）・遺物実測（写真12・13）・実測遺物台帳登録・金属製品の錆取り（写真11）・実測図トレース・トレースレイアウト・遺物実測図の整理・遺物写真撮影・遺物写真の整理、集計登録データ等入力（写真16）を行った。さらにこれらの遺物の中から、各々の遺構・整地土・堆積層の時代・性格の理解に必要と思われる主要なものを抽出して調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構図面の整理は、台帳登録・報告書用図面等の作図・図面デジタルトレース（レイアウト）（写真14）を行い、調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構写真・遺物写真撮影の整理は全写真を対象に、アルバム収納（写真15）・登録番号の記載作業を行った。これらの中から、主要な遺構の調査状況の写真及び遺物写真を抽出してレイアウトし、調査報告書に掲載する写真図版原稿を作成した。

登録台帳データ入力作業・遺物整理・調査報告書作成に伴う諸作業について、短期雇用賃金職員の整理補助員・整理作業員が担当した。

なお、出土遺物登録に伴う遺物破片点数の数量化は、全ての遺物について大凡の時代と主要となる土器類・その他の遺物に分けて作業を進めた。土器の種類・器種は、矛盾のない程度に簡素化した。



写真8 遺物（土器）への登録コード注記



写真9 遺物の接合



写真10 遺物充填材による補強・復元

また、出土遺物等整理業務において、木製品の内、下駄1点・曲物底板1点・建物柱材1点は水漬けのまま、水溜め遺構の曲物1点・側板1点は実測・写真撮影後に時間をかけて自然乾燥させている。

これらの作業によって纏められた調査成果は、『神野々Ⅰ遺跡―県道山田岸上線道路改良工事に伴う発掘調査報告書』2011・03に掲載した。印刷・製本は、白光印刷株式会社に委託業務として実施した。

なお、発掘調査・出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は、財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。



写真 11 金属製品の錆取り



写真 12 出土遺物の実測図作成（須恵器）



写真 13 出土遺物の実測図作成（弥生土器）



写真 14 遺構図面デジタルトレース（レイアウト）



写真 15 遺構写真のアルバム収納



写真 16 集計登録データ等入力

第3節 調査地の地区割

調査の地区割は、和歌山県内全域を同一条件で統一したものがないため、和歌山県文化財センター「発掘調査マニュアル（基礎編）」（2006年4月）に準拠して、今回の一連の県道山田岸上線道路改良工事に伴う神野々Ⅰ遺跡に関連する橋本市域を対象として、加えて、橋本市全域の調査に供するものを新たに作成した。

地区割は、今後の調査に共通して使用できるように橋本市発行の縮尺1／2500の「橋本市基本図」18～54（昭和52年・同57年撮影・測図、平成19年3月世界測地系により修正：写測エンジニアリング株式会社調整）を基本として、世界測地系（国土座標第Ⅵ系）による図面を作成して行った。今回の神野々Ⅰ遺跡の調査では、V1－QD 20－1（橋本市基本図33）・V1－QD 20－3（橋本市基本図39）該当区の橋本市基本図を使用した。

調査地の地区割は国土座標第Ⅵ系（世界測地系）を使用し、橋本市の東端（奈良県境）の座標ラインを基準として、将来的な調査を含めて上記した任意の範囲について区画割を行なった。一部北側と南側の山間部を除いた橋本市域を網羅する範囲の北東隅に基点（X＝－183.0 km、Y＝－30.0 km）を設けた。この基点からX軸西方向とY軸南方向にそれぞれ1 kmの大区画（1 km方眼）を設定した。これらの呼称は、基点からX軸西方向にⅠ～ⅩⅡ（ローマ数字大文字）、基点からY軸南方向に1～8（算用数字）とした（大区画呼称例 IX 5）。

次いで、1 km方眼の大区画を100等分し、100 m方眼の区画割（中区画）を行なっている。中区画の呼

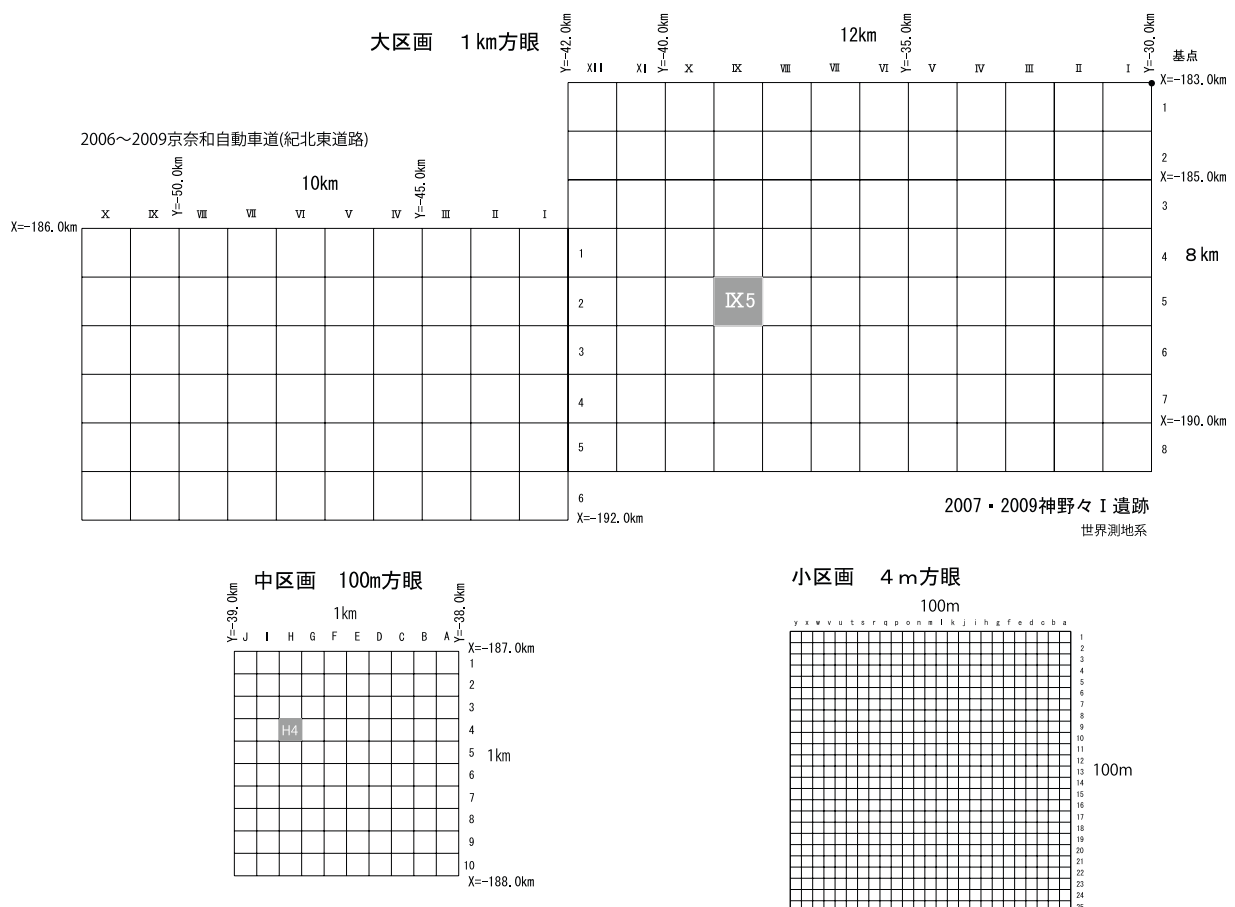


図3 調査地の地区割模式図

称は、各々の大区画の北東隅区画を基点として、X軸西方向にA～J（アルファベット大文字）、Y軸南方向を1～10（算用数字）とした（中区画呼称例 H4）。

さらに、100 m方眼の中区画を625等分し、4 m方眼の区画割（中区画）を行なっている。小区画の呼称は、各々の大区画の北東隅区画を基点として、X軸西方向にa～y（アルファベット小文字）、Y軸南方向を1～25（算用数字）とした（小区画呼称例 j8）。

地区割・区画割（小区画）の使用例として、大区画1×1km⇔中区画100×100m⇔小区画4×4m（⇔地点名）からなり、区画呼称例 IX5－H4－j8（左の区画は、調査地2007－II区の173 竪穴建物の位置を示している）となる。但し、大区画名「IX5－」の表記は、本文中では省略した。

なお、さらに詳細な地点が必要な場合は、座標系の距離で地点を表示することとした。

実測基準点および遺物の取上げは、上記の地区割・区画割（小区画）を使用している。ほぼ全ての橋本市域の調査に対応できるように作成した。

なお、標高は、東京湾標準潮位T.P.+を使用した。

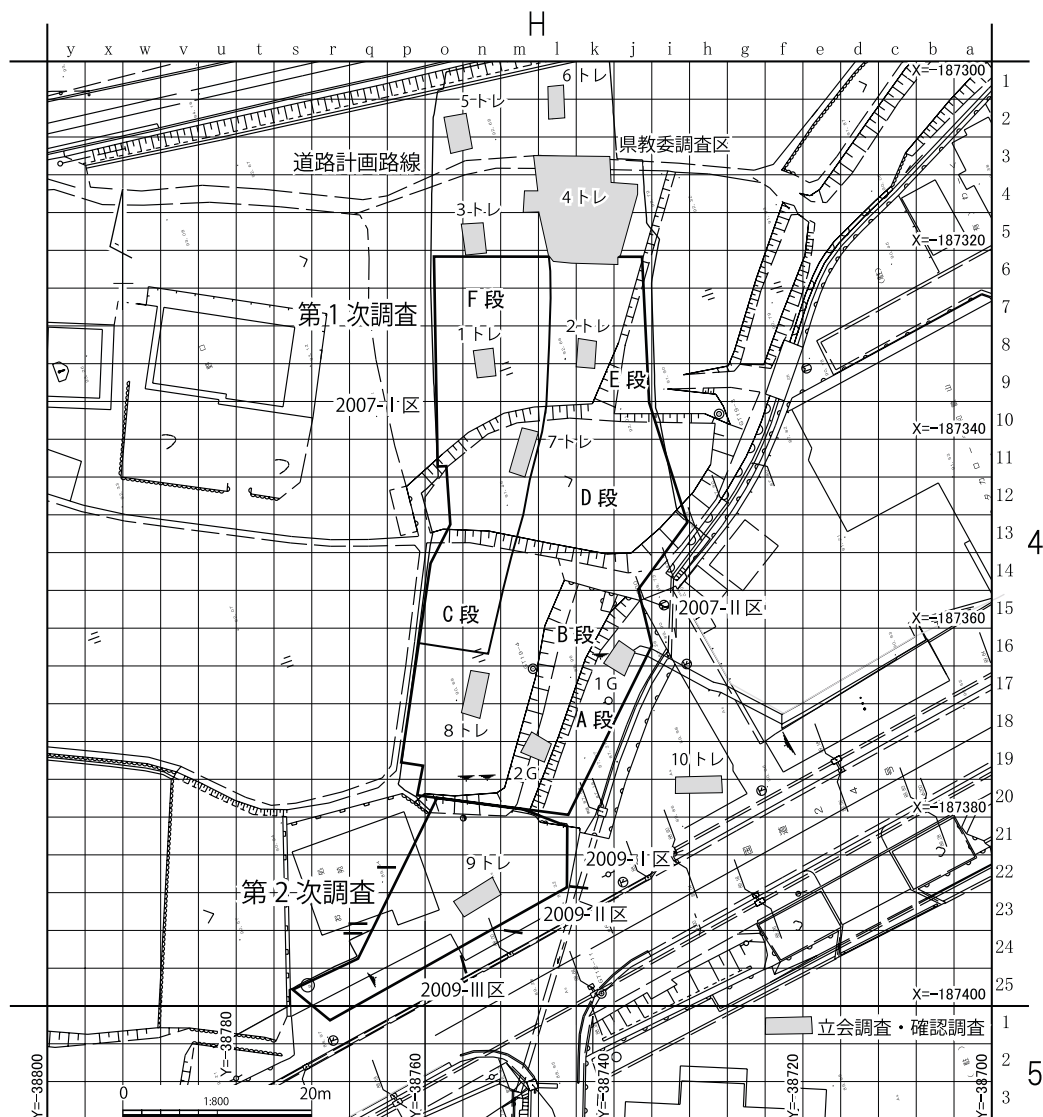


図4 調査範囲と地区割（4m 区画）

第4節 調査成果

平成19年度の調査は、調査区を東西に分割し反転して実施したため、北西側から順に2007－Ⅰ区・2007－Ⅱ区と呼称し、2007－Ⅱ区から調査を行った。また、調査地の地形が吉原川の形成した開析谷へ向かって段を構成するため、各々の段地形を南東側からA～F段と呼称（図4・5）して調査を進めた。

平成21年度の調査は、隣接する店舗への進入路確保のため、調査区を南北に3分割して実施した。北東側から順に2009－Ⅰ区～2009－Ⅲ区と呼称し、2009－Ⅰ区から調査を行った。

検出遺構

2007－Ⅰ区では、2007－Ⅱ区に比較して遺物包含層第4層の広がりがほとんどないが、高位のⅠ区F段でも遺構密度は高い状態にある。2007－Ⅰ区F段において、鎌倉時代の掘立柱建物1棟・柱穴列・柱穴の他、土坑墓と思われる土坑群を検出した。土坑墓と思われる遺構は、奈良時代も含めて前半調査の2007－Ⅱ区D・F段においても数基認められるところである。2007－Ⅰ区C・D段では、近世・近代の水田に伴う耕作跡・水路がある。

2007－Ⅱ区の低位段丘上での堆積層第4層は、大半が平安時代末～鎌倉時代の遺物を包含する堆積層であることが判明した。それに反して、調査地全体で検出した遺構は、弥生時代中期前葉～中葉・弥生時代後期中葉～終末期・奈良時代・平安時代末～鎌倉時代に大別する事が可能となっている。

検出遺構は、調査区の最も高い北側範囲2007－Ⅱ区E・F段から弥生時代中期の土坑、弥生時代終末期の隅円方形竪穴建物1棟、奈良時代の長方形竪穴建物1棟・土坑数基・柱穴、奈良時代ないし平安時代末～鎌倉時代にかけての柱穴・土坑・溝を多数検出した。南側の段丘先端2007－Ⅱ区C・D段でも、奈良時代及び平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物を構成する柱穴が主体を占め、掘立柱建物1棟以上・土坑、鎌倉時代の耕作跡など多数を検出した。

また、2007－Ⅱ区南東側の吉原川（開析谷）へ落ちる谷の斜面地形A・B段に埋った堆積層から大量の遺物が出土した。その谷の斜面地形では、平安時代末～鎌倉時代に土砂が堆積する途中面で水溜めの機能をもつ遺構1基を検出した。

出土遺物（写真図版13～24）

出土遺物は、検出遺構と同じく弥生時代中期前葉～中葉、弥生時代後期中葉～終末期、奈良時代、平安時代末～鎌倉時代の4時期に大別できる土器類を主体としたものである。中には、石製品・金属製品・木製品、自然遺物も含まれる。2007－Ⅱ区南東側の開析谷へ落ちる斜面地形に埋積した包含層からは、調査段階では層位毎に時期区分が可能な状態と判断していたが、整理の結果、大きく奈良時代と鎌倉時代に画期のあることが判明した。

1 基本的な層序（図6・21、表3）

2007－Ⅰ区のF段北西側・C・D段の大半は、水田耕作土・床土直下が基盤層となる。2007－Ⅱ区の南東側に向うに連れ（開析谷側）遺物を包含する堆積層が良好に遺存する。2009調査区では、後世の改変が著しく、旧耕作土及び遺物包含層は一部に遺存するのみであった。

第1層 第1層は、2.5Y3／1黒褐色シルト・細砂を基本とする。現代の水田耕作土若しくは表土層である。各段の南・東端では、水田に伴う畦畔や里道の確保のための盛土が認められる。

第2層 第2層は、10YR5／6黄褐色＋2.5Y5／2暗灰黄色細砂・シルトを基本とする。現代の水田耕作土に伴う床土である。



図5 調査範囲と周囲の地形(4m区画)

第3層 第3層は、鎌倉時代の遺物を主体とし、一部では江戸時代の遺物を微量包含する旧耕作土に関する堆積層である。2007－Ⅱ区E・F段の調査区東壁付近に良好に遺存し、2.5Y5／1黄灰色＋10YR4／2灰黄褐色細砂・シルト若しくは、2.5Y5／2暗灰黄色＋5／1黄灰色細砂・シルトを基本とする。大別して、第3a層～第3d層の4面の耕作土層とそれに伴う床土である。江戸時代の遺物は、F段の範囲から出土した8点（第3層関係（層序要素14～16）での小計1,125点）の陶磁器等がある。

C段南西範囲では、試掘調査の第4層の一部が第3層に含まれる堆積層である。A・B段では、2.5Y5／2暗灰黄色細砂・シルト若しくは、10YR5／2灰黄褐色～4／2灰黄褐色細砂・シルトを基本とし、谷地形の斜面に堆積した第3層で、大きく第3a層～第3c層の3層に大別できる。江戸時代の遺物は、C段から1点（第3層関係（層序要素12）での小計576点）、A・B段から2点（第3層関係（層序要素11）での小計596点）の陶磁器等がある。

以上、第3層には江戸時代の遺物が微量混在するが、基本的に中世の耕作土及び堆積土と考えたい。

第4層 10YR4／1褐灰色細砂・シルトを基本とし、2007－Ⅱ区C・D・F段の一部の範囲に広がりを見せる。E・F段での第4層は、主に遺構の埋土となる。第4層からも2点（第4層関係（層序要素12・13）での小計939点）の江戸時代の遺物が出土しているが、基本的には中世の堆積土と考えられる。

基盤層 基盤層は、遺構検出面や調査区壁面の側溝において大別7層を確認した。2007－Ⅰ区F段を北東側から南西側にかけて粗砂細礫層が、2007－Ⅱ区D段南東側からC段東端にかけて粗砂礫層が斜行する。

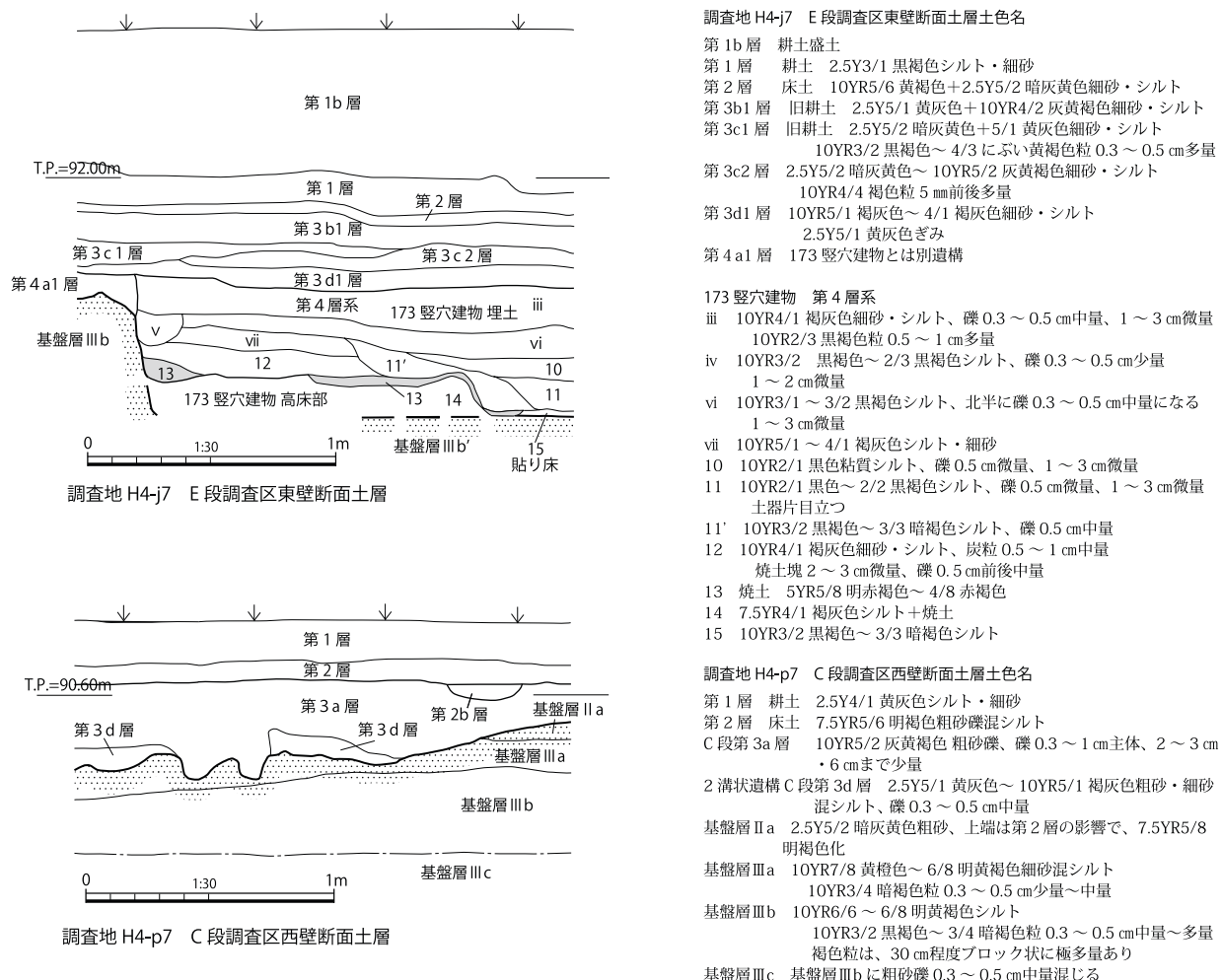


図6 調査地の基本層序

2 検出遺構と出土遺物

1) 2007 - I・II 区の調査 (図 6 ～ 22・26 ～ 33、写真図版 2 ～ 11・13 ～ 23)

遺構検出面の状況

現地表の高さは、後世の開発に伴い変化しているが、基本的に北西側から南東側の吉原川の開析谷に向かって低くなり、階段状に整地された複数の水田 (A 段～F 段) から構成されている。

低位段丘の各縁辺に共通して僅かに中世遺物包含層 (C 段の第 3 層系堆積層：旧水田耕作土) が認められる範囲が存在する。これらの旧耕作土の下面が鎌倉時代の旧地形を大きく逸脱しないと思われる。各々、最も高位に位置する低位段丘上の I 区 F 段の北西隅での遺構面は、標高 92.58 m、II 区 C 段の南端の遺構面は、標高 89.77 m を測る。都合、今回の調査地の低位段丘上での北西隅と南端では、約 2.8 m の高低差を認めることができる。但し、I 区 C 段北半・D 段・F 段の西側では、全ての遺物包含層が存在しない。

また、低位段丘から吉原川の開析谷に向かって低くなる谷斜面では、低位段丘の縁で標高 90.49 m (D 段南東端) ～ 89.36 m (II 区 C 段南東端)、掘削確認できた範囲の谷斜面の下端で標高 85.80 m (II 区 A 段中央) を測る。都合、今回の調査地の低位段丘の縁辺と谷斜面の下端では、約 4.7 ～ 3.56 m の高低差を認めることができる。

以下、検出遺構の古い時代・時期の順で記述を進める。そのため、I 区・II 区が前後する場合がある。

〈2007 - II 区〉調査面積 923 m² (図 6 ～ 14・17、写真図版 2 ～ 8・13 ～ 22)

検出遺構は、調査区の最も高い立地に位置する北側範囲 E・F 段から弥生時代中期の土坑、弥生時代終末期の隅円方形竪穴建物 1 棟、奈良時代の長方形竪穴建物 1 棟・土坑数基・柱穴、平安時代末～鎌倉時代前期にかけての柱穴・土坑・区画溝を多数検出した。南側の段丘先端 C・D 段でも、奈良時代若しくは平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物を構成する柱穴が主体を占め、掘立柱建物 1 棟以上・土坑・不整形な落ち、鎌倉時代の耕作跡など多数の遺構を検出した。

また、II 区南東側の吉原川 (開析谷) へ落ちる谷の斜面地形 A・B 段に埋った堆積層から大量の遺物が出土した。谷の斜面地形では、平安時代末～鎌倉時代に土砂が堆積する途中面で水溜めの機能をもつ遺構 1 基を検出した。

以下、主立った遺構について概要を記述する。

173 竪穴建物 (図 8・9・26、写真 17、写真図版 4・5・13)

173 竪穴建物は、II 区北東端の H 4 - j・k6・7 に位置する。四周に高床部をもつ建物で、炭化部材や焼土の遺存良好な消失家屋である。173 竪穴建物は、弥生時代中期前葉～中葉の遺構と重複 (当初の遺構検出では、173 竪穴建物は、直径 7.5 m の円形プランと認識して掘削を開始する) しており、粘土焼土塊で構築された施設が見つかった。最終的に 173 竪穴建物は、南北約 6.7 m・東西約 3.8 m 以上・深さ約 0.55 m で、隅円方形を呈する竪穴建物であることが判明した。

柱穴は、床面の北西隅に東西 0.32 m・南北 0.24 m・深さ 0.09 m、南西隅に径 0.28 m・深さ 0.20 m の 2 基が位置する。この規模から柱材を据え付けたとは言い難いが、竪穴建物内部での位置関係から主柱穴となる。床面のほぼ中央には、東西 0.46 m 以上・南北 0.36 m・深さ約 0.07 m で東西に長い土坑を検出した。明確な炭灰を検出していないが、床面の位置関係から中央の炉に該当する。壁溝は、埋土の第 11 層と炭化材に埋もれて全様は不明であるが、一部西側壁際で幅員 0.30 m・深さ 0.08 m の断面 U 字

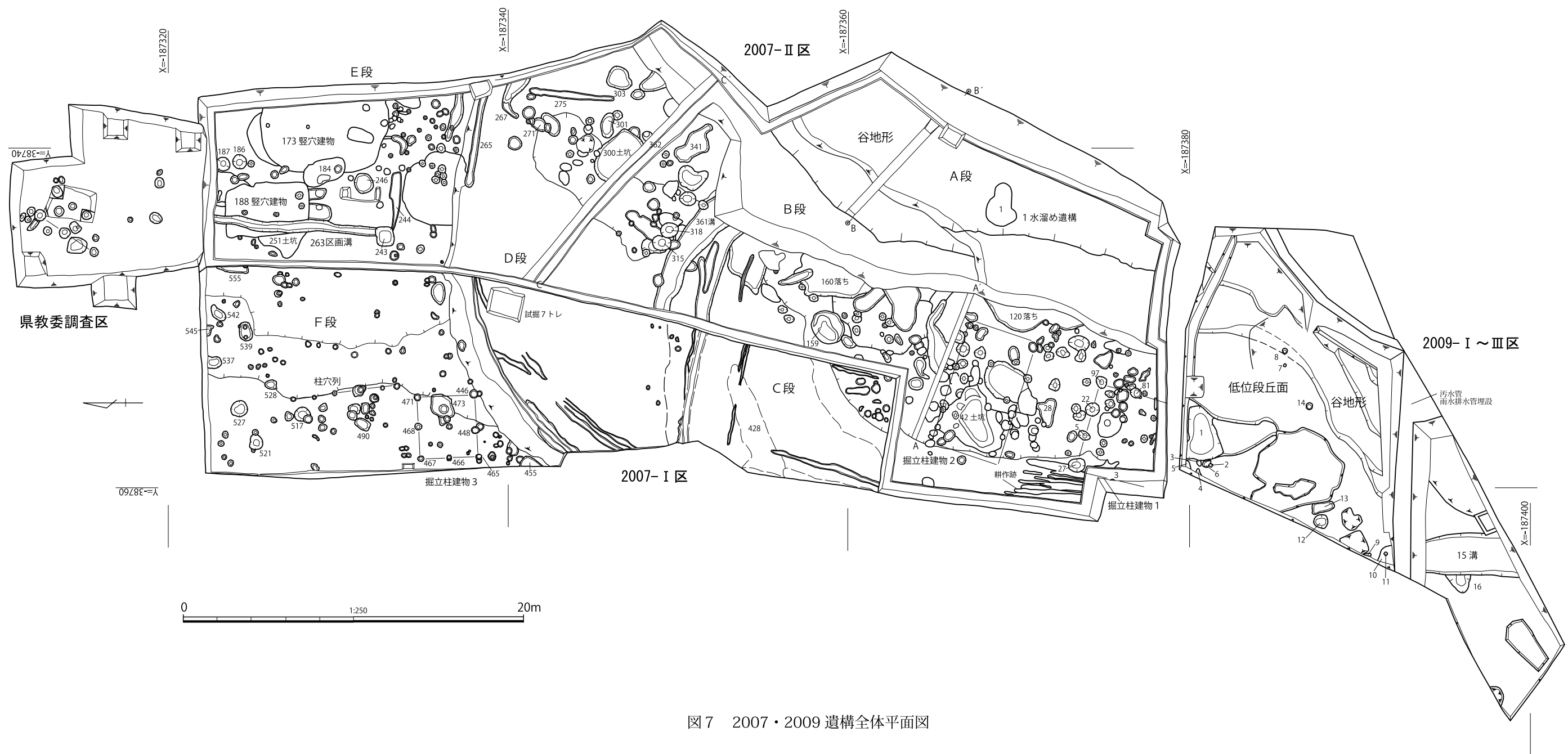


図7 2007・2009 遺構全体平面図

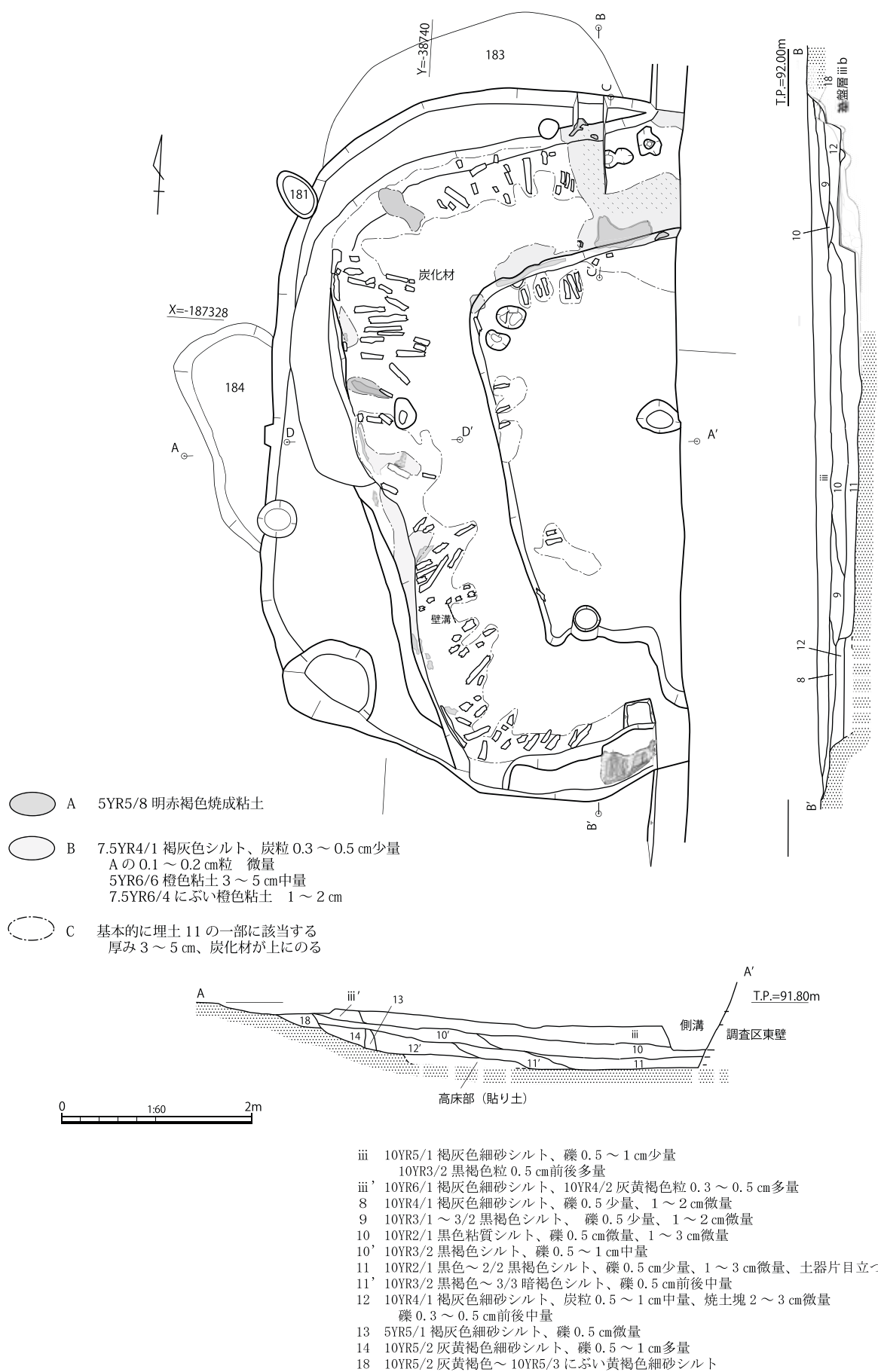


図8 2007-Ⅱ区 173 竪穴建物実測図

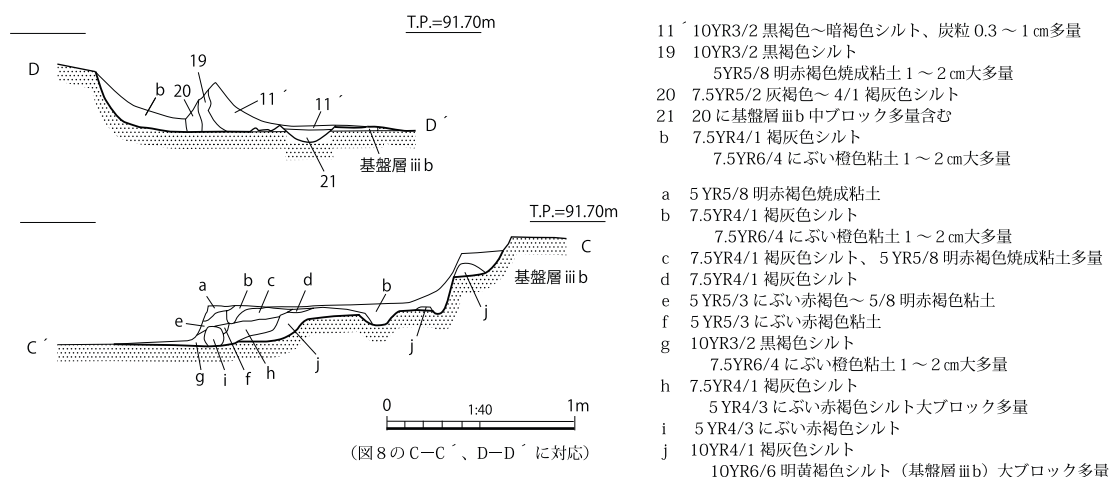


図9 2007－Ⅱ区 173 竪穴建物細部断面土層図

形の小溝を確認した (図9)。

竪穴建物の高床部には、随所で赤色化した焼粘土や粘土焼土塊が利用された貼り土の状態を検出した。焼粘土の貼り土は、竪穴建物北側の高床部の段の縁で最も顕著に認められ (写真図版4－3・4)、高床部を構成する盛土に供したことが確認できた。高床部の南辺中央では、床面が南側に入り込む状態となる。

竪穴建物の構造部材は、焼失により炭化し内側に倒壊した状況が良好に遺存している。炭化部材の大半は、壁からの位置関係や倒壊方向、幅約5～6 cm・長さ約20～80 cm (復元値を含む) と、平均していることから壁立ちの部材が倒壊したものと考えられる。

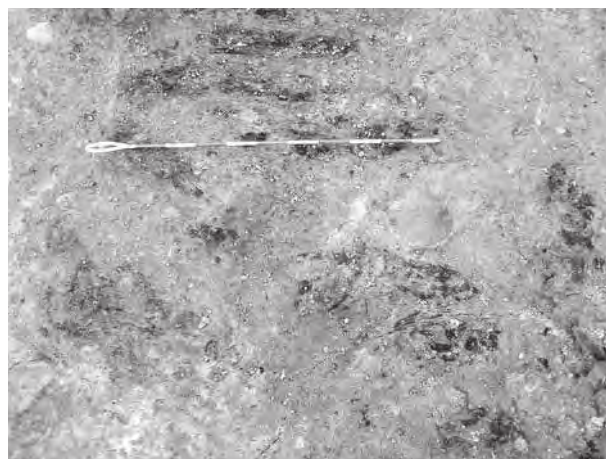


写真17 2007－Ⅱ区 173 竪穴建物遺物出土状況 (北から)

遺物は、西側及び北側で重複する弥生時代中期中葉～後半の遺構の遺物が混在する (図26) が、床面中央部において弥生時代終末期 (庄内式併行期) の壺 (図26－5・6)・高坏が出土している。また、床面の北西側から炭化部材に埋もれる状態で鉢 (7: 写真17) が、南端の焼土上部から鉄製品2点 (8・9) が出土した。鉄製品は、錆化が著しいが、別個体と思われ、曲刃鎌の可能性が考えられる。

173 竪穴建物は、建物の平面構造及び出土遺物から弥生時代終末期に帰属する。竪穴建物は、上述したように焼粘土や粘土焼土塊が利用された貼り床の状態にある特殊な構築方法が認められる。

318 土坑 (図10・26、写真18、写真図版13)

318 土坑は、2007－Ⅱ区中央D段のH4-013に位置する。318 土坑は、東西0.9 m・南北0.96 m・深さ0.32 mで、平面形はやや歪な円形状を呈する。南東側が傾斜地の低い側となり、検出した掘り込みも0.18 mと浅くなる。

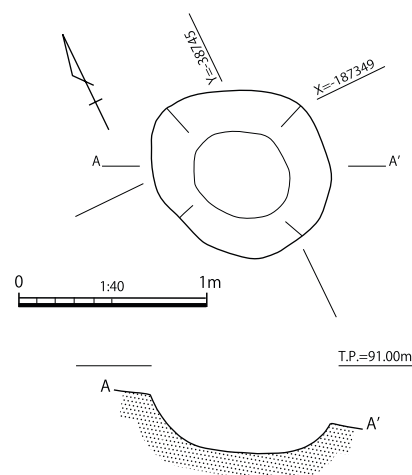


図10 2007－Ⅱ区 318 土坑実測図

埋土は、大別2層に区分でき、基本埋土は10YR4/1 褐灰色細砂混シルトで、基盤層の黄褐色細砂混シルトの小ブロックを多量含む人為的埋土と考えられる。遺物は、高坏（10・11）を主体とした細片化の著しい56点の土器が出土した。検出当初は、西側に隣接する315土坑が形状・埋土から318土坑に類似し、併存する土坑と思われたが、315土坑からは奈良時代の土師器2点・須恵器1点が出土した。



写真 18 2007－Ⅱ区 318・315土坑（北から）

188 竪穴建物（図 11・12・26・27、写真図版 5・6・14・23）

188 竪穴建物は、2007－Ⅱ区北端F段のH4－k7・07に位置する。188 竪穴建物は、短軸東西約3.2

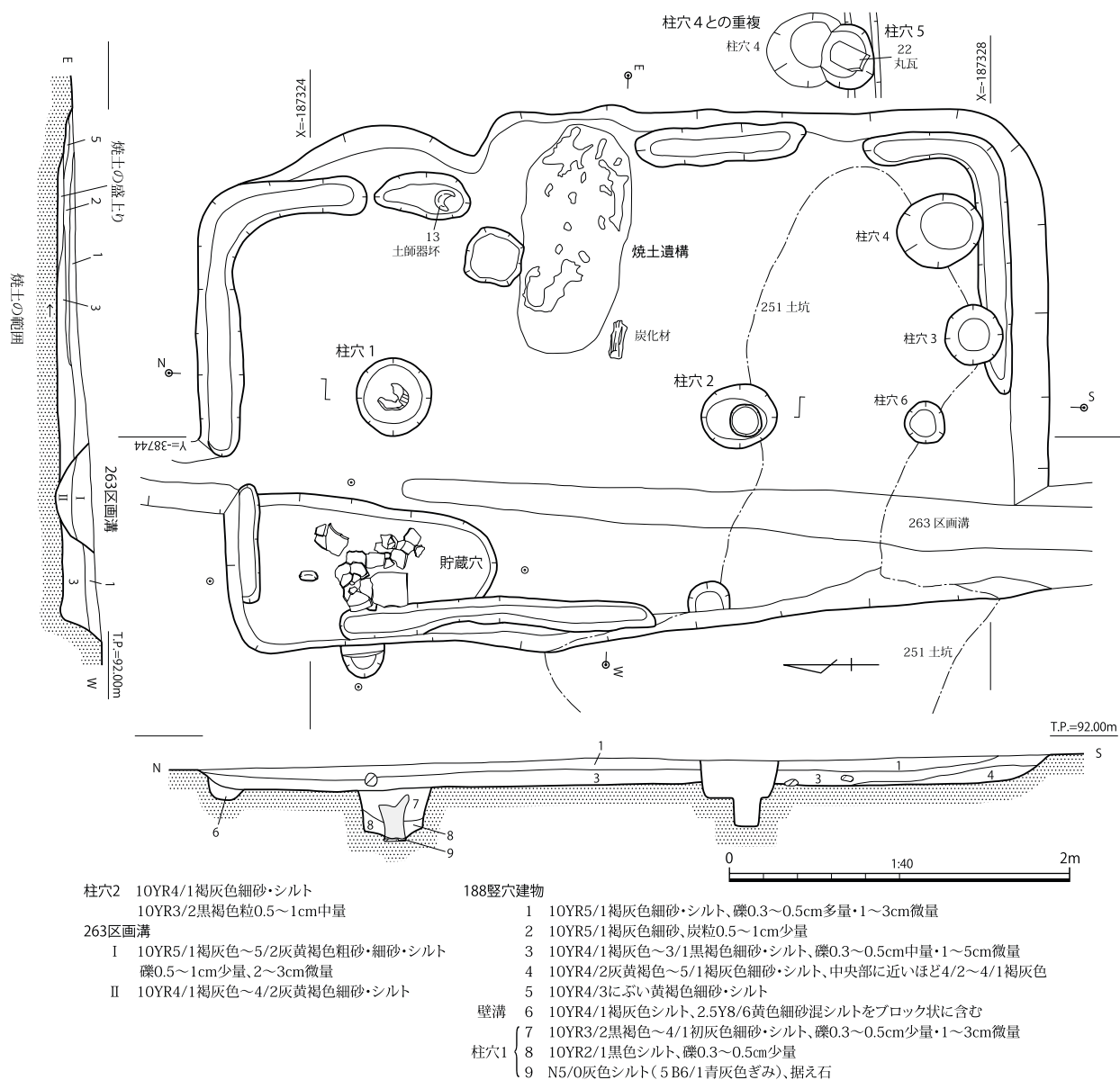


図 11 2007－Ⅱ区 188 竪穴建物実測図

m・長軸南北約5.0
m・深さ約0.15～0.20
mで、南北に長い長
方形を呈する。壁溝
は、幅約0.15～0.20
m・深さ約0.05～
0.1mで途切れ途切れ
ではあるが、南西床
面を除いて認められ
る。主柱穴は、床面
北側中央に位置する
柱穴1のみで、柱材
(W5)が遺存してい
た(写真図版6-3)。

柱穴1では、周辺部
の基盤層が細砂混シ

ルトであるにもかかわらず柱材が遺存したことは、柱を埋め込んだ際の人為的埋土が包含層第4層に類似した黒褐色粘質土であったことが幸いしたものと思われる。

床面の東側中央において、短軸南北0.60m・長軸東西1.30m・深さ0.05mの掘り込みの認められる焼土遺構を検出した。当初、造り付カマドの可能性を考えて調査に当たったが、浅い窪み状に掘り込まれた中に多数の粘土焼土塊が認められた状態であった。

なお、188 堅穴建物は、北東側の平面形の一部が内側にくびれて入り込むことから、2棟の堅穴建物が重複していた可能性もあるため、再度の平面検出を行ったが、重複を確認することはできなかった。

遺物は、床面の北西隅の貯蔵穴から土師器の長胴甕(16・126)2個体分、須恵器蓋(19)・甕の体部大破片(127)が固まって出土した。また、焼土遺構の上部から鉄製品(25)が出土した。鉄製品は、錆化が著しく錆付着時の観察から鋌の可能性が考えられたが、錆取りを行った結果、和釘状の鉄製品であることが判明した。床面や壁溝・堆積埋土からは、奈良時代の土師器坏(12～14)・甕(15・17)、須恵器坏(18)・蓋(20・21)などが出土した。188 堅穴建物は、出土遺物の内、陶邑編年Ⅳ-2型式の須恵器坏・蓋など平城Ⅱの遺物群を主体とすることから、奈良時代8世紀前葉後半に帰属するものと思われる。

188 堅穴建物内 柱穴5 (図27、写真図版6・14)

188 堅穴建物床面の南東隅に位置する。188 堅穴建物床面で検出した壁溝や柱穴4より先行する柱穴である。東西0.40m・南北0.32m以上・深さ0.30mで、凹面に細かい布目の丸瓦(22)が出土した。

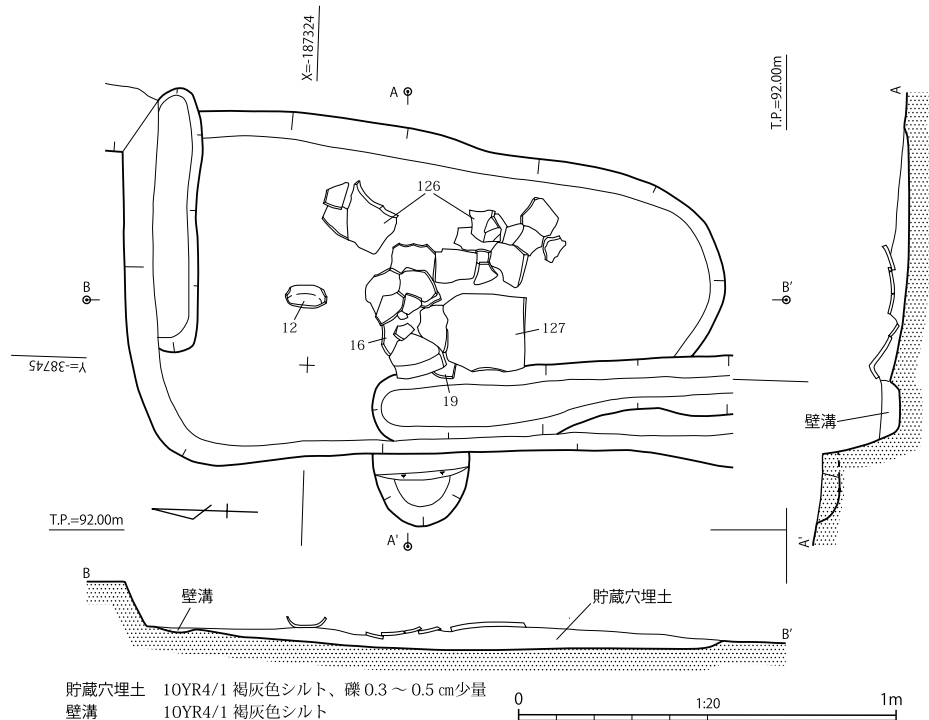


図12 2007-Ⅱ区 188 堅穴建物貯蔵穴実測図



写真19 2007-Ⅱ区 188 堅穴建物壁溝の遺物(西から)

柱穴は、Ⅱ区の南西側C段と北側のⅠ区F段に集中して位置し、多数を検出した。Ⅱ区C段の柱穴は、全体的に西北西から東南東方向(W-19°-N)に並びを有するものと思われるが、掘立柱建物1以外は建物としての明確な柱並びを捉えることができなかった。掘立柱建物2は、北側の柱間の不揃いな柱並びを捉えることは可能であるが、対応する南側の柱並び及び妻側の柱並びが明確でないため、再検討を要する。柱穴群は、柱穴の配置状況から調査地の極限られた範囲から南側の調査地外に広がるものと考えたが、2009-Ⅰ区では検出できなかった。柱穴は、重複関係を有するものもあるが、総体的に掘形長軸約0.40～0.50m・短軸約0.30～0.40m・深さ約0.10～0.60mの規模である。柱穴埋土は、Ⅱ区C段の第3層系堆積層とC段の第4層系堆積層を成因としたものが主体を占めている。

掘立柱建物 1 は、Ⅱ区C段の南西隅に位置し、東西3間（約5 m）・南北1間以上の側柱建物である。

2007-II 調査区西壁断面

3 柱穴断面土層
TP=90.20m

Y=-38756

X=-187376

0 1:50 2m

TP=90.20m

TP=90.20m

柱穴埋土

1 10YR3/2 黒褐色細砂・シルト、礫 4 cm 微量
2 より褐色の頻度が高い
(基盤層 III b) 小中ブロック中量

1' 10YR3/2 黒褐色～3/3 暗褐色細砂・シルト
(基盤層 III b) 小中ブロック中量

2 10YR3/3 暗褐色細砂・シルト、礫 0.3～0.5 cm 少量・1～2 cm 微量
(基盤層 III b) 小中ブロック中量

3 10YR4/2 灰黄褐色細砂・シルト
(基盤層 III b) 小ブロック中量

4 (基盤層 III b) に 10YR4/2 灰黄褐色細砂・シルト小中ブロック中量

5 10YR5/2 灰黄褐色、10YR4/3 に 黄褐色細砂・シルト まだら状態
礫 0.3～1 cm、0.4 cm 微量

6 10YR4/2 灰黄褐色細砂・シルト

10YR2/3 黒褐色シルト小ブロック少量

3 柱穴埋土 (i～iii は、人為的埋土)

i 基盤層 I b に 10YR4/1 褐灰色～4/2 灰黄褐色細砂・シルト中大ブロック多量入る、埋土 a に類似

ii iii に類似 + i が混在

iii 10YR3/1 黒褐色～3/2 黒褐色シルトに基盤層 I b 小中ブロック少量入る、礫 0.5～1 cm 少量、2 cm まで

iv 基本的に i に類似する?

v 基盤層 V に 10YR4/1 褐灰色～4/2 灰黄褐色細砂・シルト中大ブロック中量、基盤層 V が攪拌された状態

– 25 –

るものと考えられる。図化できる遺物は出土していない。

251土坑 (図27、写真図版6・15)

251土坑は、2007－Ⅱ区F段の北端H4－k・l7に位置し、188 竪穴建物や188 竪穴建物内の柱穴5に先行する。平面形は歪な形状を呈し、東西長4.10 m・南北最大幅2.60 m・深さ約0.50 mを測る。

遺物は、奈良時代の土師器・鉢・皿・高坏 (30)・鉢・把手付鍋 (26)・甕 (27～29)・蛸壺様土器、須恵器坏B (31～33)・甕など100点が出土した。



写真20 2007－Ⅱ区 掘立柱建物1 3柱穴断面土層 (北東から)

300土坑 (図14・28、写真図版6・15)

300土坑は、2007－Ⅱ区D段の中央H4－j・k12の傾斜地に位置し、基盤層の粗砂礫層の一部を掘削する。長軸東西1.80 m以上・短軸南北3.20 m・深さ0.20 m以上で、歪な隅円方形状を呈する。

遺物は、奈良時代の土師器・鉢14点、須恵器甕 (43) が43点に破碎した状態で出土した。須恵器甕 (43) は、体部の最大径42 cmで、肩部より上位と底部が欠損する。

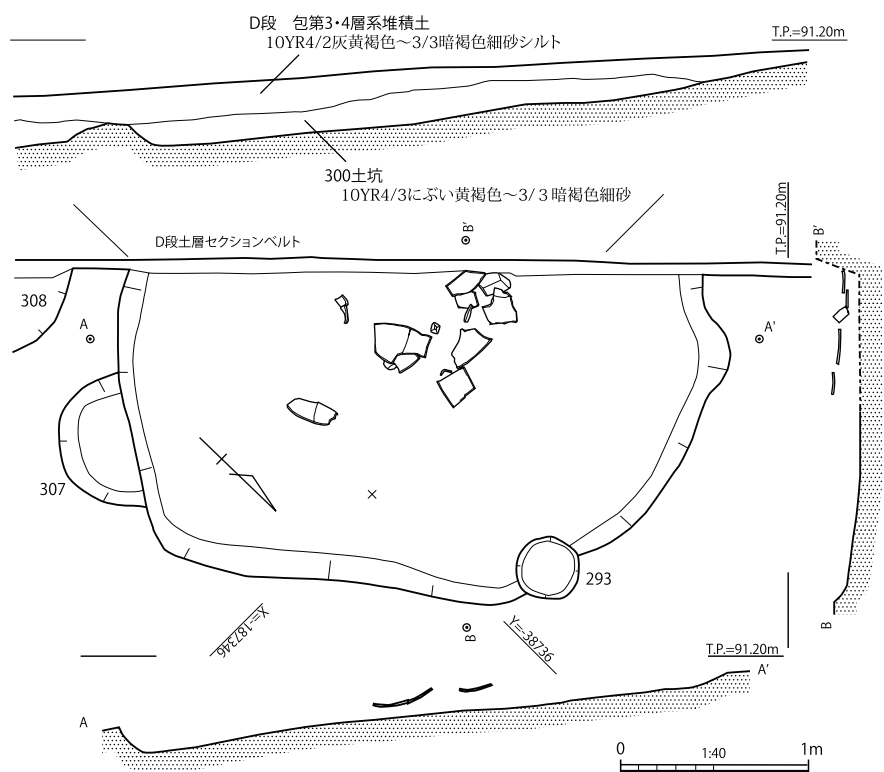


図14 2007－Ⅱ区 300土坑実測図

362土坑墓 (図22・27、写真図版6・15)

362土坑は、D段のH4－j13の堆積土層観察畔で検出した。長軸東西0.90 m・短軸南北0.85 m・深さ0.30 mで、平面形は隅円長方形を呈する。土坑の上位から完存の須恵器坏B (34) 1点が出土した。

42土坑 (写真図版7・15)

42土坑は、Ⅱ区C段南側H4－n17、o17・18に位置する。東西4.05 m・南北約4.0 m・深さ0.85 mで、歪な形状を呈する。埋土は、10YR4／1 褐灰色細砂混シルトを基本に、基盤層の黄褐色細砂混シルトブロックを多量に含んだ人為的埋土である。遺物は、弥生土器95点、奈良時代の土師器6点が出土した。

〈2007－Ⅰ区〉調査面積 377 m² (図7、写真図版9～11)

2007－Ⅰ区では、鎌倉時代の掘立柱建物1棟・柱穴列1箇所・土坑10基などを検出した。第3層系旧耕作土(遺物包含層)は、極めて狭い範囲に遺存するのみであった。遺物は、僅かであるが土坑・遺物包含層・攪乱層から奈良・鎌倉時代を主体とした土師器・瓦器、須恵器、サヌカイト剥片が出土した。

Ⅰ区C・D段では、遺物包含層・検出遺構がほとんど存在しない在り方に比例して、出土遺物も少ない状態にある。これらのことは、中世以後における低位段丘上での大規模な耕地開発、特に鎌倉時代13世紀段階以後の条里型地割の形成による耕地開発により遺構が削平された可能性が考えられる。

以下、時代順の記述のため、一部にⅡ区の主立った遺構についても概要を記述する。

掘立柱建物と柱穴群 (図15、写真図版10)

柱穴は、Ⅰ区の北側F段に集中して位置し、多数を検出した。柱穴群は、Ⅱ区のF段から連続するものであるが、掘立柱建物3以外は建物としての柱並びを捉えることができなかった。柱穴の配置状況から調査地の極限られ

た範囲から東西両側の調査地外に広がるものと思われる。柱穴は、重複関係を有するものもあるが、掘形長軸約0.30～0.50m・短軸約0.30～0.40m・深さ約0.10～0.40mの規模である。Ⅱ区C段の柱穴に比較して、総体的に小規模な掘形を呈するものが多い傾向にある。柱穴埋土は、F段の第3層系堆積層とF段の第4層系堆積層を成因としたものが主体を占める。

掘立柱建物3 (図15、写真図版10)

掘立柱建物3は、Ⅰ区F段の南西側H4-n・o・9・10に位置し、東西2間(約3.8m)・南北2間(約3.6m)の総柱

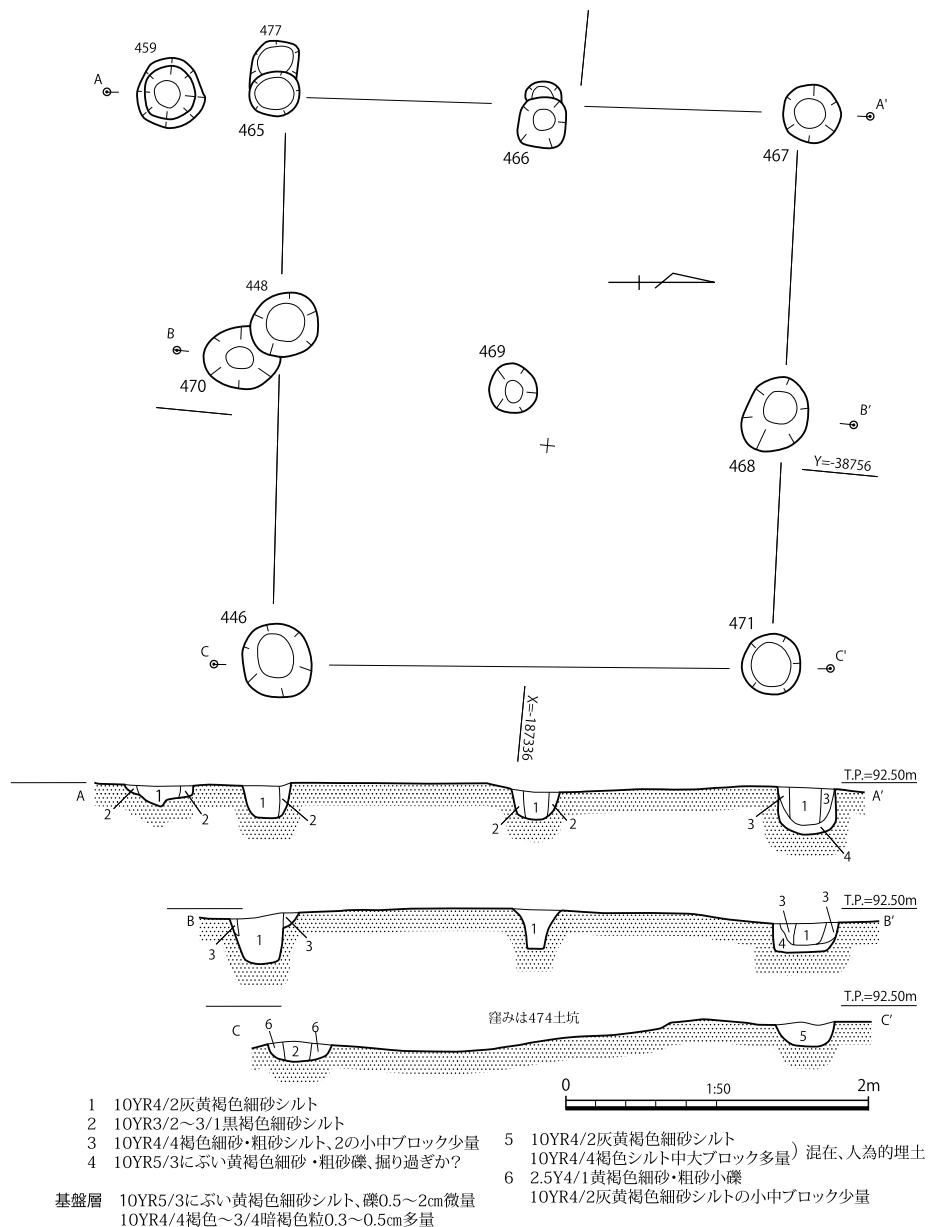


図15 2007－Ⅰ区 掘立柱建物3実測図

建物である。柱間は、約 1.80 ～ 2.0 m を測り、やや不揃いである。掘立柱建物 3 の主軸方向は、 $N-2^{\circ}-W$ である。掘立柱建物 3 を構成する柱穴は、大半が柱痕跡（柱当り）の認められるものであり、埋土は、柱当りが 10YR4/2 灰黄褐色系、掘形が 10YR3/2 ～ 3/1 黒褐色系を呈し、周囲の基盤層の粗砂細礫層に影響され、細砂・粗砂が混在したシルト土である。

遺物は、細片化の著しい鎌倉時代の土師器皿、瓦器など僅かな土器が出土するのみである。掘立柱建物 3 は、僅かな出土遺物や層序関係から鎌倉時代に帰属するものと考えられる。

柱穴列（図 16、写真図版 10）

柱穴列は、I 区 F 段のほぼ中央に位置する。建物として対応する柱穴並びがないことから、柱穴列と考えた。ただ、柱穴列の東側が東に向かって大きく傾斜することから、第 3 層系遺物包含層の途中面に対応する柱穴並びが存在した可能性も考えられる。現状では、柱穴列は、南北に 5 間分（約 6.2 m）が確認でき、柱間は 0.85 ～ 1.5 m と不揃いである。柱穴列は、 $N-6^{\circ}30'-W$ の方向性を示す。

遺物は、細片化の著しい弥生時代終末期の土器 1 点、鎌倉時代の土釜 1 点、495 柱穴から根石に転用された砥石など非常に少なく、帰属時期を断定するまでには至っていない。柱穴列は、周囲で検出した土坑・柱穴の埋土や遺物の出土状況から推してすれば、鎌倉時代に帰属するものと考えられる。

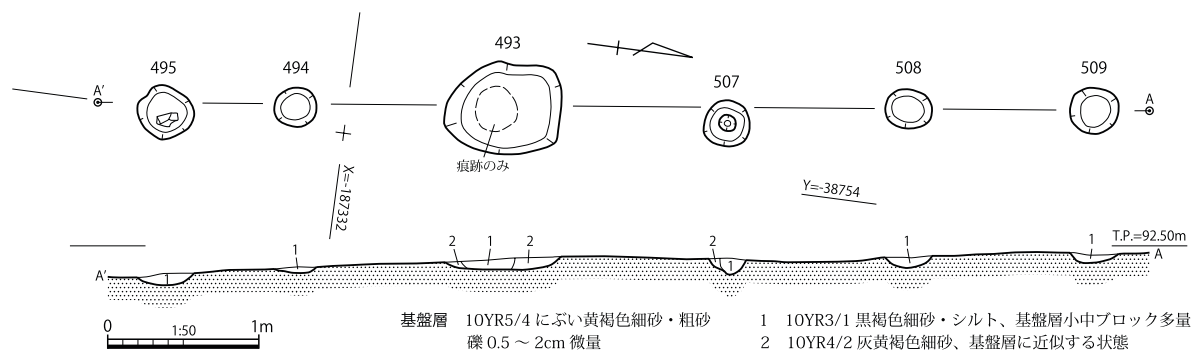


図 16 2007-I 区 柱穴列実測図

土坑群（図 17・18、写真図版 10・11）

調査地の I 区 F 段で、土坑群を検出した。土坑は、F 段の北端・中央・南西隅に各々集中し、中には土坑墓と考えられる遺構も存在する。土坑の規模・形状・主軸方向は、不揃いである。

土坑の遺物は、細片化した僅かな量の土器が出土するのみである。土坑は、掘立柱建物や他の柱穴同様に、出土遺物や層序関係から鎌倉時代に帰属するものと考えられる。

土坑墓と思われる遺構は、奈良時代も含めて前半調査の II 区 D 段の 362 土坑墓（写真図版 6）や II 区 F 段の 243・246 土坑においても可能性が認められるところである。

186 土坑（図 17・29、写真図版 5・16）

186 土坑は、2007-II 区北端 F 段の H4-k 6・7 に位置する。186 土坑は、東西 0.78 m・南北 0.76 m・深さ 0.40 m で、平面形はほぼ円形状を呈する。

埋土は、大別 3 層に区分でき、基本埋土は 10YR4/1 褐色系細砂混シルトである。第 4 層は、土坑の法面にへばり付く状態で粘性があり粗砂細礫を殆んど含まない。そのため、水漏れ等を防ぐために人為的に貼り付けられた可能性が考えられる。遺物は、終末期の弥生土器 3 点、細片化した鎌倉時代の土師器皿（44）23 点、瓦器碗（45・46）14 点が出土した。

187土坑 (図17・29、写真図版5・16)

187土坑は、2007－Ⅱ区北端F段のH4－k6に位置し、186土坑と共に南北に並列する。187土坑は、186土坑と同規模で、東西0.80m・南北0.68m以上・深さ0.40mで、平面形はやや歪な円形を呈する。

埋土は、基本的に186土坑と同様である。遺物は、終末期の弥生土器6点、細片化した鎌倉時代の土師器皿類19点(47)、瓦器碗類12点(48・49)が出土した。

246土坑 (図17・29、写真21、写真図版16)

246土坑は、2007－Ⅱ区北側F段のH4－k8に位置する。東西1.2m・南北1.12m・深さ0.1mで、隅円方形ぎみを呈する。埋土は、締まりのない10YR4/1褐灰色系細砂混シルトである。



写真21 2007－Ⅱ区 246土坑(北北東から)

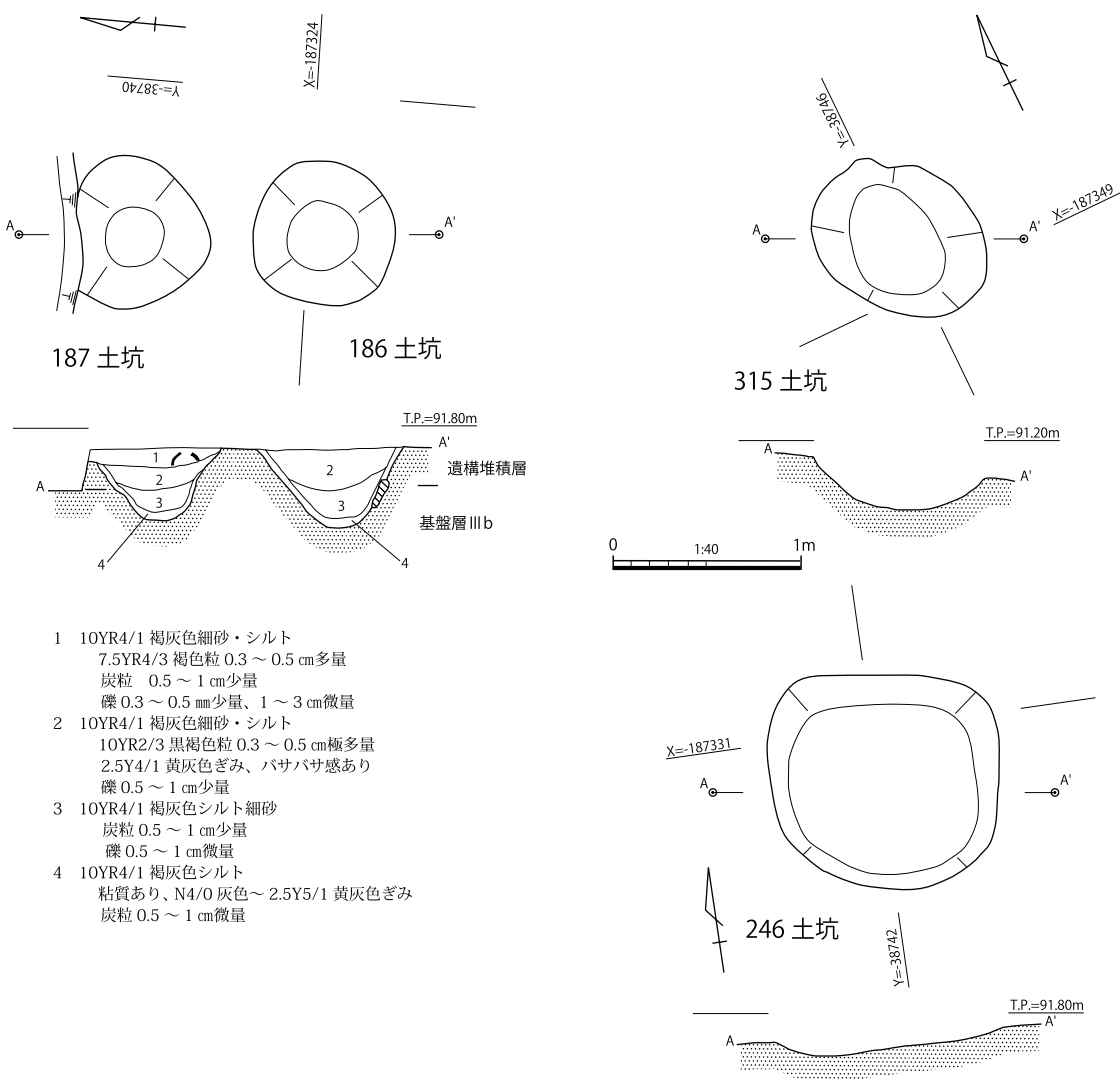


図17 2007-Ⅱ区 各土坑実測図

遺物は、奈良時代の須恵器 1 点、細片化した鎌倉時代の土師器皿・小皿（50・51）小計 52 点・土釜 3 点、瓦器碗（52）・小皿小計 14 点、合計 70 点が出土した。

315 土坑（図 17、写真 18）

315 土坑は、2007－Ⅱ区中央D段のH4－ℓ13に位置する。315 土坑は、東西 0.76 m・南北 0.98 m・深さ 0.28 m で、平面形はやや歪な楕円形状を呈する。南東側が傾斜地の低い側となり、検出した掘り込みも 0.20 m と浅くなる。

基本埋土は、10YR4／1 褐灰色系細砂混シルトである。遺物は、奈良時代の土師器 2 点・須恵器 1 点が出土した。検出当初は、東側に隣接する 318 土坑が形状・埋土から 315 土坑に類似し、併存する土坑と思われたが、318 土坑からは弥生時代終末期の遺物が出土した。

490 土坑（図 18、写真図版 11）

490 土坑は、2007－Ⅰ区H4－o8に位置する。490 土坑は、長軸北東－南西 1.0 m・短軸 0.62 m・深さ 0.08 m で、平面形はやや歪な隅円長形状を呈する。埋土は、F 段A埋土（10YR3／3 暗褐色細砂・シルト）に近く、基盤層の影響を受けて粗砂礫が多量に含まれる。遺物は出土していない。

517 土坑（図 18、写真図版 11）

517 土坑は、2007－Ⅰ区H4－n7に位置する。517 土坑は、南北 0.92 m・短軸 0.82 m・深さ 0.05 m で、平面形はやや歪な円形状を呈する。埋土は、F 段B埋土（10YR5／2～4／2 灰黄褐色細砂シルト）である。遺物は出土していない。

521 土坑（図 18、写真図版 11）

521 土坑は、2007－Ⅰ区H4－o7に位置する。521 土坑は、長軸東西 0.88 m・短軸南北 0.80 m・深さ 0.07 m で、平面形はやや歪な形状を呈する。埋土は、F 段B埋土（10YR5／2～4／2 灰黄褐色細砂シルト、粗砂礫少量含む）である。遺物は出土していない。

527 土坑（図 18、写真図版 11）

527 土坑は、2007－Ⅰ区H4－n6・7に位置する。527 土坑は、長軸南北 1.04 m・短軸東西 0.91 m・深さ 0.10～0.13 m で、平面形はやや歪な形状を呈する。埋土は、F 段B埋土（10YR5／2～4／2 灰黄褐色細砂シルト）である。遺物は出土していない。

537 土坑（図 18、写真図版 11）

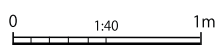
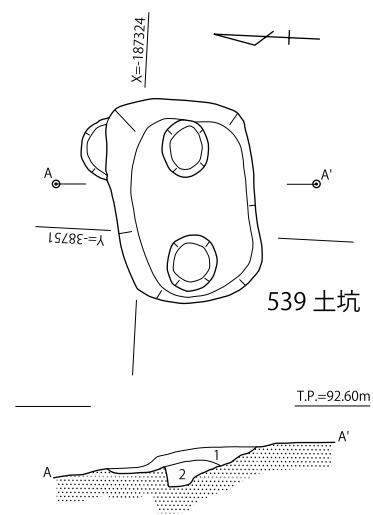
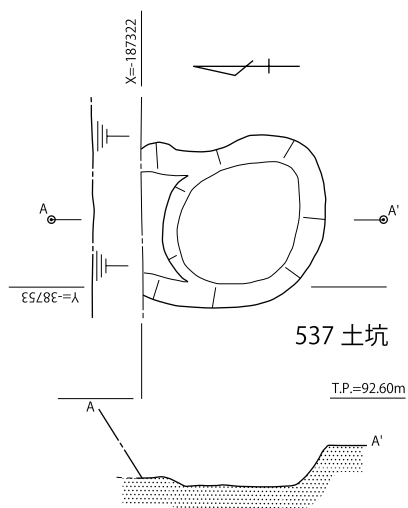
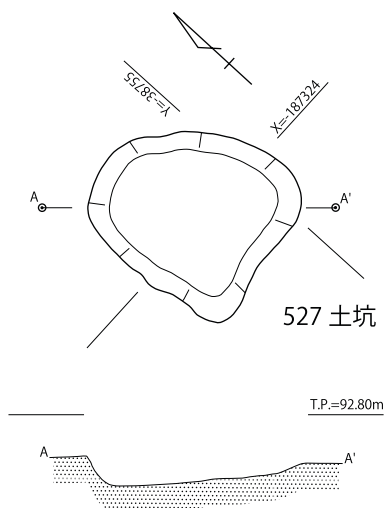
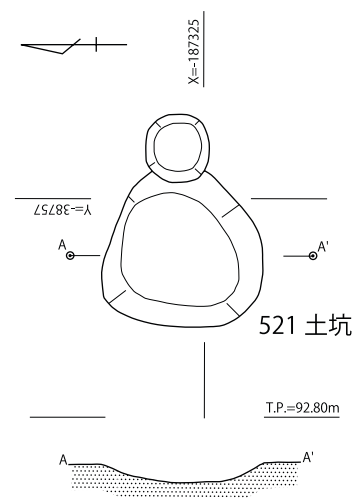
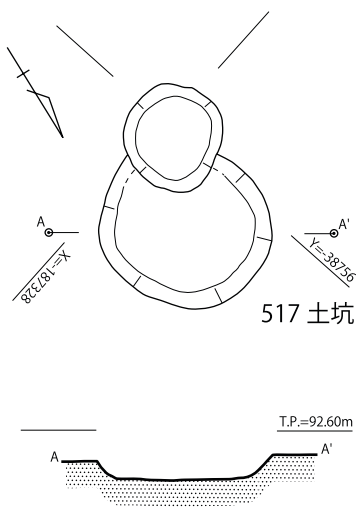
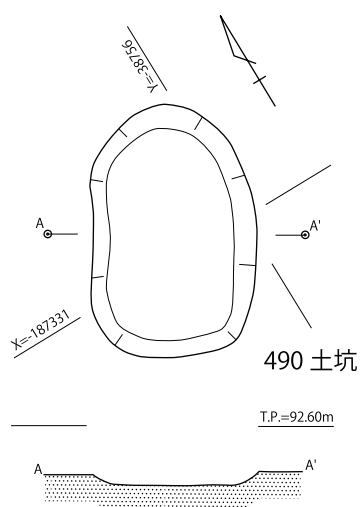
537 土坑は、2007－Ⅰ区H4－n6に位置し、一部は調査区外に続く。537 土坑は、長軸南北 0.90 m 以上・短軸東西 0.70 m・深さ 0.10～0.20 m で、平面形はやや歪な楕円形状を呈する。埋土は、F 段B埋土（10YR5／2～4／2 灰黄褐色細砂・粗砂シルト、粗砂礫多量含む）である。遺物は出土していない。

539 土坑（図 18、写真図版 11）

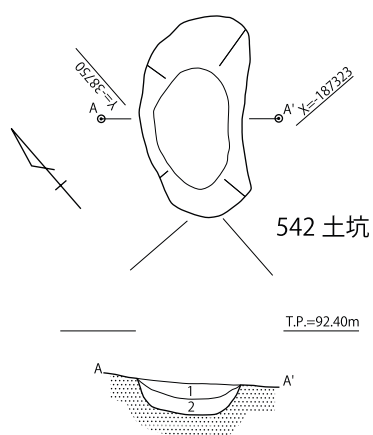
539 土坑は、2007－Ⅰ区H4－m7に位置する。539 土坑は、長軸東西 1.05 m・短軸南北 0.75 m・深さ 0.12 m で、平面形はやや歪な隅円長形状を呈する。土坑の基底部には、径約 0.30 m・深さ 0.12 m の小穴 2 基がある。埋土は、F 段B埋土（10YR5／2～4／2 灰黄褐色粗砂礫）を基本とする。遺物は、細片化した奈良時代の土師器甕 2 点が出土した。

542 土坑（図 18、写真図版 11）

542 土坑は、2007－Ⅰ区H4－m6に位置する。542 土坑は、長軸北東－南西 1.15 m・短軸 0.60 m・深さ 0.17 m で、平面形はやや歪な楕円形状を呈する。埋土は、F 段B埋土（10YR5／2～4／2 灰黄褐色粗砂礫）である。遺物は出土していない。



- 1 10YR5/2 ~ 4/2 灰黄褐色粗砂礫
礫 0.5 ~ 2 cm 少量、3 ~ 5 cm 微量
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂礫、粗砂主体
礫 0.5 ~ 1 cm 少量、2 ~ 7 cm 少量
西側のベース粗砂礫に類似



- 1 10YR5/2 ~ 4/2 灰黄褐色粗砂礫
礫 0.5 ~ 2 cm 少量、3 ~ 5 cm 微量
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂礫、粗砂主体
礫 0.5 ~ 1 cm 少量、2 ~ 7 cm 少量
西側のベース粗砂礫に類似

図 18 2007-I 区 各土坑実測図

その他、Ⅰ区F段には、454 土坑（弥生時代後期弥生土器 3 点、奈良時代土師器 1 点、不明 2 点：写真図版 10）、455 土坑（奈良時代土師器 2 点：写真図版 10）、555 土坑（写真図版 11）などがある。

1 水溜め遺構（図 19・29・30、写真 22・23、写真図版 8・16・23）

2007－Ⅱ区A・B段の谷地形斜面では、平安時代末～鎌倉時代に土砂が埋積する途中面で水溜めの性格をもつ遺構（以下、「1 水溜め遺構」と呼称する）1 基を検出した。

1 水溜め遺構は、遺物包含層第 3 c 層下面において検出した。長軸東西 1.95 m・短軸南北 1.15 m・深さ 0.70 m の掘形に板材・板石や曲物を使用して構築された施設である。1 水溜め遺構は、西側の斜面地形や遺構の位置する基盤層の粗砂細礫層から絶えず湧水が認められ滞水する。上位層の掘削に当たり、土質の変化が認められ、井戸状落ち・井戸状遺構と呼称した段階で、下駄（W1）が出土した。1 水溜め遺構と同一遺構と考えられるが、水分質を多量に含んだ土質の中での掘削となったため、その上下位置を明確にできなかった。

1 水溜め遺構は、遺存した部位の検出状況から上部構造と下部構造を、また、平面的に 1 水溜め遺構の東側に崩壊した状況にある川原石の一群（写真 23）に区別してみることができる。

1 水溜め遺構の上部構造は、下部構造の曲物に食い込む状態で、板材（W4）・板石（285）・川原石を方形に組んで、各部材の内側を木杭（写真 22）で、外側を川原石で固定している。囲いの形状は、土圧によりかなり変形したものと考えられる。板材の上端は、一部調査時の損傷もあるが、板石の上端との高さがほぼ等しいことから、さほどの損壊は考えられない。南側の川原石と板石の間には、半裁した曲物の底板（W3）が円弧を下側にして差し込まれ、一段低くなることから、その間を水が溢れ出す構造を取ると考えられる。



写真 22 2007－Ⅱ区 1 水溜め遺構細部（南から）

下部構造は、上部構造の構築と土圧により損壊が進んでいるが、2 段の曲物で構築されている。上段の曲物（W6）は、やや歪になっているが、直径約 65 cm・高さ 15 cm を測る。下段の曲物は、一部を除いて調査時での遺存状態が良好で、直径 55 cm・高さ 5 cm を測る。



写真 23 2007－Ⅱ区 1 水溜め遺構東側崩落石の状況（東から）

1 水溜め遺構の東側には、崩壊した状況にある人頭大の川原石に混じって木杭・板材が出土した。本来の位置・構造については不明であるが、一定の範囲に集中することから当遺構に関連した構造物が西側から崩壊したものと考えられる。

遺物は、上部構造の埋積土や掘形埋土から弥生時代後期・奈良時代の遺物群と共に、平安時代末～鎌倉時代前期にかけての土師器皿・土釜、瓦器碗・鉢（63）・甕（64）、須恵器捏鉢（65）などが出土した。このことから水溜め遺構は、谷地形に第 3 c 層が埋積する中で機能していたと考えられる。

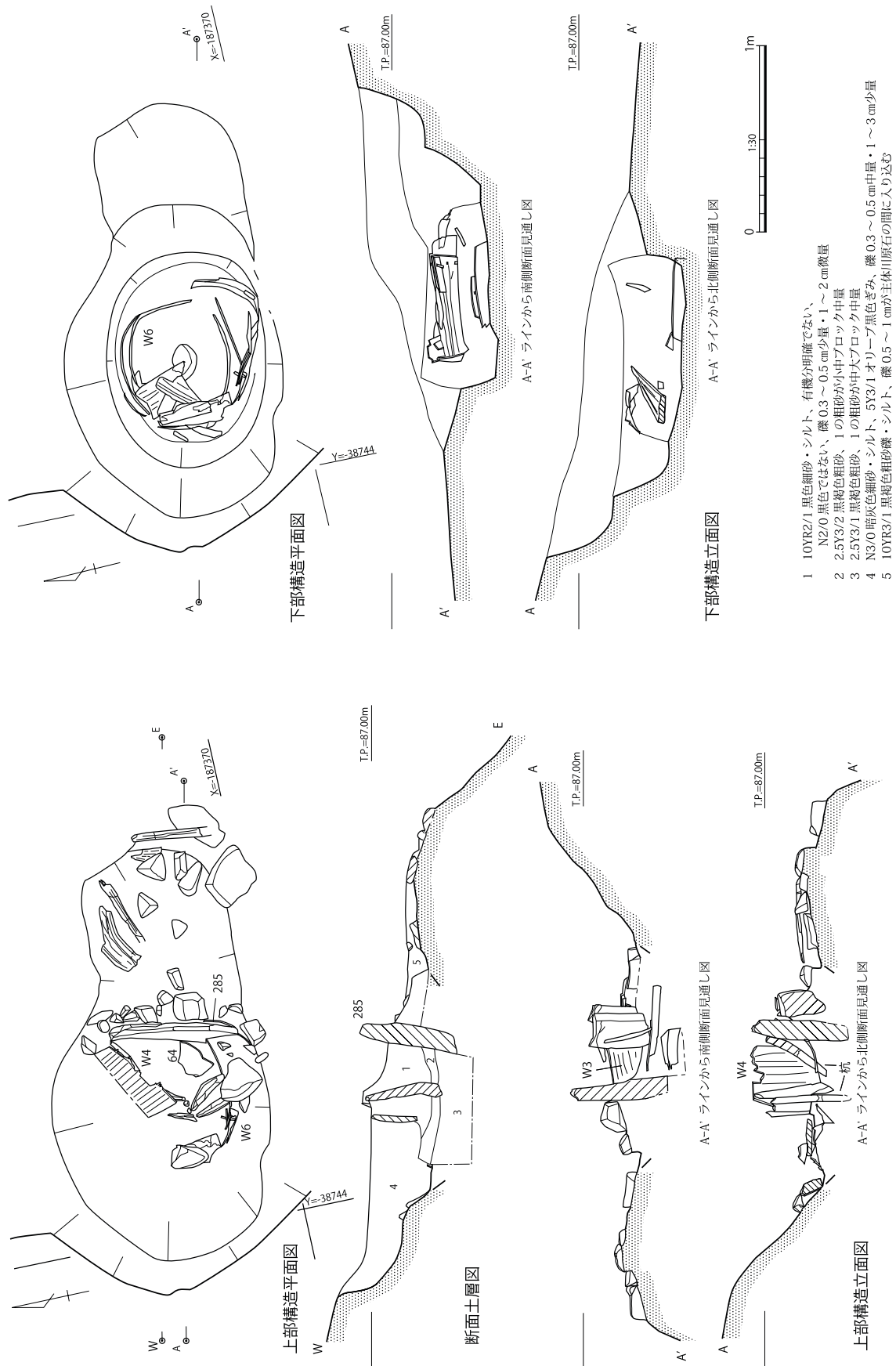


図 19 2007-1 区 1 水溜め遺構実測図

263・244区画溝 (図 29、写真図版 16)

263・244 区画溝は、2007－Ⅱ区F段に位置する。263 溝は、最大幅員 0.70 m・深さ 0.20 m・検出延長約 10.5 mで、南北方向に走行する。遺物は、鎌倉時代の土師器皿 (55・56)・土釜・瓦器碗など 90 点が出土した。244 溝は、最大幅員 0.60 m・深さ 0.15 m・検出延長 3.45 mで、東西方向に走行する。遺物は、瓦器碗など 3 点が出土した。両遺構の接する地点において、共に 243 土坑と重複する。243 土坑からは、鎌倉時代の土師器皿 4 点・瓦器碗 3 点が出土した。

263 溝と 244 溝で、屋敷地区画の二辺を形成するものと考えられる。この区画溝内には、173・188 建物が位置し、検出において両者の遺構埋土からかなりの量の鎌倉時代の遺物 157 点 (173 竪穴建物から 63 点、188 竪穴建物から 94 点) が出土した。この状況は、263 溝の重複を含め多くの重複遺構が存在したものの、埋土が酷似したため屋敷地に伴う遺構の多くが認識できなかったものである。

265・275区画溝

265・275 区画溝は、2007－Ⅱ区D段に位置する。265 溝は、最大幅員 0.45 m・深さ 0.05 m・検出延長約 5.3 mで、東西方向に走行する。遺物は、出土していない。275 溝は、最大幅員 0.45 m・深さ 0.20 m・検出延長約 5.0 mで、南北方向に走行する。遺物は、出土していない。両遺構の接する地点は、調査区東壁側溝の掘削に伴って不明となった。

265 溝と 275 溝で、屋敷地区画の二辺を形成するものと考えられる。この区画内の遺構は、275 溝に近い側に柱穴・土坑などが遺存するものの、多くが後世の削平により無くなった状況にある。

361溝状遺構 (図 29、写真図版 16)

361 溝状遺構は、2007－Ⅱ区D段の南西隅に位置する。幅員約 1.0～1.90 m・深さ約 0.40 m・検出延長 7.50 mで、肩部は歪な形状を呈する。基底部は、二段落ちとなる。遺物は、奈良時代の土師器・須恵器と共に、土師器皿 (57)・土釜・瓦器碗 (58)・常滑焼甕など 43 点が出土した。

鎌倉時代の耕作跡 (耕作に伴う小溝群) (写真図版 7)

耕作跡は、2007－Ⅱ区C段の南西隅に位置する。幅員約 0.20～0.30m・深さ約 0.03～0.05mの小溝を 10 条前後検出したが、重複が著しく正確な幅員は不明確である。小溝群の埋土は、第 3 層系の堆積層が埋積している。小溝群は、北－南方向にほぼ平行に認められ、N－6°－E (座標北に対しての振れ) の走向を示す。通称、応其条里の地割が真北を向くことから、調査で検出した小溝群はやや異なる走向を示しているものと考えられる。小溝群は、細片化した僅かな出土遺物と層序の関係から鎌倉時代に帰属するものと考えられる。

2007－Ⅱ区A・B段 谷地形堆積層 (図 21・31～33、写真 24、表 3、写真図版 8・12・18～22)

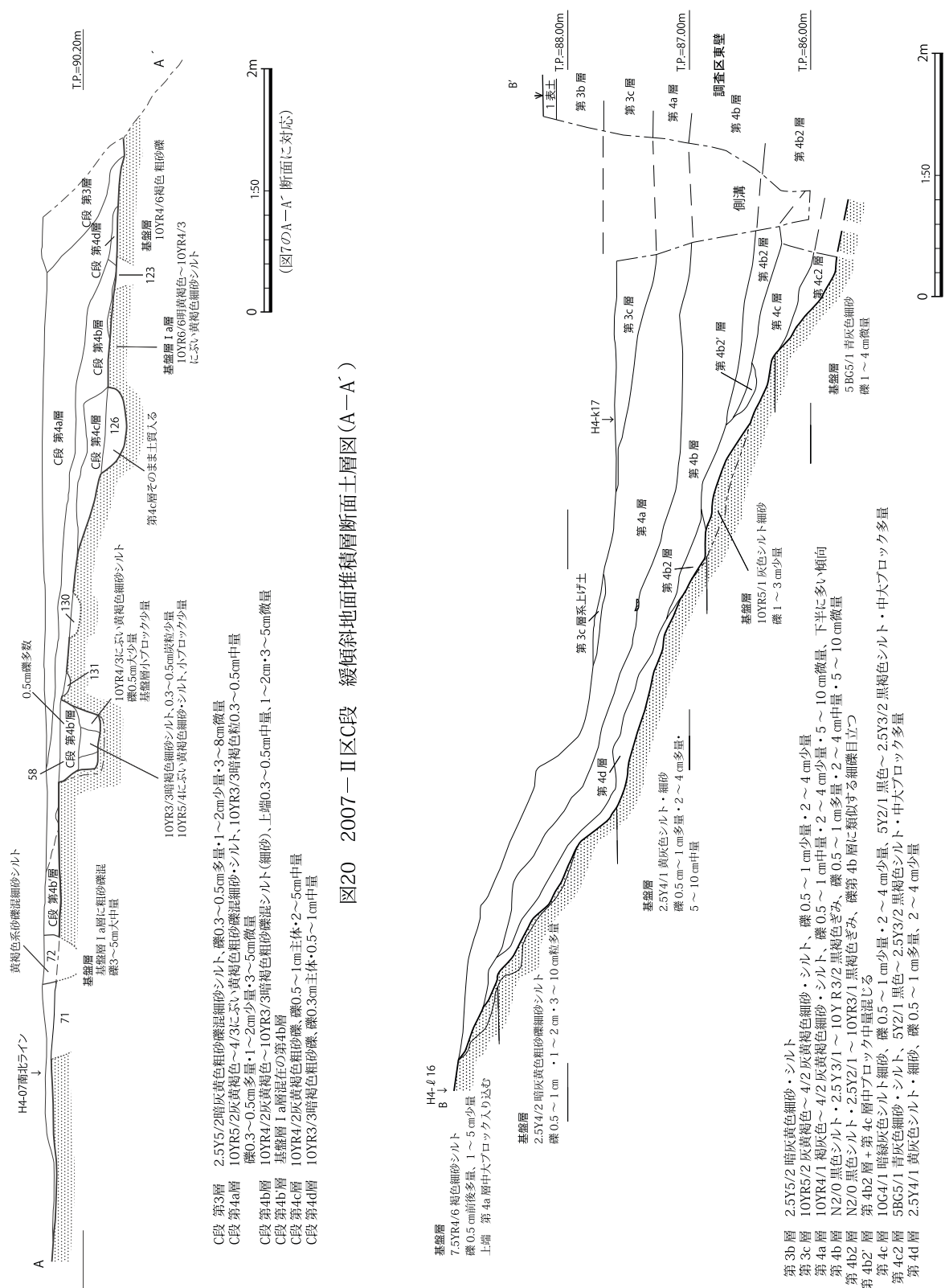
Ⅱ区南東側の吉原川 (開析谷) へ落ちるⅡ区A・B段谷地形の斜面に埋った堆積層から層位的に区別の可能な大量の遺物が出土した。出土遺物の一部は、谷地形の掘削を急いだことにより層位的な資料に成り得ていないが、基本的に第 3 c 層・第 4 a 層には平安時代末～鎌倉時代までの遺物、第 4 b 層・第 4 c 層には奈良時代までの



写真 24 2007－Ⅱ区 開析谷 (南南西から)

遺物群を包含する堆積層である。表3から見る結果として、谷地形の堆積層において、弥生時代後期後半若しくは終末期の遺物群のみを包含する層位は確認できなかったことになる。

Ⅱ区C段南西範囲では、試掘調査の第4層の一部が第3層に含まれる堆積層である。Ⅱ区A・B段では、2.5Y5/2暗灰黄色細砂・シルト若しくは、10YR5/2灰黄褐色～4/2灰黄褐色細砂・シルトを基本とし、谷地形の斜面に堆積した第3層で、大きく第3a層～第3c層の3層に大別できる。江戸時代



(図7のA-A'断面に対応)

図21 2007—Ⅱ区A・B段 谷地形堆積層断面土層図(B-B')

の遺物は、Ⅱ区C段から1点（第3層関係（層序要素12）での小計576点）、Ⅱ区A・B段から2点（第3層関係（層序要素11）での小計596点）の陶磁器等がある。

以上、第3層には江戸時代の遺物が微量混在するが、基本的に中世の耕作土及び堆積土と考えたい。

出土遺物は、第4b層から弥生時代中期の甕（69）、弥生時代後期後半の広口壺（66・67）・脚台部（74・76）・器台（77）・鉢（79・80）・甌（81）・手焙り形土器（186）などが、第4a層下部から弥生時代後期中後半の甕（70・71）・高坏（72・73・75）・鉢（78）などが、第4a層上部から広口壺（68）が、第4a層から手焙り形土器（227）・有孔土製品（228）・土製装飾品（229）などが出土した。

また、第4a層から奈良時代の土師器坏A（83・84）・坏C（82）・皿A（85）・甕（88）・鉢（86・87）・砲弾型の製塩土器（90・91）・移動式竈（236・237）、須恵器坏A（94・95）・坏B（97）・碗A（96）・皿C（99）・蓋（101～103）・短頸壺（104）、軒丸瓦（108）などがある。

第3c層から土師器製塩土器（89）、須恵器坏A（92・93）・坏B（98）・皿C（100）・壺（105）・鉢A（106）・軒丸瓦（107）などが出土した。

特殊な遺物として、第4b層の上端で、淡灰色のゲル状の遺物（写真図版8－3）が見つっている。ゲル状の遺物は、弥生時代後期後半の高坏・鉢・甕などの土器、表皮が炭化した木杭などの遺物群と共に出土した。検出当初は、約20×30cm・厚み約3cmの弾力と粘りのある物質であったが、時間の経過と共に固化し、土質の汚れが目立つ状態となった。また、これらの遺物と共に何らかの動物の皮と思われる遺物も出土した。

このように谷地形の斜面に大量の様々な遺物が出土することから、本来、谷地形の西側に位置する低位段丘上には、各遺物の該当期の生活遺構が存在したものと考えるのが妥当である。

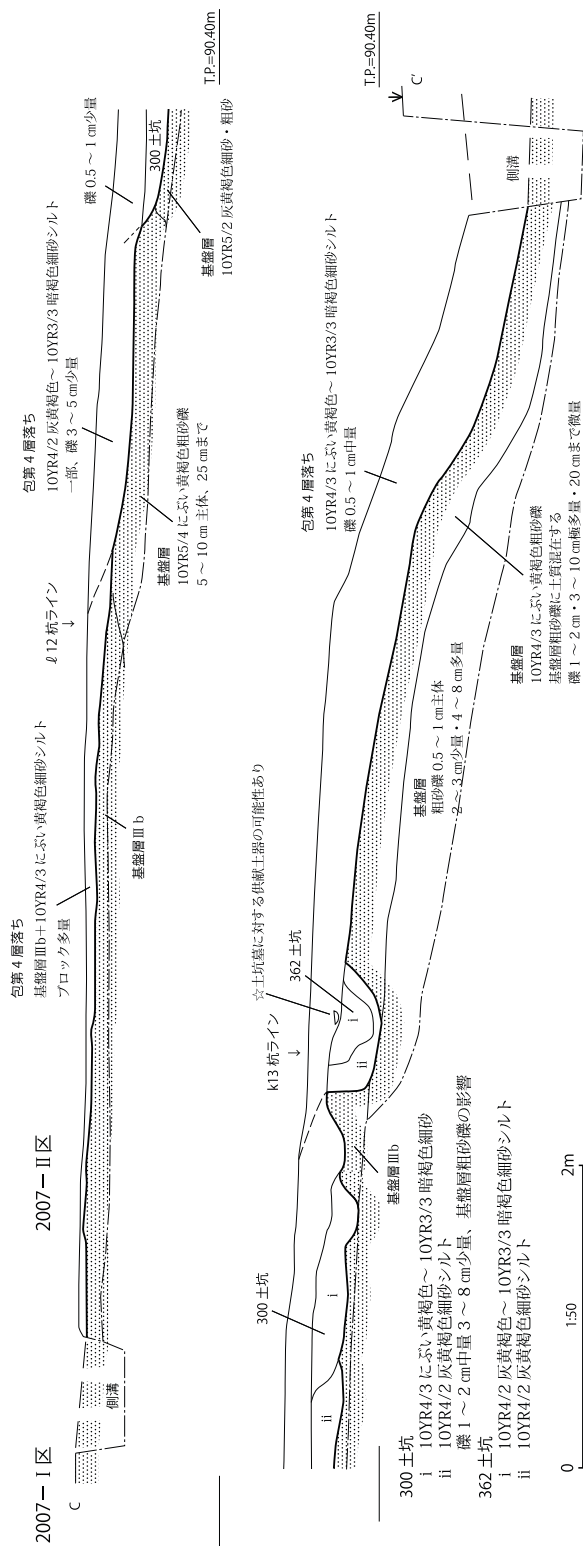


図22 2007—Ⅱ区D段 緩傾斜面堆積層断面土層図（C—C'）

（図7のC—C'断面に対応）

2007－Ⅱ区C段 緩傾斜地面堆積層 (図 20)

2007 調査区のC段は、西側から東側方向に緩やか傾斜をもって谷地形に落ちていく。第3層は、C段の東端縁辺部に存在するのみで、堆積層の主体は第4a層～第4d層の堆積土である。第4層系は、10YR5／2～4／2 灰黄褐色を基調とする粗砂礫混細砂・シルトである。遺構の多くは、第4層系堆積層下面にある。堆積層の掘削においては、第3層と第4層を区別できていない。Ⅱ区C段からの出土遺物は、576 点中 297 点 (51.6%) が奈良時代の遺物が占める。次いで、弥生時代後期後半～終末期 93 点 (16.1%) となる。

2007－Ⅱ区D段 緩傾斜地面堆積層 (図 22)

2007 調査区のD段は、北西側から南東側方向に向かって谷地形に落ちていく。基本的には、第3層がD段の一部の範囲に遺存するが、図示した断面土層図の範囲では第4層のみとなる。C段同様に遺構の大半は、第4層下面に存在する。Ⅱ区D段からの出土遺物は、363 点中 141 点 (38.8%) が平安時代末から鎌倉時代の遺物が占める。次いで、奈良時代の遺物 100 点 (27.5%)、弥生時代後期後半～終末期 92 点 (25.3%) となる。

2007－Ⅱ区 173 竪穴建物の焼粘土他 (写真 25、写真図版 4)

今後の分析に資するため、2007－Ⅱ区 173 竪穴建物の高床部の構築に供した焼粘土の貼り土・粘土焼土塊・鑄造遺構の可能性のある焼成粘土塊・炭化材、Ⅱ区 188 竪穴建物に伴う焼土遺構の一部を土ごと切り取って持ち帰っている。

整理業務の中で行えなかったが、今後、焼粘土の貼り土などの被熱温度や粘土の構成物質の分析を経て、火熱を被けた焼土か単なる赤色化した粘土なのかを検討する必要もある。

また、173 竪穴建物の構造部材の樹種同定を通して、当時の自然環境と採用部材との関係を探る手掛かりとしたい。

基盤を構成する粗砂礫層 (写真 26)

今回の調査で最も安定した基盤は、10YR6／6～6／8 明黄褐色シルトで構成されるが、段丘上特有の基盤層の形成を呈するため、何れの地区においても遺構面を構成する基盤層内に自然礫が包含される粗砂礫層が形成されている。そのため、自然礫と礫石器・石製品との区別を困難なものにする場合がある。

なお、遺物洗浄作業によって得られた自然礫の大半は、基盤層に包含される粗砂礫が成因となるが、量の多い順からチャート系・頁岩・砂岩・泥岩・粘板岩・長石・石英・その他不明となる。これらは和泉層群の構成を示すものと思われる。



写真 25 2007－Ⅱ区 173 竪穴建物の焼成粘土の取上げ
(北西から)



写真 26 2007－Ⅱ区 基盤層成因の粗砂礫

2) 2009－Ⅰ～Ⅲ区の調査

調査地は、店舗の進入路確保のため3分割し、反転調査を行った。現状は調査地全体にわたりアスファルト舗装となり、これをカッター切断し、処分対象とした。次いで、表土、耕作土、近現代整地層を重機で掘削し、排

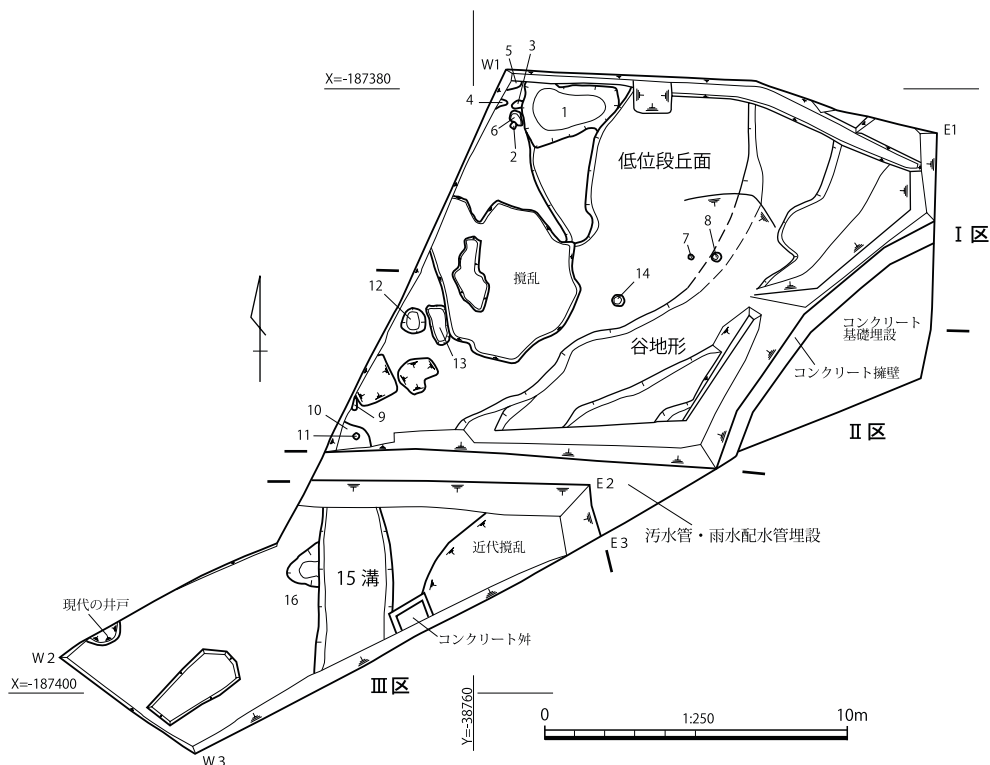


図 23 2009－Ⅰ～Ⅲ区 遺構全体平面図

土仮置場に2tダンプトラックで搬出した。これより下位層の遺物を包含する堆積層及び遺構は人力で掘削を行い、この作業に伴う排土も2tダンプトラックで仮置場に搬出した。調査終了後は、仮置場の排土を埋め戻し、アスファルト舗装で現状復旧を行った。また、掘削作業と並行して、遺構の実測及び写真撮影を実施し、調査記録を作成した。また、発掘調査と併行して出土遺物の洗浄作業・登録作業等を主とした応急整理作業として行っている。

次に、各調査区の検出遺構を地区毎に記述する。

〈2009－Ⅰ区〉(図23・24、写真27、写真図版12)

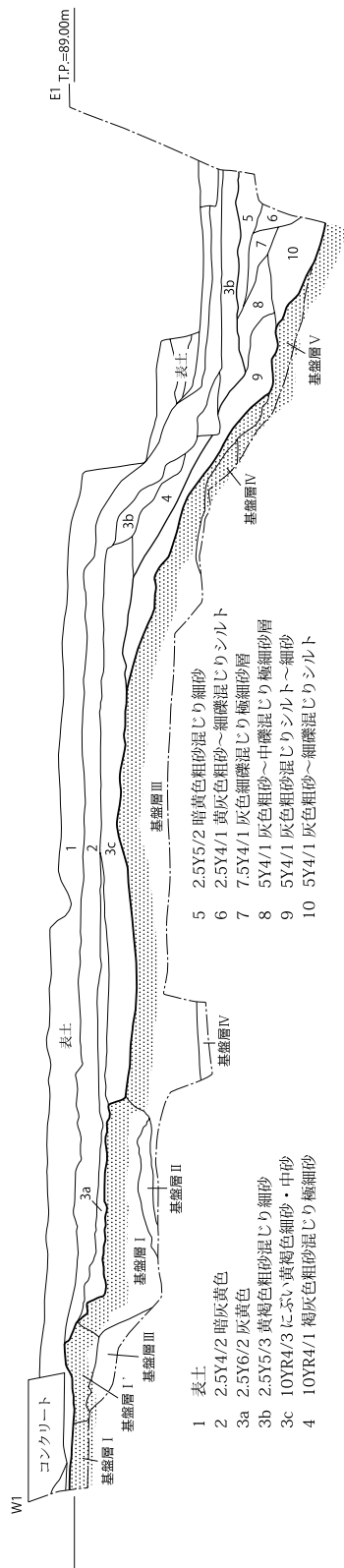
基本層序は第1層(駐車場以前の現耕作土)、第2層(現床土)、第3層2.5Y6/2黄灰色粗砂混細砂(中世遺物包含層)、これより下位層は基盤層となる。遺物包含層は調査区の一部に認められ、近世・近代の削平により純粋な遺物包含層は殆ど遺っていないかった。遺構の検出は、調査区の西側の低位段丘上北西でその殆どを検出し、東側は第1次調査から南方向に続く谷地形となる。

検出した遺構には落ち込み状遺構、土坑状遺構、ピット状遺構などがある。なお、遺構は全て基盤層上面で検出した。検出面の標高は、T.P.=約89.30mである。

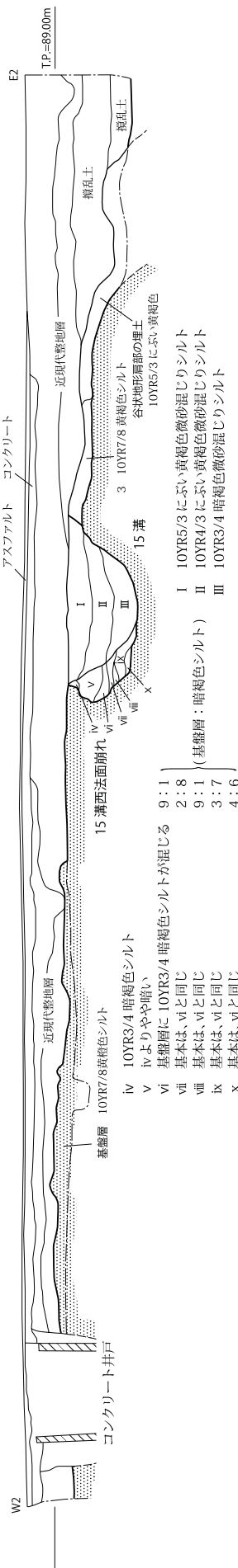
1 落ち込み状遺構

1 落ち込み状遺構は、長軸約3.0m・短軸約2.0m・深さ0.1～0.4mで、東西方向に長い楕円形状を呈する。肩部法面は、緩やかに落ち込む。東側は削平されているものと思われる。埋土は、基本的に3層に大別でき、上層から2.5Y5/3黄褐色細砂、中層2.5Y6/2灰黄色細砂、下層10YR5/4にぶい黄褐色細砂である。遺物は、弥生時代後期末の弥生土器1点、奈良時代の土師器杯・皿4点・須恵器杯・壺・甕5点、鎌倉時代の土師器皿6点・瓦器碗1点、奈良時代の平瓦1点が出土した。

2009-Ⅰ区 調査区北壁断面土層



2009-Ⅲ区 調査区北壁断面土層



2009-Ⅲ区 調査区南壁断面土層

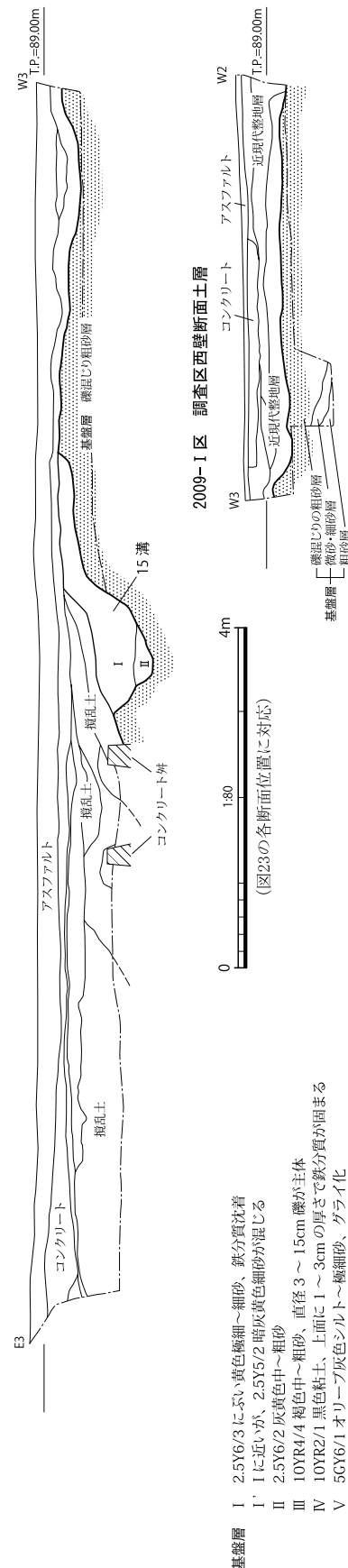


図 24 2009-Ⅰ・Ⅲ区 調査区各壁断面土層図

2ピット状遺構

規模は0.22×0.2 m・残存の深さは0.08 mである。埋土は、単層で10YR5／4にぶい黄褐色粗砂混細砂である。遺物は出土していない。

3ピット状遺構

0.37 m×0.36 m以上・残存の深さは0.08 mである。埋土は、単層で10YR5／6黄褐色細砂である。遺物は出土していない。

4ピット状遺構

遺構3と同規模である。直径0.37 m以上×0.35 m・検出の深さ0.07 mで、埋土は単層で2.5Y6／4にぶい黄色粗砂混細砂である。遺物は出土していない。

5ピット状遺構

0.47 m以上×0.38 m・残存の深さ0.14 mである。埋土は、2層に分層でき、上層10YR5／4にぶい黄褐色粗砂混細砂、下層は10YR6／2灰黄褐色粗砂混細砂に10YR6／6明黄褐色極細砂ブロックを40%含む。遺物は、上層から奈良時代の可能性のある土師器坏1点のみが出土した。

6土坑状遺構

0.58 m×0.54 m・残存の深さ0.15 mで、ほぼ円形状を呈する。埋土は2層に分層でき、上層は2.5Y5／3黄褐色、下層は2.5Y5／2暗灰黄色で、土質は共に粗砂混細砂である。遺物は出土していない。

7ピット状遺構

遺構2と同規模である。残存の深さ0.16 mである。埋土は2層に分層できる。上層は2.5Y5／2暗灰黄色、下層は5Y5／1灰色で、土質は共に粗砂混細砂～中砂である。遺物は出土していない。

8ピット状遺構

0.16 m×0.14 mの杭状の小穴である。遺物は出土していない。

谷地形 (図24、写真27)

谷地形は、東側に落ち込む2段の肩部法面を検出した。埋土は、断面土層図に示した第5層～第10層を検出した。この中で第5層～第9層を上層、第10層を下層として遺物の取り上げを行った。上層からは奈良時代の須恵器坏身・坏蓋・皿、鎌倉時代の土師器皿・瓦器・瓦質插鉢が出土した。下層からは、細片化した弥生時代後期後半の土器、奈良時代の須恵器甕が出土した。



写真27 2009－Ⅰ区 調査区北壁断面土層 (南から)

〈2009－Ⅱ区〉 (図23・24、写真図版12)

基本層序は、2009－Ⅰ区と同様で、第3層は調査区の中で僅かに遺存するだけである。遺構検出状況もⅠ区と同様に、低位段丘上で土坑状遺構、ピット状遺構、溝状遺構などを検出し、東側は谷地形となる。遺構検出面の標高は、T.P.=約89.0 mである。

9ピット状遺構

0.32 m×0.17 m以上・残存の深さ0.10 mである。埋土は、単層で10YR4／4褐色細砂に炭化物粒を微量に含む。遺物は出土していない。

10 溝状遺構

2009－Ⅲ区から続く遺構（遺構 15）と考えられる。遺物は、奈良時代の須恵器、鎌倉時代の瓦器などが出土した。遺構の詳細は遺構 15 で記述する。

11 ピット状遺構

規模は 0.25 m×0.24 m・残存の深さ 0.06 m である。埋土は、単層で 10YR5／4 にぶい黄褐色細砂に炭化物粒を含む。遺物は出土していない。

12 土坑状遺構

規模は 0.86 m×0.74 m で、南北方向に長い楕円形状を呈する。肩部法面は緩やかに落ち込み、中央で最も深い。残存の深さは中央部分で 0.2 m を測る。埋土は、10YR4／3 褐色細砂に 5～15 cm 大の礫を多く含む。遺物は出土していない。

13 土坑状遺構

遺構 12 に隣接して検出した。長軸 1.34 m・短軸 0.62 m・検出の深さ 0.04～0.06 m と非常に浅く、隅円長方形形状を呈する。埋土は、遺構 12 に同じ単層である。遺物は出土していない。

14 ピット状遺構

規模は 0.40 m×0.34 m・検出の深さ 0.24 m である。埋土は 2 層に分層でき、上層は 10YR4／2 灰黄褐色細礫混粗砂である。径 2 cm 以下の炭化物を微量に含む。下層は 10YR3／2 黒褐色細礫混粗砂で、炭化物を少量含む。遺物は出土していない。

谷地形

2009－Ⅰ区の続きとして、2 段の肩部の落ち込みを検出した。上層からは奈良時代の須恵器坏蓋、鎌倉時代の土師器皿・青磁碗・瀬戸天目茶碗などが出土し、下層からは奈良時代の土師器皿・坏・甕、須恵器壺、鎌倉時代の土師器皿・瓦器碗が出土した。

〈2009－Ⅲ区〉（図 23・24、写真 28、写真図版 12）

包含層は雨水排水管などの埋設などのため攪乱され、確認できなかった。従って、遺構は基盤層上面で検出し、標高は T.P.=88.80 m を測る。検出した遺構には、溝状遺構・土坑がある。

15 溝状遺構（写真 28）

2009－Ⅱ区で検出した遺構 10 と同一遺構と考えられる。2009－Ⅲ区では調査区の北端から南端にほぼ直線的に延びるが、Ⅱ区では西に曲がるものと考えられる。幅員約 2.0 m・深さ約 0.9 m・検出延長約 6.0 m である。埋土は、断面土層図に示したように 3 層に分層でき、レンズ状堆積を呈する。

遺物は、細片化及び磨滅の著しい奈良時代の土師器坏・皿・甕・製塩土器、須恵器坏・皿・蓋・壺、鎌倉時代の土師器皿・土師質羽釜・瓦器碗・常滑焼甕など 734 点が出土した。上層（A 層）、中層（B 層）、下層（C 層）の全ての埋土



写真 28 2009－Ⅲ区 遺構 15 調査区北壁断面土層（南から）

から土師器皿・瓦器碗が出土した。また、A層・B層からは常滑焼の体部17点が出土した。15溝状遺構は、基底部の深さから判断して北側から南側方向に走行していたものと考えられる。

16 土坑状遺構

0.66 m×1.20 m以上・残存の深さ0.36 mである。遺構15と重複して検出した。遺物は、鎌倉時代の土師器皿・瓦器碗・土師質羽釜が出土した。埋土は、遺構15の上層と酷似していたため遺構15を優先して掘削した。瓦器碗の形態の様相から、僅かに遺構15の方が古い感がある。

谷地形

谷地形の肩部は、調査地の東側が攪乱されていたため不明であった。

小結

2009－Ⅰ区から2009－Ⅲ区までの検出遺構を記述したが、第1次調査に比べて検出遺構は稀薄であった。出土遺物から見る限り、全調査区で検出できた遺構は中世段階の遺構と判断できる。

第1次調査では大別して4時期（弥生時代中期、弥生時代後期中葉～終末期、奈良時代、平安時代末～鎌倉時代）の遺構や遺物が確認されている。また、出土遺物量も第1次調査では遺物収納コンテナ50箱であるのに対して、今回の調査では3箱であった。このように出土遺物の量や遺構密度に大きな差が生じるのは、調査面積の差もあるが、遺構検出面の標高差によるものと考えられる。第1次調査の遺構検出面がT.P.=92.60 m～89.80 mの範疇に対して、第2次調査ではT.P.=89.30 m～88.80 mとなり、約3.30 m～1.0 m低いことになる。

第2次調査では、弥生時代中期の遺物はサヌカイト製石鏃未製品1点を含めて、僅か（4点）しか出土していない。弥生時代後期後半～終末期の遺物も、それと判断できるものは85点（全1,507点）である。奈良時代の遺物は、2009－Ⅰ区で僅かに確認できる中世遺物包含層や2009－Ⅰ区および2009－Ⅱ区の谷地形の上層からⅣ型式3段階（8世紀第3四半期）の須恵器など380点が出土している。鎌倉時代の遺物は、土師器皿や瓦器碗に代表され、細片化したものが多く、2009－Ⅰ・Ⅱ区で検出した谷地形の肩部から出土している（93点）。また、2009－Ⅲ区で検出した遺構15（溝状遺構）や遺構16（土坑状遺構）からも細片化した土師器皿・瓦器碗・常滑焼甕の体部が出土した（中世の遺物のみで、遺構15から526点、遺構16から77点）。瓦器碗は、その体部の形態やミガキから12世紀第2四半期～中頃と考えられる。常滑焼甕は胴部に巡る押印文の形状から口縁部が受口からN字状になる過渡期（5型式～6型式）の13世紀中頃～13世紀第3四半期と考えられる。

今回は検出遺構が希薄であったため、第2次調査の遺物から神野々Ⅰ遺跡における生活域の及ぶ範囲を推測するに留まる。時期別遺物量からは、中世の遺物が870点（全1,507点）57.7%を占める。次いで目立つのが奈良時代の遺物380点25.2%で、弥生時代は混在程度の量85点5.6%である。これらの遺物量から見ると、中世の遺物の比率が高く、細片化しているものの、大半の遺物が15溝状遺構から出土した（中世の遺物で、15溝状遺構からの出土は60.5%を占める）ことが理解できる。

以上、出土遺物からの推測ではあるが、今次の調査範囲内には弥生時代の生活域は及んでおらず、今次の調査範囲よりも高所、すなわち、第1次調査地より以東あるいは以西に求められる。

次に、中世の遺物は日常雑器が殆どで、一般集落から出土するものである。中世になって集落がより南側にも展開され、神野々廃寺での中世遺構・遺物との関係が注目される。

第Ⅳ章 総括

今次の神野々Ⅰ遺跡の調査により様々な時代の生活遺構が残っていることが明らかとなった。本格的な出土遺物の整理作業によって各遺構の所属時期の解明が進んだことから、改めて詳細な画期を見い出すことが可能になった。また、吉原川による開析谷の広がり的一部、谷地形の堆積層に多量の遺物が廃棄されていたことから、往時の生活域との関係が把握できるようになってきた。

遺物は、弥生時代中期・後期中葉～終末期（庄内式併行期）、奈良時代、鎌倉時代などの総数 9,745 点の土器・石器などがある。これらの多数の遺構・遺物の発見から、今回の調査では、弥生時代中期前葉～中葉、弥生時代後期中葉～終末期、奈良時代、平安時代末～鎌倉時代の四つの時代に大別して見ることができる。

ここでは今次の調査によって得られた資料を、時代毎に順を追ってまとめることにする。

縄文時代後期

図示掲載していないが、Ⅱ区C段H4—m17の122柱穴から縄文時代後期と考えられる縄文土器（111）1点が出土したのみである。この事実は、今後の調査において縄文時代の遺構・遺物についても注意を払う必要のあるところである。

弥生時代中期

弥生時代中期では、調査地全体で遺物は出土した。但し、2007—Ⅱ区F段における遺構調査は、土坑を確認したのみで、十分なものになっていない。遺物は、中期弥生土器（壺・甕）、サヌカイト製石器・剥片がある。中期弥生土器は、僅かながら当該地域の他地域からの搬入状況を端的に表している。

遺物整理の結果、弥生時代中期前葉～中葉の土器（母数 121 点）は、地元（不明含む）・大和（盆地南西部）・河内（生駒山西麓）・紀伊（紀の川下流域）の物が混在し、河内産が約半数（46%）を占めることが明らかとなった。

このことから、紀の川中流域の伝播の中間点として、河内（生駒山西麓）を主体とした動きの様相を探ることが可能となる。今次の調査は、紀の川北岸にみられる低位段丘上での調査事例が少ないことから、貴重な調査例となる。特に、弥生時代中期では、周辺の東家遺跡（橋本市 74）・柏原遺跡（市 48）や名古屋Ⅰ遺跡（旧高野口町 5）・名古屋Ⅲ遺跡（町 10）で弥生時代中期中葉～後葉の他地域から持ち運ばれてきた搬入土器が数多く出土していることから、遺構・遺物共に紀の川下流域と上流域（奈良県吉野川流域）、さらには中期前葉から河内（生駒山西麓）や大和盆地南西部との関係様相を念頭において考えることが具体的になった。

弥生時代後期中葉～終末期

弥生時代後期中葉～終末期では、集落を構成する竪穴建物・土坑などがある。遺物は、後期中葉～終末期弥生土器（壺・甕・高坏・鉢・蓋・有孔土製品・土製装飾品）など、まとまった遺物量である。遺物全体の中で約 1／3 の比率（35.0% 3,411 点）を占める。

遺物の内、二重口縁壺（214）や手焙り形土器（186・227）の出現は、大半が後期～終末期の土器として、期を一にし紀の川流域の中で共通する様相を呈するものである。広口壺の形状や装飾文様（広口壺 66）・調整技法、受け口状口縁甕（70）においても共通要素と考えられる。

総体として谷地形の弥生土器は弥生時代後期中葉から後葉を主体とし、F 段 173 竪穴建物・D 段 318

土坑の遺物は弥生時代終末期の様相を呈する。谷地形の弥生時代の遺物に対応する段階弥生時代後期中葉から後葉の遺構は、未検出である。また、谷地形での弥生時代後期後半や終末期の単純な堆積層が存在しないことから、集落の生活で進行した廃棄行動を推し量ることはできない。

さらに、周辺部の山田瓦窯跡（市 34）から弥生時代後期中葉の長頸壺が、対岸の学文路Ⅲ遺跡（市 50）から弥生時代後期後半の遺物の出土を見るが、当該領域での遺跡・集落からの展開を探るには無理がある。神野々廃寺の調査での弥生時代後期の出土は確認されていない。西側一帯の応其条里での遺物の散布も確認されていない。これらのことから、現状では、当該期の神野々Ⅰ遺跡の様相は、狭い領域での集落展開を考えるしかない状況にある。

一方、竪穴建物の構造では、高床部の貼り土に焼成粘土や焼成粘土塊を使用する特殊と思われる構築方法に目を引く。

古墳時代

古墳時代では、須恵器（坏身）などの遺物が、古墳時代終末期との関係を示唆する内容である。特に遺構は確認していないため、集落としての展開は不明である。

奈良時代

奈良時代では、集落を構成する竪穴建物・掘立柱建物・土坑などがある。遺物は、多くの土師器（坏・皿・蓋・高坏・甕・移動式竈）、須恵器（坏・皿・蓋・高坏・壺・甕）、緑釉陶器（皿）、瓦（軒丸瓦・丸瓦・平瓦）など、遺物全体の中で約 1/3 の比率（33.3% 3,215 点）を占める。

平成 19 年度（2007）に行った神野々Ⅰ遺跡の調査では、土器や瓦などの遺物（表 3 2007 調査区 2,835 点）がある。これらの内、大破片の遺物は、調査地の東側に位置する開析谷へ押し出された堆積層の中から出土したもの（2007 調査区谷地形から出土した奈良時代遺物は、41.7% 1,182 点（層序要素 8～11））である。

これらの遺物・数値の提示は、南約 200 m に位置する神野々廃寺との関連を検討することが可能となってきた。関連の検討と言っても、間接的な関係が認められるが、直接どのように結びつくかは推測の域を出ない状態である。

神野々廃寺では寺院廃絶後、鎌倉時代に集落が営まれており、複数の掘立柱建物跡が検出されている。周辺遺跡の名古曾廃寺（旧高野口町 4）や佐野廃寺（かつらぎ町佐野）では、寺院造営に関連する集落が確認されていないが、神野々Ⅰ遺跡では今後、調査地と神野々廃寺の位置関係と調査の内容から寺院造営に関連する集落跡が発見される可能性のあるところである。

平安時代末～鎌倉時代

平安時代末～鎌倉時代では、掘立柱建物・柱穴列・屋敷地の区画溝・土坑などがある。土坑の大半は、鎌倉時代の遺構群の北西側に集中する傾向があり、区画溝に囲まれた屋敷地の外側に展開する土坑墓の可能性が考えられる。遺物は、土師器（皿・小皿・土釜）、瓦器（椀・皿・鉢・甕）、須恵器（甕・捏鉢）、陶器（常滑・瀬戸美濃）、磁器（青磁・白磁）など、遺物全体の中で約 1/4 の比率（24.5% 2,329 点）を占める。出土遺物の内、2007－Ⅱ区 A 段 H4－ℓ 20 谷地形第 4 層から出土の緑釉の皿 1 点の評価も難しいところである。

谷地形から弥生時代後期後半の遺物に奈良時代の遺物が混在して（第 4 b 層・第 4 c 層）出土する状況は、平安時代末～鎌倉時代前期の屋敷地地業によるものと判断する。これを中世における集落の成立として第一段階目の画期と見做すことが可能である。次いで、遺構・遺物が最も顕著に見られる段階の

鎌倉時代中期を第二段階目の画期と考える。

調査で検出した平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物2棟以上・柱穴列1箇所・土坑墓群と耕作跡の関係は、2007－Ⅰ・Ⅱ区を通して認められることから、耕地と屋敷地が調査地の西端付近で区別されていたものと思われる。と考えていたが、検討の結果、同時併存ではなく耕地開発による水田化の実態は、鎌倉時代中期13世紀後半以後にあったと考えられる。

2007－Ⅱ区A・B段谷地形の1水溜め遺構の遺物に古相の形態的要素が見受けられ、第一段階目の画期と対応して12世紀後半から13世紀前半の年代観を与えることが可能である。その後、第二段階目の画期と対応して、13世紀後半にかけて集落が展開する。神野々廃寺での調査と併せて、広範な集落の展開が認められる。今後、この集落が応其条里とどのように結びつくかも考えていく必要がある。

遺物の内、開析谷への遺物の埋積が神野々Ⅰ遺跡の西側一帯に広がる応其条里の土地開発の時期と密接に関係し、鎌倉時代の遺構・遺物の混在状況の有無から、土地開発の一端が奈良時代と鎌倉時代にあると判断した。その後、14世紀前半期の遺構・遺物が認められないことから、この期に至って一気に耕地開発が進んだものと考えられる。これが中世における第三段階目の画期である。このように、平安時代末から鎌倉時代の段階は、屋敷地と水溜め遺構、また谷地形堆積層からの遺物との関係を考えることによって変遷・画期が見えてくるものであろう。

また、Ⅰ区C・D段では、遺物包含層・検出遺構がほとんど存在しない在り方に比例して、出土遺物も少ない状態にある。これらのことは、中世以後における低位段丘上での大規模な耕地開発、第三段階目以後の画期である。以上のことから広範に及ぶ応其条里の条里型地割の形成が14世紀前半にあったかどうか興味深いところである。

その他、低位段丘から吉原川の開析谷に向かって低くなる谷斜面では、約4.7～3.56mの高低差を認めことができる。この調査地内での高低差は、現状地形や昭和23年の航空写真では、約200m南側の神野々廃寺の塔跡の東側に続くことが確認でき、低位段丘の裾に吉原川の旧河道が存在したものと認められる。広くは、約110～125m離れた南東側の対岸の低位段丘までが吉原川の流れによって形成された一連の開析谷であることが判明し、多くの資料を得ることができた。

また、2003『紀の川流域荘園詳細分布調査概要報告書Ⅱ—高野枌をつくらせた荘園—』によると、神野々廃寺の坪から2町ないし3町分西側の旧高野口町伏原地区に「堂後」「堂西」「大門」「堂前」の小字名が残る(図34・35)。このことは、今次の調査と直結しないが、神野々廃寺との関係から非常に興味深いところでもある。

なお、中世におけるそれぞれの画期について文献史料からの検討は行っていない。しかし、中世では官省符荘の紺野村に属する地域で、古代には応其条里の東端が及んでいたと考えられる地域でもある。調査地は、地表面の観察からは応其条里の地割から外れた東側外縁部の範囲に位置し、往時の遺構を窺うことはできないが、調査により2007－Ⅱ区C段の南西端において耕作跡が検出できたことから不安定な立地においても耕地を拡大していった様相が窺える。

表 3 2007・2009調査区 各層序別遺物数量

層序要素	調査地区	大凡の時代		弥生中期		弥生後期 (庄内式含む)		古墳				奈良				平安末・鎌倉・室町								江戸			不明	合計	備考								
		各層序	層序要素 遺構面 整地層・堆積層	弥生土器	石器 剥片 他	小計	弥生土器	石器 剥片 他	小計	土師器	須恵器 その他	小計	土師器	瓦器	須恵 土器	瓦質 土器	陶器	磁器	その他	小計	土師 器	瓦器	土産 器	須恵 土器	瓦質 土器	陶器				磁器	その他	瓦	小計				
1	Ⅱ区E・F段 173堅穴建物 下層・下層下部・最下層 Ⅱ区E・F段 173堅穴建物 埋土一括 中層一括 Ⅱ区F段 188堅穴建物間隙 Ⅱ区A段 1井戸状・1遺構 掘削時・遺物取り上げ時 Ⅱ区C段 各遺構・各埋土 Ⅱ区D段 各遺構・各埋土 Ⅰ・Ⅱ区F段 各遺構・各埋土 Ⅱ区A・B段 谷地形落ち 包含層第4b層一括・第4b層下部一括・第4c層一括 Ⅱ区A段 谷地形落ち 包含層第4a層下部一括・B段 最下部 Ⅱ区A・B段 谷地形落ち 包含層第4a層一括・第4層一括 Ⅱ区A・B段 谷地形落ち 包含層第3c層一括 (第4a層含む) Ⅱ区C段 包含層落ち(谷地形と区別) 包含層第4層一括・第3層含む Ⅱ区D段 包含層落ち 第4層一括・第3層系一括・第3層一括 Ⅱ区F段 包含層 第4層一括・第3層一括 Ⅱ区F段 包含層 第3層系下部一括 F段 ベース直上 Ⅱ区F段 包含層 第3層系一括 Ⅰ・Ⅱ区 表土・掘乱 第2層系・第3層より上位	15	2	17	240	1	241	0	0	0	18	0	1	0	0	19	1	0	5	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	2	285	埴輪埋土下位層					
2		27	13	40	683	1	684	0	0	0	23	0	9	0	1	33	44	3	10	0	0	0	57	0	0	0	0	0	0	0	814	埴輪埋土上位層					
3		1	3	4	20	0	20	0	0	0	270	0	32	0	1	303	56	27	3	0	0	8	0	94	0	0	0	0	0	0	2	423	埴輪埋土一括				
4		0	0	0	58	0	58	0	2	0	43	1	35	0	2	81	50	114	9	4	1	2	1	184	0	1	0	1	0	0	3	329	1井戸状・1遺構一括				
5		2	3	5	126	0	126	0	0	0	216	0	29	0	1	246	13	33	3	1	0	0	1	51	0	0	0	0	0	0	43	471					
6		3	1	4	78	0	78	0	0	0	31	0	31	0	0	62	22	19	2	0	0	1	0	45	0	0	0	0	0	0	1	190					
7		3	1	4	38	1	39	0	0	0	152	2	38	1	0	193	167	52	30	0	0	3	0	252	0	0	0	0	0	0	15	503					
8		5	0	5	368	1	369	0	6	0	6	11	0	14	0	0	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	405						
9		4	1	5	412	0	412	0	0	0	33	0	29	0	0	62	3	1	1	7	0	0	0	12	0	0	0	0	0	2	493						
10		12	2	14	851	1	852	0	1	0	1	458	2	207	1	7	675	13	18	0	3	1	2	0	39	0	0	0	0	0	14	1595					
11		5	3	8	98	0	98	1	0	0	1	291	3	121	0	5	420	15	19	4	1	0	2	0	42	0	1	1	0	2	25	596					
12		6	1	7	93	0	93	0	0	0	0	213	0	78	0	6	297	27	22	0	1	0	0	2	3	55	0	1	0	0	1	576					
13		3	4	7	92	0	92	0	0	0	0	35	0	65	0	0	100	93	24	16	2	0	5	0	1	0	141	0	1	0	1	22	363				
14		14	6	20	45	1	46	0	0	0	0	14	0	1	0	0	15	4	3	1	0	0	1	0	9	0	0	0	0	0	10	100					
15		17	4	21	54	0	54	0	0	0	0	125	0	41	0	2	168	188	90	51	5	0	20	0	1	0	355	0	1	0	0	63	662				
16		3	0	3	48	0	48	0	0	0	0	48	0	50	0	2	100	84	64	13	4	1	7	3	1	0	177	0	6	1	0	7	363				
17		0	1	1	16	0	16	0	0	0	0	23	0	12	0	1	36	0	2	0	1	0	0	3	0	10	0	0	0	4	70						
小計				120	45	165	3320	6	3326	1	9	0	10	2004	8	793	2	28	2835	780	491	148	29	3	50	7	11	3	1522	0	21	2	0	23	357	8238	
18	2	各遺構・各埋土		0	2	2	36	0	36	0	3	0	3	71	4	49	0	1	125	265	256	64	2	0	18	2	3	0	610	0	0	0	54	830	主に15溝・16土坑		
19	0	谷地形落ち 包含層堆積層		0	0	0	26	0	26	0	1	0	1	100	1	28	0	1	130	64	7	19	0	0	1	0	2	0	93	0	1	0	1	24	275		
20	Ⅰ	包含層 第3層・第3b層・第4層		1	0	1	10	0	10	0	0	0	0	24	1	15	0	1	41	68	3	14	1	0	0	1	1	0	88	1	0	0	1	13	154		
21	Ⅲ区	表土・第2層		0	1	1	13	0	13	0	11	0	11	44	5	33	0	2	84	50	16	5	1	1	2	1	3	0	79	0	5	0	5	55	248		
小計				1	3	4	85	0	85	0	15	0	15	239	11	125	0	5	380	447	282	102	4	1	21	4	9	0	870	1	6	0	0	7	146	1507	
合計				121	48	169	3405	6	3411	1	24	0	25	2243	19	918	2	33	3215	1227	773	250	33	4	71	11	20	3	2392	1	27	2	0	30	503	9745	不明の大半が古代・中世の土師器破片

表4 2007-Ⅱ区 遺物接合関係一覧1

登録番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層	遺物接合関係	登録番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層
141	Ⅱ区 B段縁 H4-k16東半	谷地形包落ち	第4 a層一括 (一部第3 c層混)	← ●奈良須恵器壺	148	Ⅱ区 A段 H4-k16東半	谷地形包落ち	第4 b層一括 (一部第4 a層混) 第4層一括扱い
					146	Ⅱ区 A段 H4-j15・16 北端	谷地形包落ち	第4 b層一括
117	Ⅱ区 A段 H4-k18	谷地形包落ち	第4 a層下部一括	←	124	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層上部一括 下部含む
239	Ⅱ区 A段 H4-k18西半	1水溜め遺構 石組内	——	●鎌倉須恵器 東播系甕	125	Ⅱ区 A段 H4-k18	谷地形包落ち 1遺構	第4 a層一括 第3層系含む
227	Ⅱ区 F段 H4-j7	——	包第3層系下部一括		148	Ⅱ区 A段 H4-k16東半	谷地形包落ち	第4 b層一括 (一部第4 a層混) 第4層一括扱い
142	Ⅱ区 A段 H4-k16西半	谷地形包落ち	第4 a層下部一括	← ●奈良須恵器甕 (大)	134	Ⅱ区 B段 H4-j・k17東 半	谷地形包落ち	第4 a層下部一括
129	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部一括	→	128	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部一括 一部上部含む
177	Ⅱ区 A段 H4-j17	谷地形包落ち	第4 b層一括 第4 a層含む		148	Ⅱ区 A段 H4-k16東半	谷地形包落ち	第4 b層一括 (一部第4 a層混) 第4層一括扱い
					143	Ⅱ区 A段 H4-j17西半 ・k17東半	谷地形包落ち	第4 a層下部一括
145	Ⅱ区 A段 H4-j16	谷地形包落ち	第4 b層上部一括	← ●奈良須恵器 長頸壺	144	Ⅱ区 A段 H4-j16	谷地形包落ち	第4 a層一括
					147	Ⅱ区 A段 H4-j16	谷地形包落ち	第4 b層一括
149	Ⅱ区 B段 H4-k15・16 北半	谷地形包落ち	第4 a層～ 第4 c層一括 第4層扱い	← ●奈良須恵器壺	113	Ⅱ区 A段 H4-j・k17	谷地形包落ち	第4 a層上部一括
147	Ⅱ区 A段 H4-j16	谷地形包落ち	第4 b層一括	← ●後期弥生高環	149	Ⅱ区 B段 H4-k15・k16 北半	谷地形包落ち	第4 a層～ 第4 c層一括 第4層扱い
128	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部一括 一部上部含む	← ●奈良須恵器甕	144	Ⅱ区 A段 H4-j16	谷地形包落ち	第4 a層一括
150	Ⅱ区 A段 H4-k16・17	谷地形包落ち	第4 b層一括 (一部第4 a層混) 第4層扱い	← ●後期弥生甕	151	Ⅱ区 B段 H4-k16西半	谷地形包落ち	第4 a層一括 (一部第4 b層含 む) 第4層扱い
127	Ⅱ区 A段 H4-j17・k17 東半	谷地形包落ち	第4 a層下部一括	→	129	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部一括
168	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部	← ●後期弥生 小型高環脚台	166	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部
					129	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部一括
168	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部	← ●後期弥生 高環環部	132	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部
160	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部		128	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部一括 一部上部含む
157	Ⅱ区 A・B 段法面 H4-j15西半	谷地形包落ち	第4 b層一括	← ●奈良須恵器 高台付鉢	146	Ⅱ区 A段 H4-j15・ j16北端	谷地形包落ち	第4 b層一括
483	Ⅱ区 A・B段 H4-k16	谷地形包落ち	第4 b層系一括 (第4 a層系混)		147	Ⅱ区 A段 H4-j16	谷地形包落ち	第4 b層一括
					177	Ⅱ区 A段 H4-j17	谷地形包落ち	第4 b層一括 第4 a層含む
176	Ⅱ区 A段 H4-k17 北西半	谷地形包落ち	第4 a層 +粗砂小礫層	← ●後期弥生 二重口縁壺or高環	150	Ⅱ区 A段 H4-k16・17	谷地形包落ち	第4 b層一括 (一部第4 a層混) 第4層扱い
					485	Ⅱ区 A段 H4-k16・j17	谷地形包落ち	第4 b層系一括
174	Ⅱ区 A段 H4-k17 南西半	谷地形包落ち	第4 b層上部一括 (下部)	← ●後期弥生甕	129	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4 a層下部一括

●報告書掲載遺物 ○報告書未掲載遺物
(谷地形包落ち=谷地形堆積層)

表5 2007-Ⅱ区 遺物接合関係一覧2

登録番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層	遺物接合関係	登録番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層
148	Ⅱ区 A段 H4-k16東半	谷地形包落ち	第4b層一括 (一部第4a層混) 第4層一括扱い	○奈良須恵器甕	141	Ⅱ区 B段縁 H4-k16東半	谷地形包落ち	第4a層一括 (一部第3c層混)
149	Ⅱ区 B段 H4-k15・16 北半	谷地形包落ち	第4a層～ 第4c層一括 第4層扱い	○後期弥生壺 体部	157	Ⅱ区 A・B段 法面 H4-j15西半	谷地形包落ち	第4b層一括
129	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4a層下部一括	●後期弥生高坏	161	Ⅱ区 A段 H4-k17西半	谷地形包落ち	第4a層下部
175	Ⅱ区 A段 H4-k17 中央	谷地形包落ち	第4b層	●後期弥生小鉢	175	Ⅱ区 A段 H4-k17 中央	谷地形包落ち	第4b層
178	Ⅱ区 A段 H4-j16	谷地形包落ち	ベース直上 第4b層一括	●後期弥生 高坏坏部	150	Ⅱ区 A段 H4-k16・17	谷地形包落ち	第4b層一括 (一部第4a層混) 第4層扱い
237	Ⅱ区 F段 H4-ℓ7	――	包第3層系下部一括	○鎌倉瓦器椀	235	Ⅱ区 F段 H4-ℓ9	――	包第3層系一括
360	Ⅱ区 C段 H4-ℓ・m15・ 16	160落ち 埋土一括	――	●奈良土師器坏	355	Ⅱ区 C段 H4-ℓ15	160土坑 埋土一括	――
386	Ⅱ区 F段 H4-k・ℓ7	188竪穴建物 D区埋土一括	――	○奈良土師器甕	385	Ⅱ区 F段 H4-k7・ℓ7	188竪穴建物 B区埋土一括	――
396	Ⅱ区 F段	263南北区画溝 埋土下層	――	●奈良土師器甕	386	Ⅱ区 F段 H4-k7・ℓ7	188竪穴建物 D区埋土一括	――
385	Ⅱ区 F段 H4-k・ℓ7	188竪穴建物 B区埋土一括	――	●奈良土師器甕	394	Ⅱ区 F段	188竪穴建物 D区埋土一括	――
483	Ⅱ区 A・B段 H4-k16	谷地形包落ち	第4b層系一括 (第4a層系混)	●奈良土師器甕	484	Ⅱ区 A段 H4-k16・j17	谷地形包落ち	第4a層系一括 (第4b層系混)
123	Ⅱ区 A段 H4-j・k17東 半	谷地形包落ち	第4a層上部一括 (下部)	●後期弥生広口壺	485	Ⅱ区 A段 H4-k16・j17	谷地形包落ち	第4b層系一括
147	Ⅱ区 A段 H4-j16	谷地形包落ち	第4b層一括	●後期弥生長頸壺	484	Ⅱ区 A段 H4-k16・j17	谷地形包落ち	第4a層系一括 (第4b層系混)

●報告書掲載遺物 ○報告書未掲載遺物
(谷地形包落ち＝谷地形堆積層)

表6 弥生時代中期の土器内容

地域	地元 (不明含める)			紀伊 (紀の川下流域)		河内 (生駒山西麓)		大和 (盆地南西部)		合計
器種	壺	甕	甌	壺	甕	壺	甕	壺	甕	
破片点数	18	10	1	4	21	56	0	3	8	121点
小計	29			25		56		11		121点
比率	24%			21%		46%		9%		100%

表7 弥生時代中期の石器他内容

石材	サヌカイト					礫	結晶片岩	
種類	石鏃	石錐	搔器	楔形 石器	剥片	磨石 敲石	石棒	合計
点数	1	1	5	1	37	2	1	48点

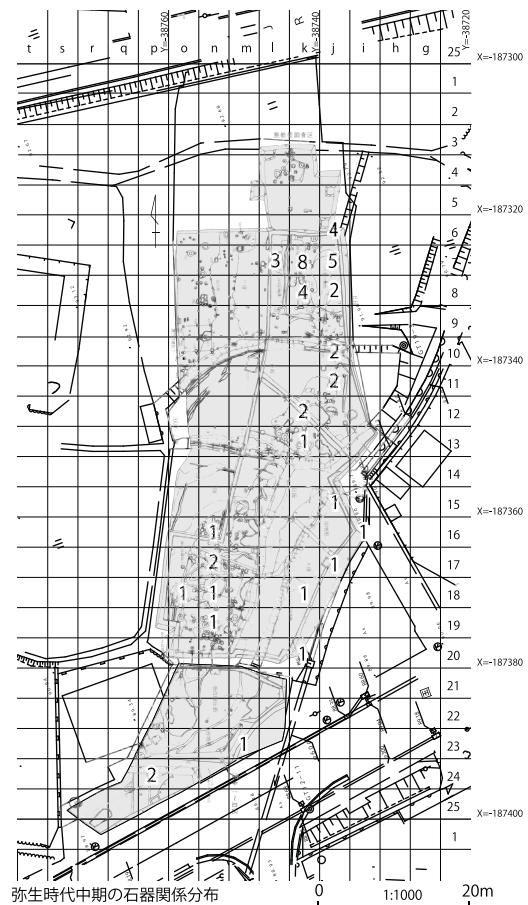
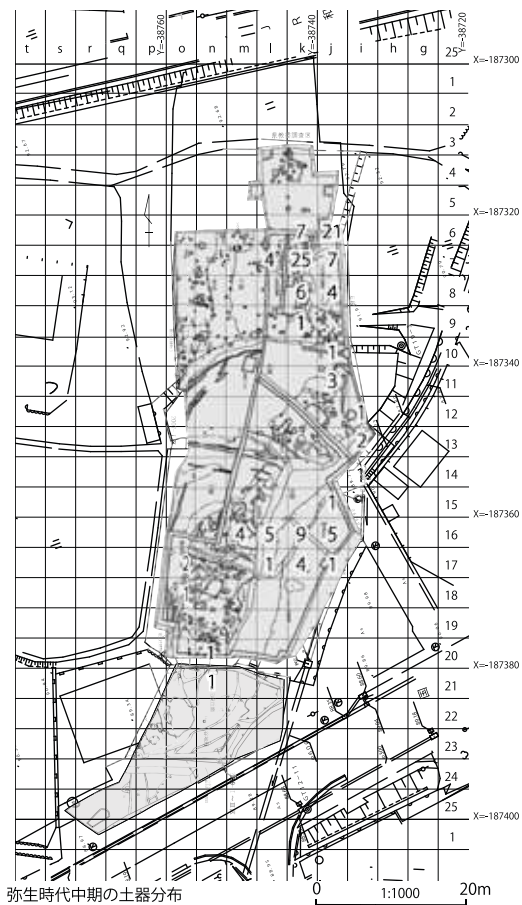
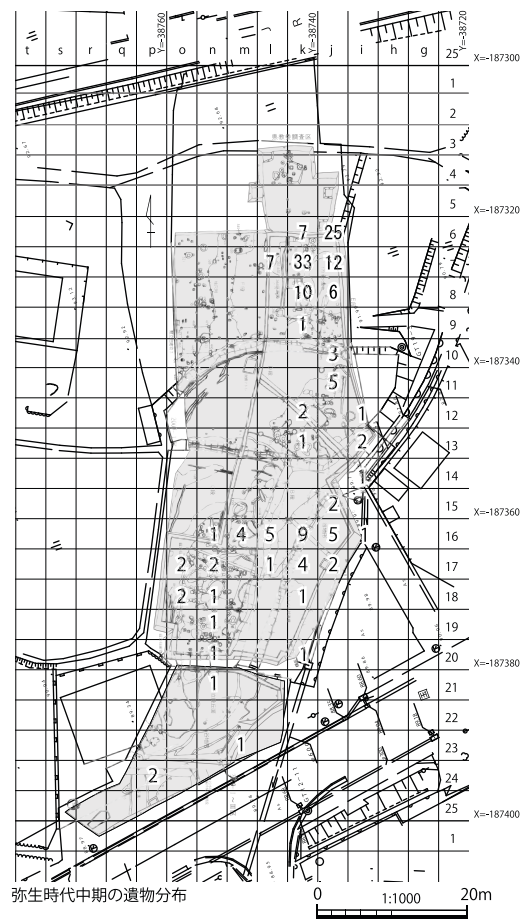


図 25 2007・2009 調査区 弥生時代中期の遺物分布図

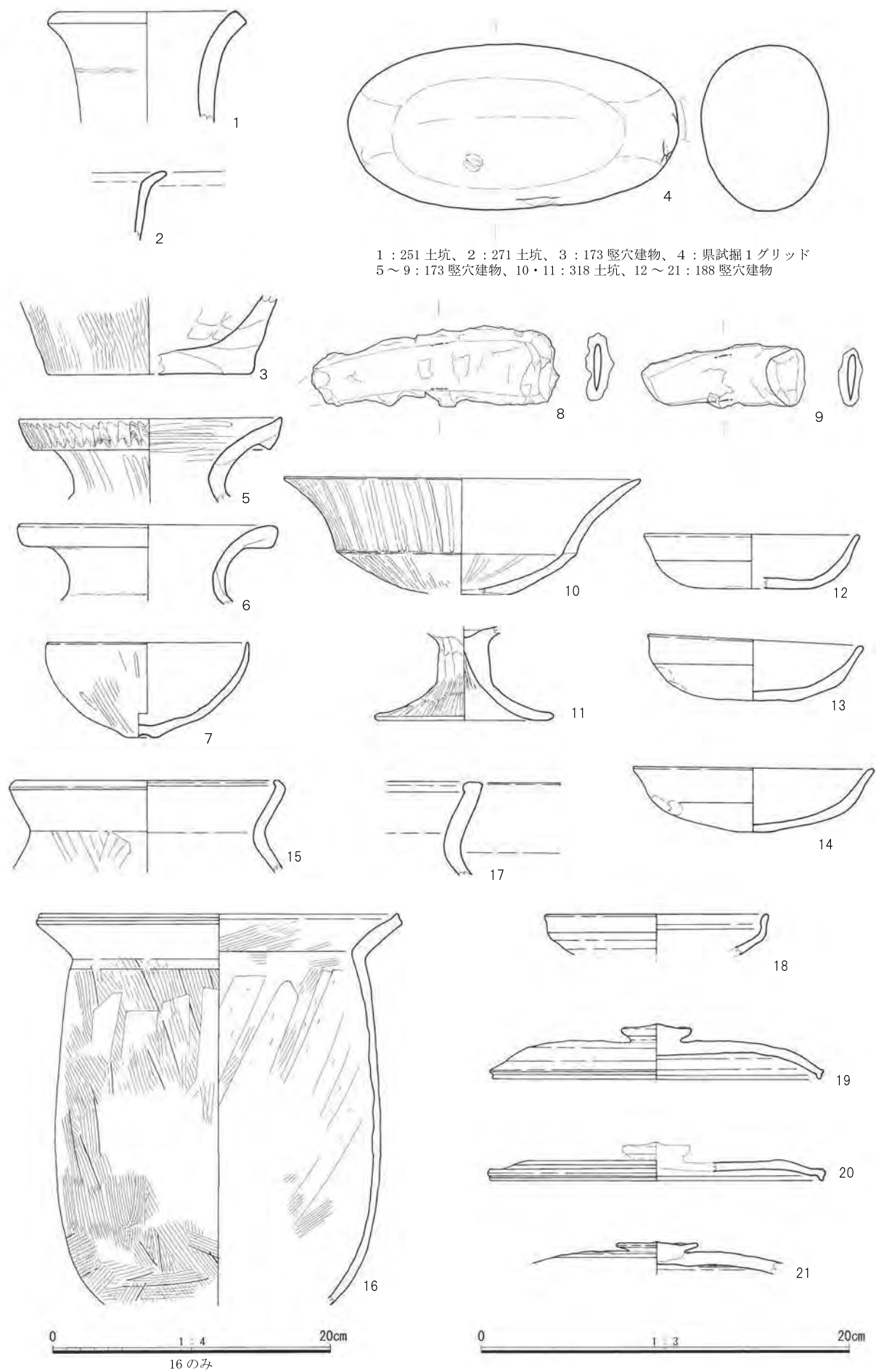


図 26 出土遺物実測図 1（各遺構出土遺物 1）

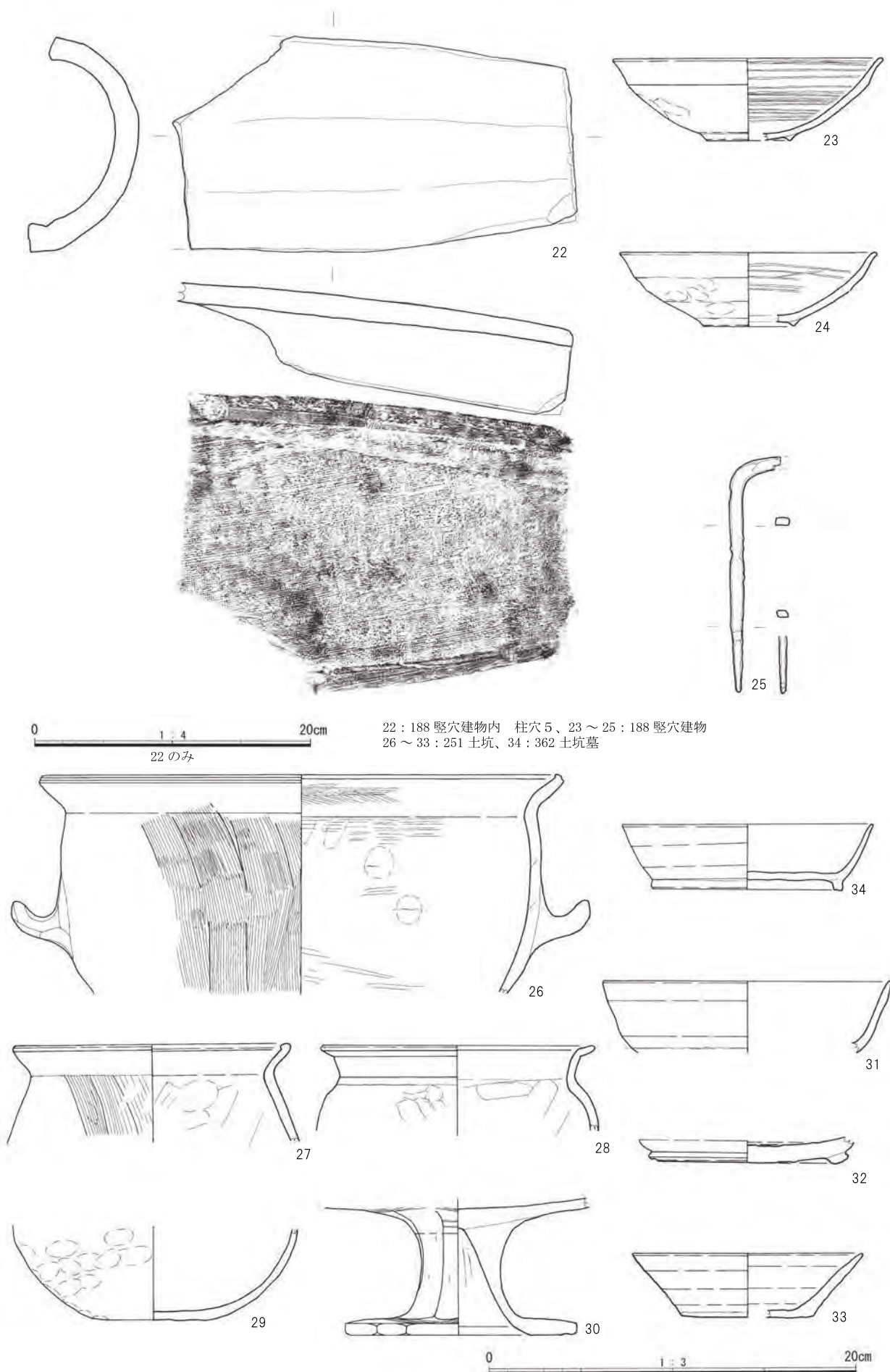
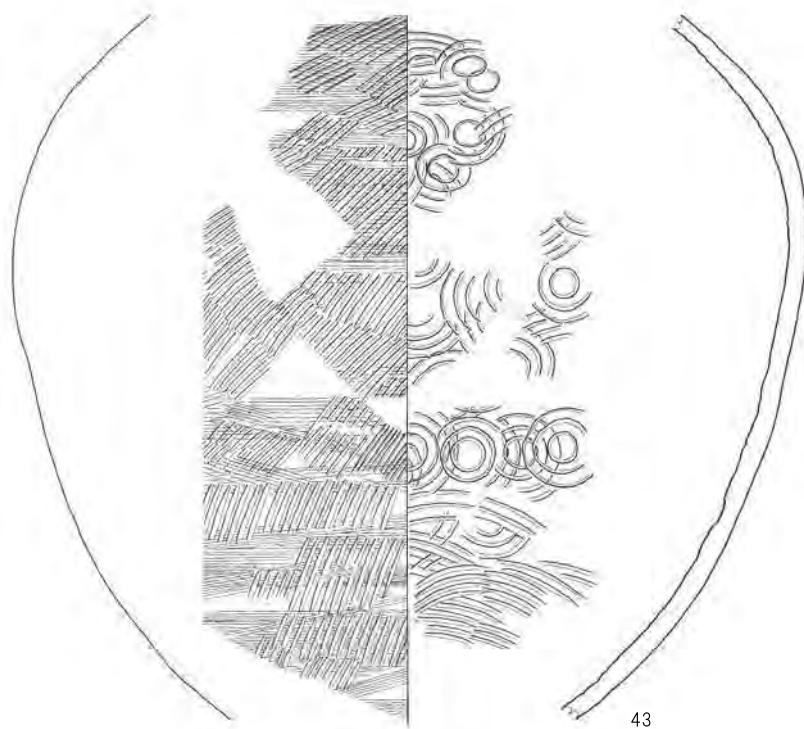
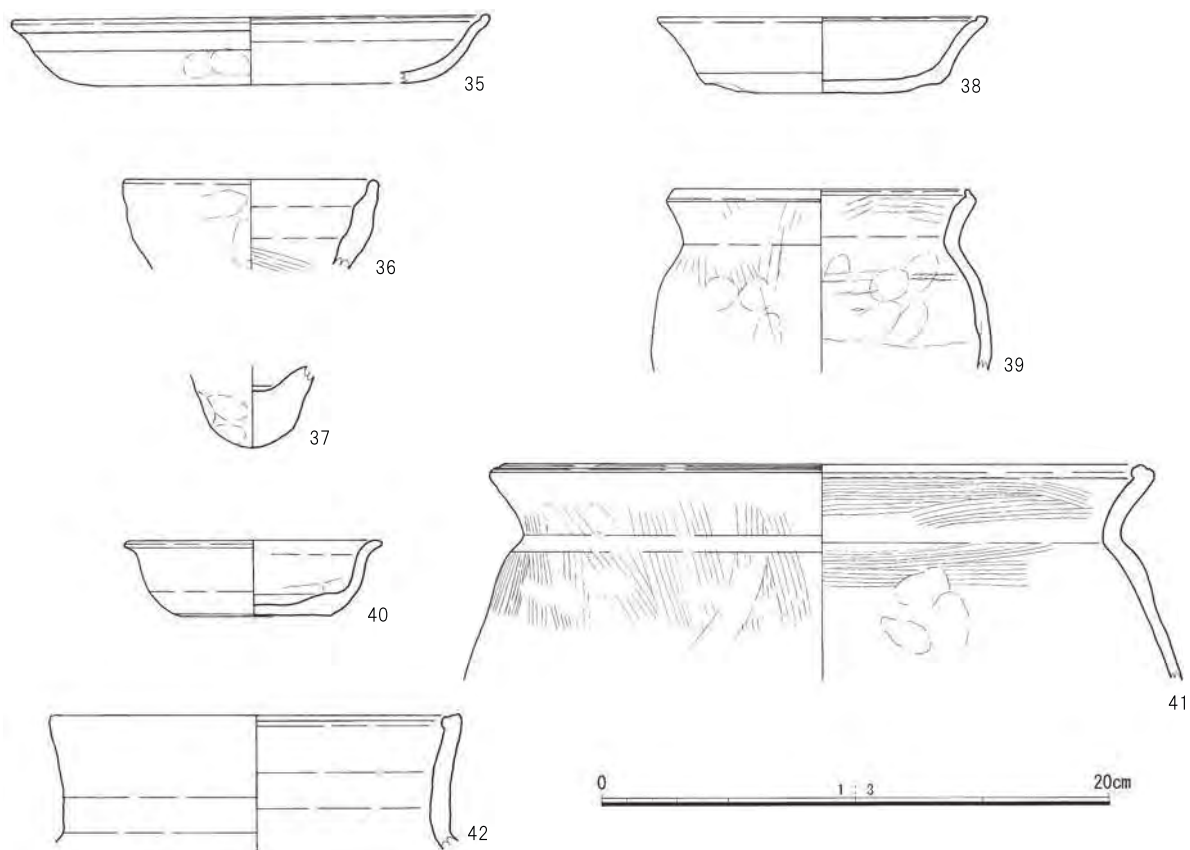


図 27 出土遺物実測図 2 (各遺構出土遺物 2)



35 : 446 柱穴、36 : 341 土坑、37 : 261 柱穴、38・39 : 160 土坑
40・41 : 28 土坑、42 : 252 柱穴、43 : 300 土坑

0 1 4 20cm
43 のみ

図 28 出土遺物実測図 3 (各遺構出土遺物 3)

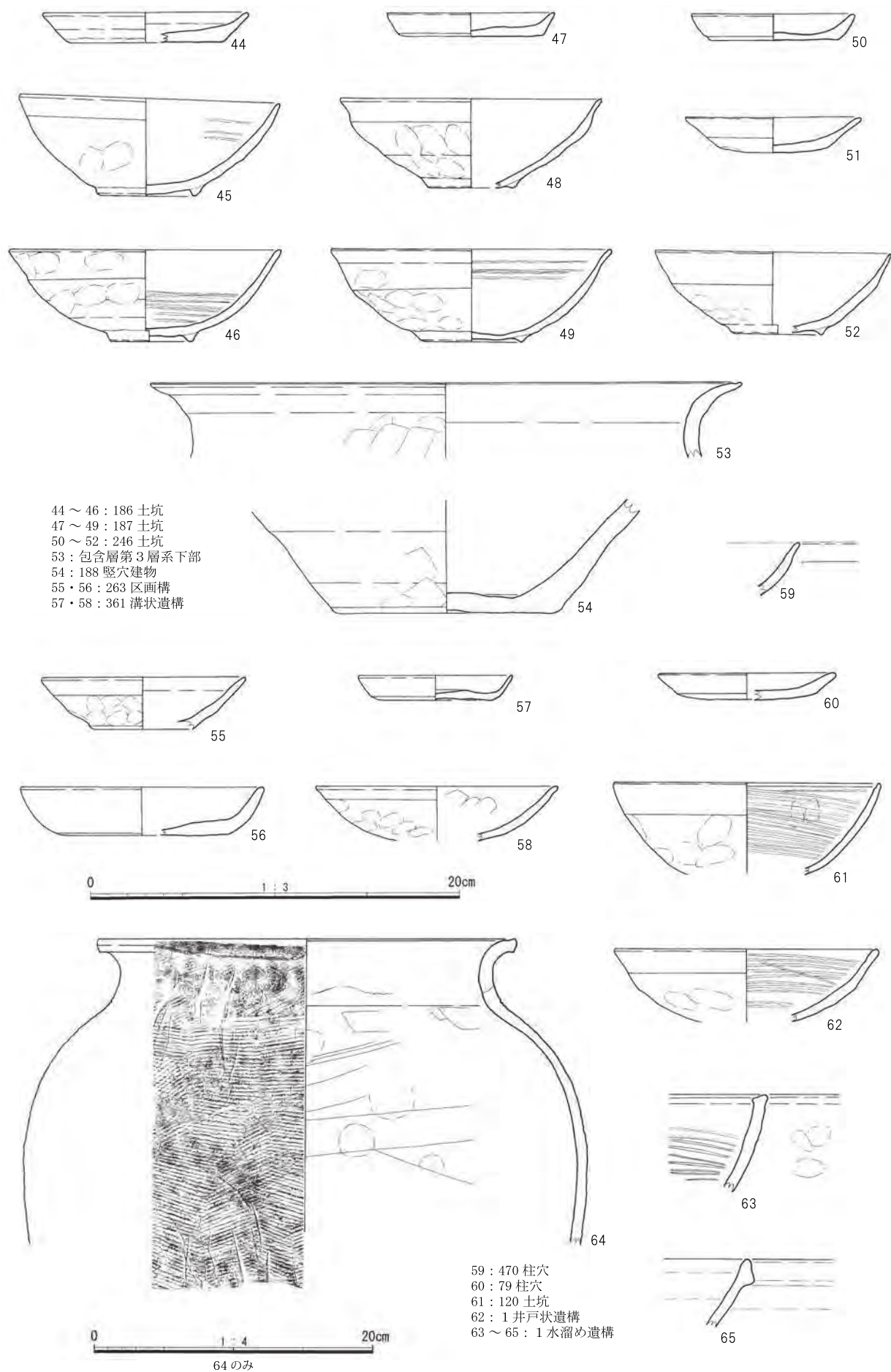


図 29 出土遺物実測図 4 (各遺構出土遺物 4)

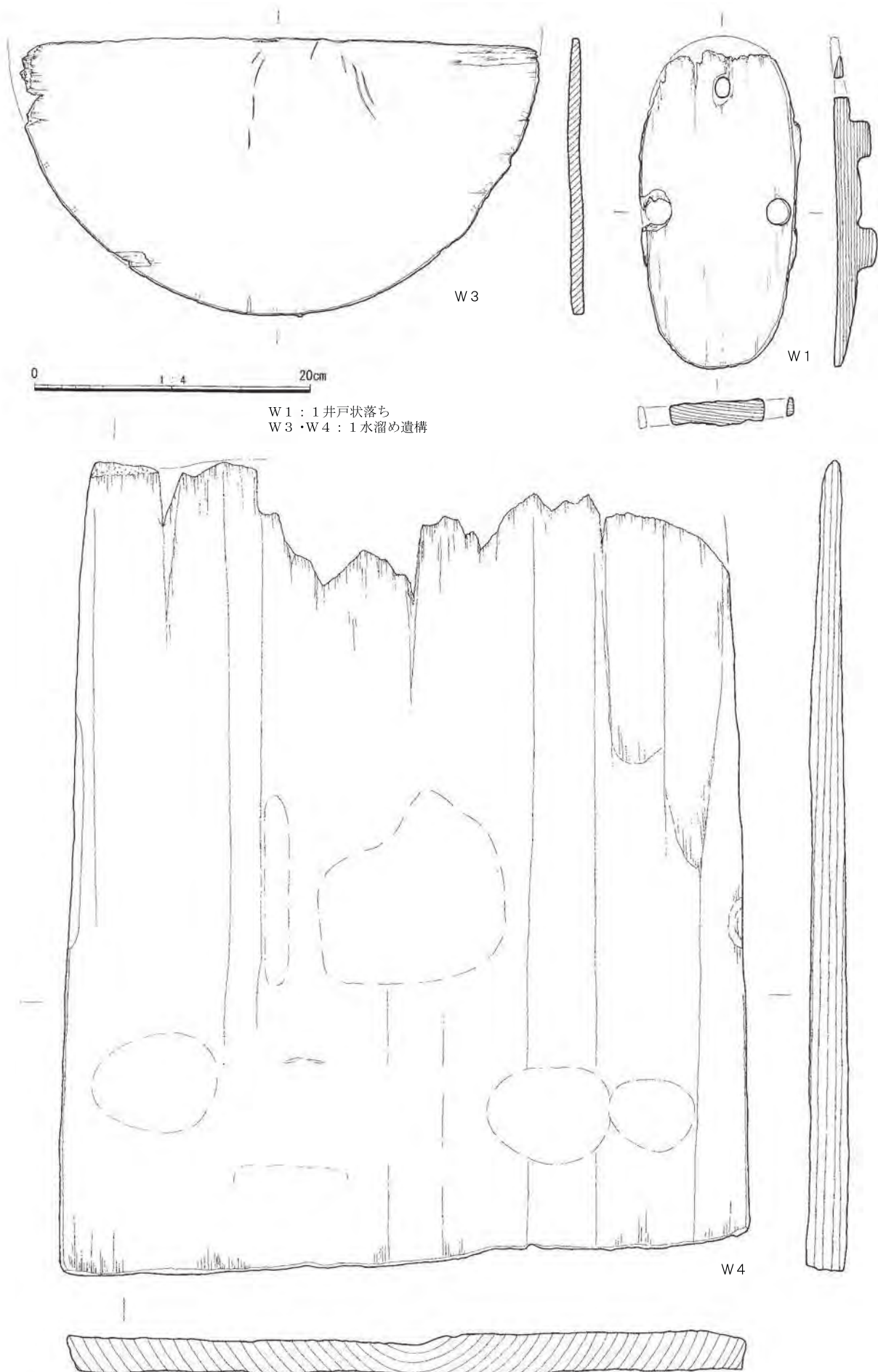


図 30 出土遺物実測図 5 (各遺構出土遺物 5 木製品)

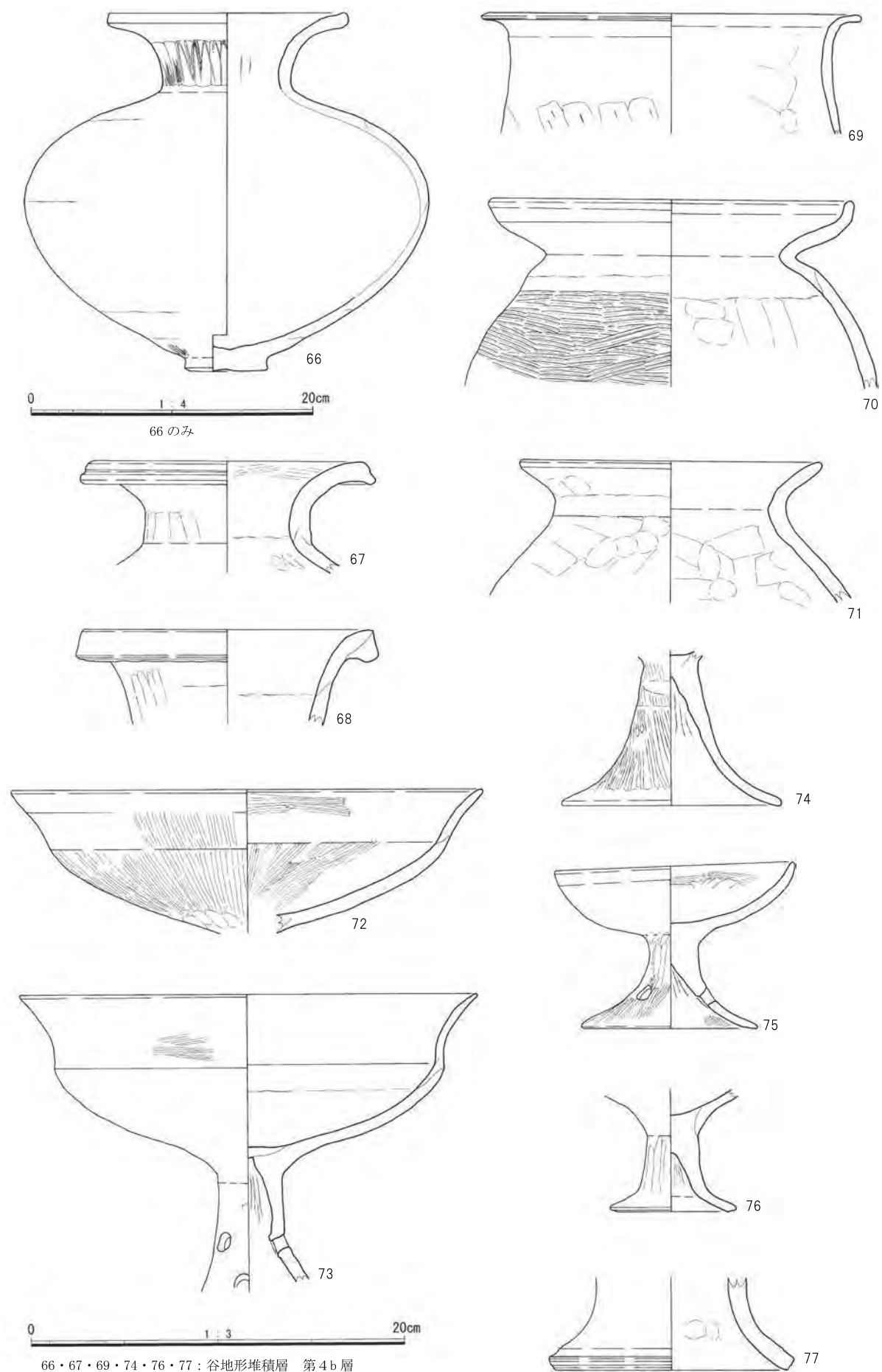


図 31 出土遺物実測図 6（谷地形堆積層出土遺物 1）

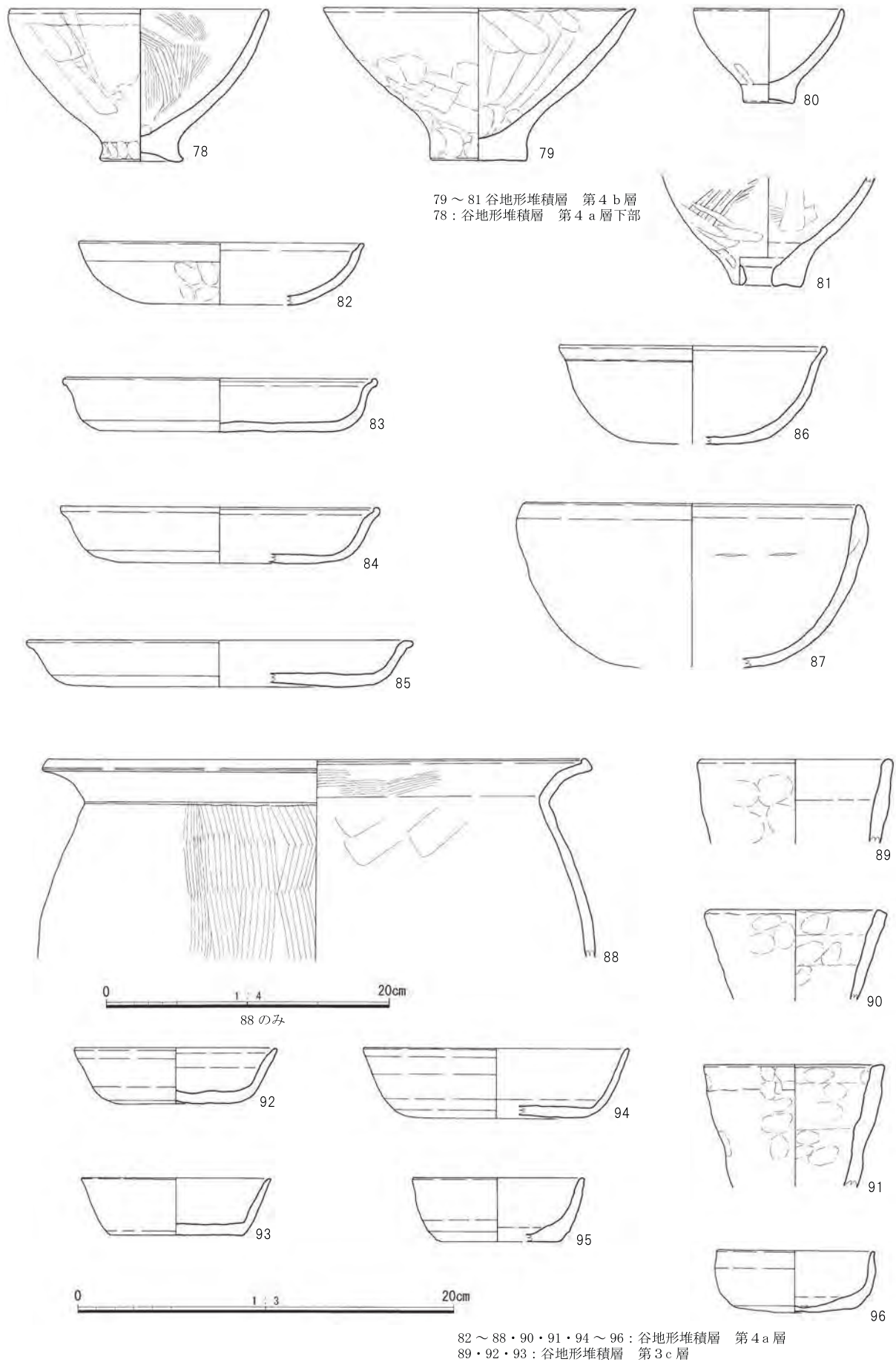


図 32 出土遺物実測図 7（谷地形堆積層出土遺物 2）

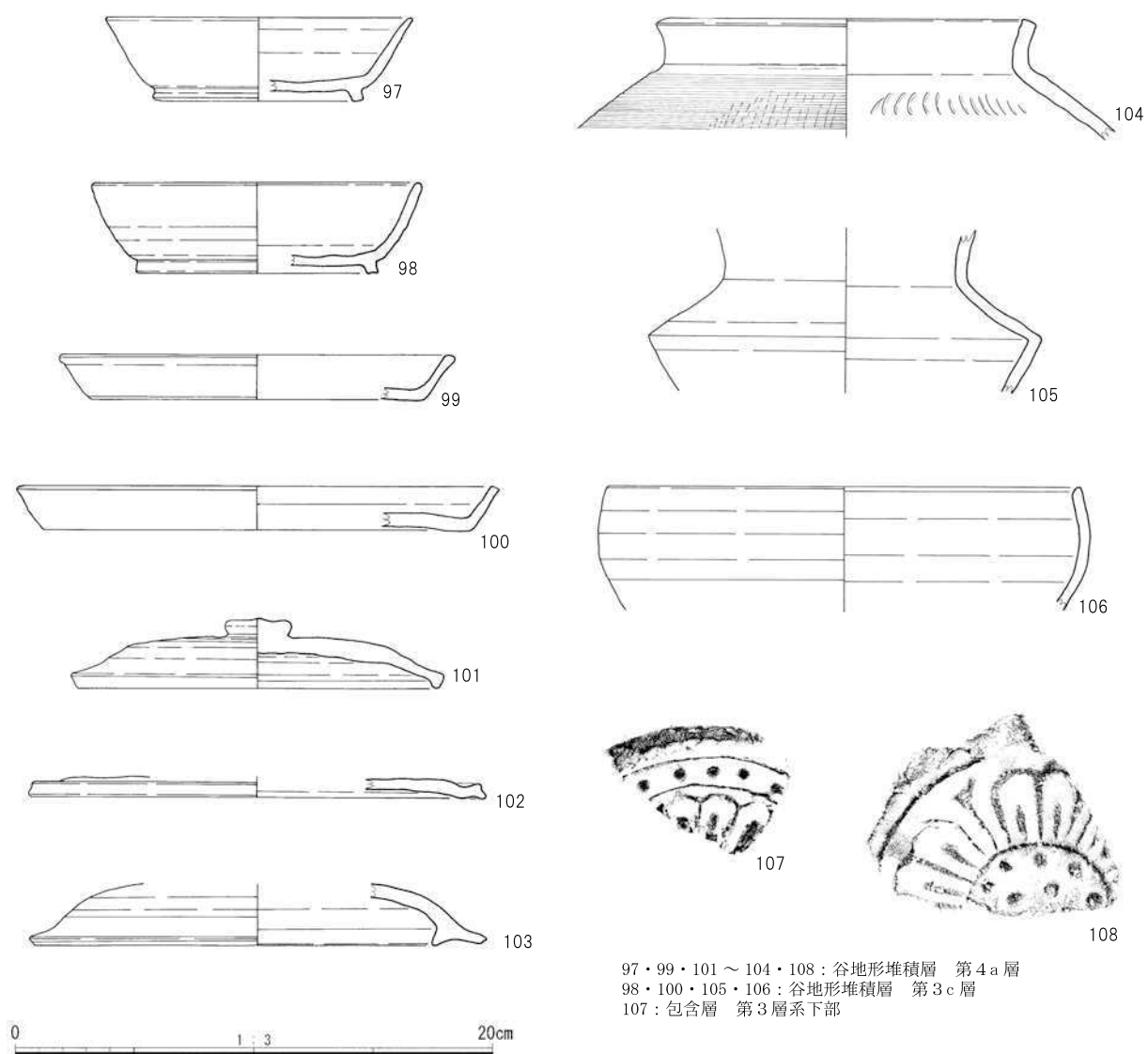


図33 出土遺物実測図8（谷地形堆積層出土遺物3）

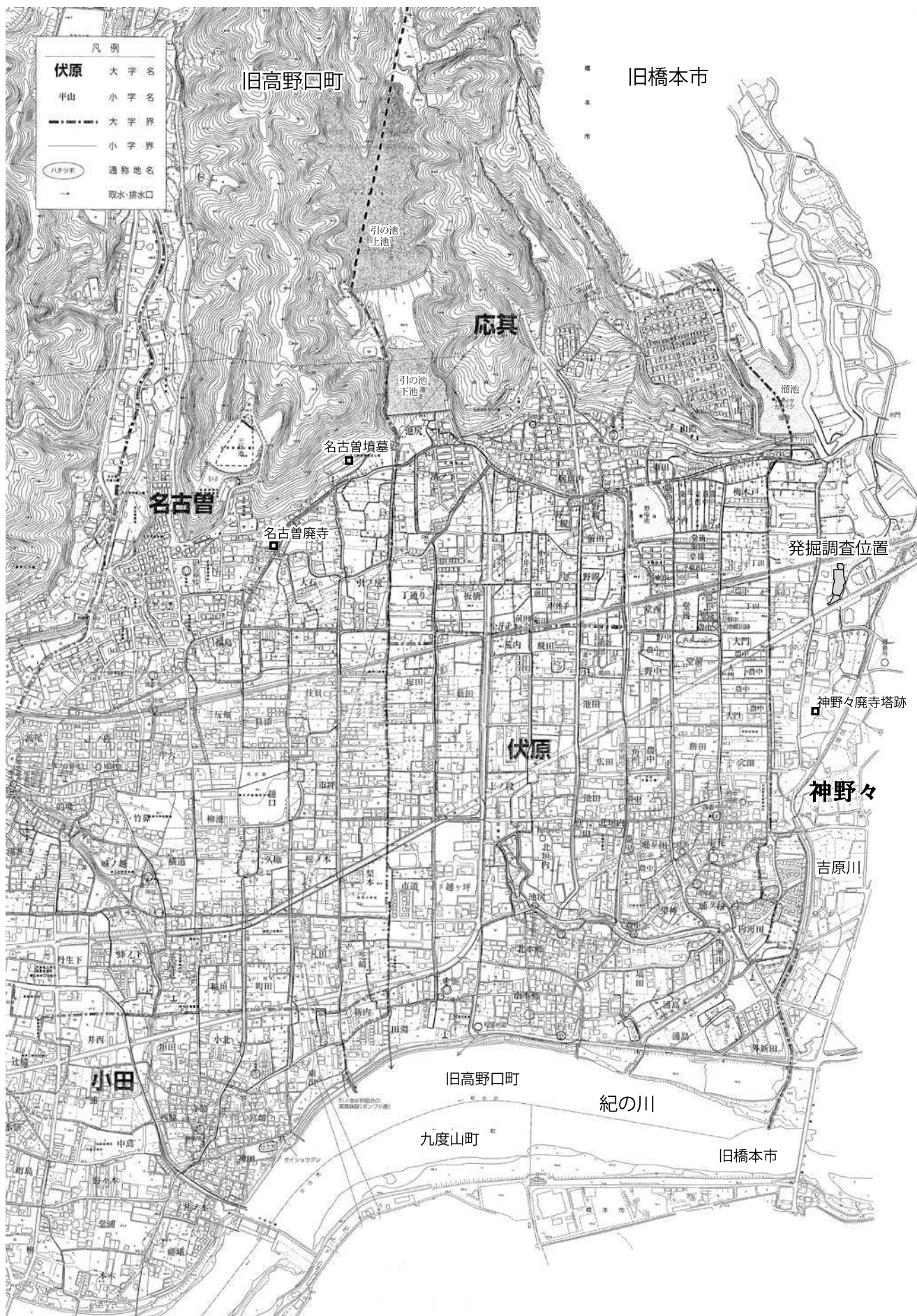


図34 応其条里と発掘調査位置 1 (約1:12000)
 (「官省符荘(上方)現況図 1」2003年作成地図に加筆)

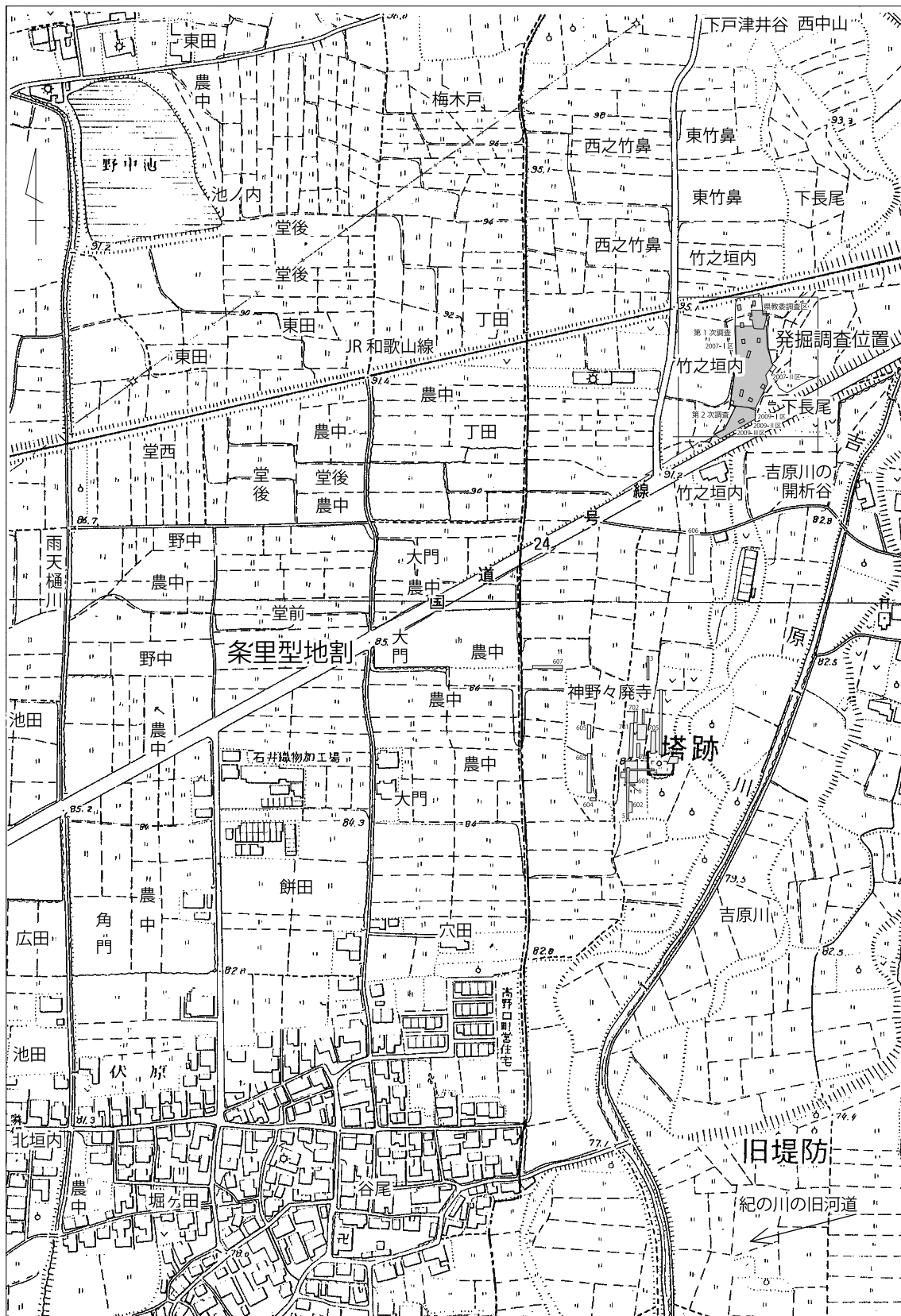


図 35 応其条里と発掘調査位置 2 (約 1:4300)
(1977 年作成地図面に加筆)

出土遺物一覧

凡例

・出土遺物登録番号の付け方

出土遺物登録番号は、遺構種類や区画に関係なく、掘削に伴って順次現場で取り上げ、遺物カードを入れている。2007－Ⅰ区・Ⅱ区は1番～、2009－Ⅰ区～Ⅲ区は1番～から登録番号を付した。また、出土遺物登録台帳をパソコンでExcel2007 ファイルデータに入力して、層序要素毎の遺物点数の集計作業に利用した。この元データは、調査報告書完成後に遺物コンテナ収納台帳と共に和歌山県教育委員会に提出した。

・出土遺物への一般的な注記方法

出土遺物には、ポスターカラー（白絵の具）もしくは墨（黒絵の具も有り）で、調査時の調査コード（07－12・055）若しくは（09－12・055）＋出土遺物登録番号を二段書きで注記した。その後、ラッカー薄め液で適度に希釈した速乾性ニスを塗布した。

・実測遺物登録番号の付け方

膨大な量の遺物の中から必要に応じて任意的に抽出した遺物に対して、最終的に実測図を作成したり、遺物写真を撮影した遺物に対して、実測遺物登録番号の付与（遺物に橙色の●タックシール、若しくは黄色の●タックシールに番号を記して貼り付けた）と同時に、実測遺物登録台帳を作成し必要な事項を記載した。これもパソコンでExcel 2007 ファイルデータに入力して、後の「出土遺物一覧」として当項目に掲載した。

なお、写真のみの掲載になった遺物には「登録のみ」として登録し、白色の●タックシールに番号を記して貼り付けた。（「タックシール」の正式名称は、コクヨ「タックタイトル」タ-70-41 N ラベル 寸法 φ8mm）

・報告書掲載遺物のコンテナ収納に当っては、挿図の遺物番号を白色の○タックシールに番号を記して貼り付けた。収納は、ビニール袋（若しくは、チャック付ポリ袋）に梱包すると同時に、挿図番号の「図〇〇－〇〇〇」若しくは写真図版番号の「写真図版〇〇－〇〇〇（写真のみ）」と記載したラベルを添えている。報告書掲載遺物は、凡そ挿図番号順に遺物収納コンテナに収納した。これらは、和歌山県教育委員会に提出した「遺物収納コンテナ台帳」の登録やコンテナの側に貼り付けたコンテナラベルに記載している。

・「出土遺物一覧」では、遺物の法量・胎土などの観察項目の記載は極力省いた。当然、遺物実測図の原図記載に当たっては、記録として全て観察記録している。なお、瓦器のミガキ・暗文幅の記載に当たっては単位を「cm」で統一した。

・最小限必要なものについて「出土遺物一覧」表中の法量・重量の記載で、（ ）付は残存値を表している。

2007神野々Ⅰ遺跡 出土遺物一覧 Ⅰ・Ⅱ区

No. 1

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
1	図26	図版13	2	491	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	251土坑 埋土一括	弥生土器	短頸壺	口縁部～頸部	口縁部 約25%	NSセクションより西側 弥生中期Ⅱ-1様式、紀の川下流域産
2	図26	図版13	8	377	Ⅱ区D段 H4-j11	——	271土坑 埋土一括	弥生土器	甕	口縁部～頸部	不明	弥生中期Ⅱ-1様式、紀の川下流域産（紀伊形 甕）、断面のみ
3	図26	図版13	10	312	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物 B区下層一括	弥生土器	甕	底部	底部 約30%	弥生中期、外面粗いハケ調整、大和南西部
4	図26	図版13	15	94	Ⅱ区A段 H4-j16	——	試掘1グリッド 埋土一括	石器	敲石	——	100%	弥生時代中期か？、礫岩、長さ18.0cm・幅8.9cm・厚 み6.9cm、重量1615g
5	図26	図版13	17	392	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物 B区最下層一括	弥生土器	壺	口縁部～頸部	口縁部 100%	庄内式併行期 （弥生終末期）
6	図26	図版13	19	324	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物 B区下層下部一括	弥生土器	壺	口縁部～頸部	口縁部 約10%	弥生後期
7	図26	図版13	18	496	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物 B区床面直上	弥生土器	鉢	口縁部～底部	約60%	庄内式併行期 （弥生終末期）
10	図26	図版13	71	368	Ⅱ区D段 H4-l13	——	318土坑 埋土一括	弥生土器	高坏	坏部 （口縁部～血部）	約60%	弥生後期
11	図26	図版13	70	368	Ⅱ区D段 H4-l13	——	318土坑 埋土一括	弥生土器	高坏	脚台部 （基部～裾部）	裾部 約90%	弥生後期、反転復元
12	図26	図版14	28	479	Ⅱ区F段 H4-l07	——	188竪穴建物	土師器	坏	口縁部～底部	45%	奈良、反転復元
13	図26	図版14	27	492	Ⅱ区F段 H4-k7	——	188竪穴建物 A区壁溝	土師器	坏	口縁部～底部	50%	奈良
14	図26	図版14	30	387	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	188竪穴建物 B区埋土一括	土師器	杯	口縁部～底部	約40%	263溝より西側 奈良、反転復元
15	図26	図版14	36	385	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	188竪穴建物 B区埋土一括	土師器	甕	口縁部～頸部	口縁部 約30%	奈良、反転復元、登録394（Ⅱ区F段 188竪穴建物 D区埋土一括）と接合
16	図26	図版14	24	477	Ⅱ区F段 H4-l07	——	188竪穴建物 図の②	土師器	甕	口縁部～体部	約20%	奈良
17	図26	図版14	37	386	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	188竪穴建物 D区埋土一括	土師器	甕	口縁部～頸部	不明	奈良、断面のみ実測、登録385（Ⅱ区F段 H4-k-07 188竪穴建物 B区埋土一括）と接合
18	図26	図版14	33	394	Ⅱ区F段	——	188竪穴建物 D区埋土一括	須恵器	坏A	口縁部～体部	10%	263南北区画溝含む 奈良、反転復元
19	図26	図版14	29	478	Ⅱ区F段 H4-l07	——	188竪穴建物	須恵器	坏蓋	摘み部(天井部) ～口縁部	約55%	奈良、反転復元
20	図26	図版14	34	387	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	188竪穴建物 B区埋土一括	須恵器	蓋	天井部～口縁部	10%	263溝より西側 奈良、反転復元
21	図26	図版14	35	386	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	188竪穴建物 D区埋土一括	須恵器	蓋	摘み部～天井部	摘み部 100%	奈良、反転復元
22	図27	図版14	23	494	Ⅱ区F段 H4-k7-8	——	188竪穴建物内 柱穴5	瓦	丸瓦	丸瓦部	不明	奈良
23	図27	図版14	31	363	Ⅱ区F段	——	188竪穴建物 A区埋土一括	瓦器	椀	口縁部～底部 （高台部）	約25%	重複遺構263区画溝、鎌倉、反転復元
24	図27	図版14	32	363	Ⅱ区F段	——	188竪穴建物 A区埋土一括	瓦器	椀	口縁部～底部 （高台部）	約30%	重複遺構263区画溝、鎌倉、反転復元
26	図27	図版15	46	499	Ⅱ区F段 H4-k7	——	251土坑 東側基底部	土師器	埴	口縁部～体部	口縁部 約20%	奈良、反転復元
27	図27	図版15	42	491	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	251土坑 埋土一括	土師器	甕	口縁部～頸部	約10%	NSセクションより西側 奈良、反転復元
28	図27	図版15	43	491	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	251土坑 埋土一括	土師器	甕	口縁部～頸部	約15%	NSセクションより西側 奈良、反転復元
29	図27	図版15	41	490	Ⅱ区F段 H4-k-17	——	251土坑 埋土一括	土師器	甕or鉢	体部～底部	約70%	NSセクションより西側 奈良、底部二次焼成
30	図27	図版15	44	490	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	251土坑 埋土一括	土師器	高坏	坏体部～脚裾部	脚裾部 約40%	NSセクションより東側 奈良、一部反転復元
31	図27	図版15	49	491	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	251土坑 埋土一括	須恵器	坏A	口縁部～体部	約15%	NSセクションより西側 奈良、反転復元
32	図27	図版15	47	491	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	251土坑 埋土一括	須恵器	壺	底部 （高台部）	高台部 約80%	NSセクより西側 奈良、一部反転復元
33	図27	図版15	48	491	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	251土坑 埋土一括	須恵器	坏A	口縁部～体部	約15%	NSセクションより西側 奈良、反転復元
34	図27	図版15	76	473	Ⅱ区D段 H4-j13	——	362土坑基 上部第4層系	須恵器	坏B	口縁部～底部 （高台部）	約95%	NW-SEセクション内 奈良
35	図28	図版15	51	534	Ⅱ区F段 H4-n10	——	446柱穴 掘形埋土	土師器	坏	口縁部～体部	約10%	西半一括 奈良、反転復元
36	図28	図版15	72	370	Ⅱ区D段 H4-jk13	——	341土坑 埋土一括	土師器	製塩土器	口縁部～体部	約20%	奈良、反転復元
37	図28	図版15	50	378	Ⅱ区F段 H4-l07	——	261柱穴 埋土一括	土師器	製塩土器	底部	不明	南半一括 奈良、反転復元
38	図28	図版15	80	355	Ⅱ区C段 H4-l15	——	160土坑 埋土一括	土師器	坏	口縁部～底部	約10%	セクションより北側、登録360（Ⅱ区C段 H4-l- m15-16 160落ち 埋土一括）と接合、奈良、反転 復元
39	図28	図版15	81	356	Ⅱ区C段 H4-l-m15	——	160土坑 埋土一括	土師器	甕	口縁部～体部	約15%	セクションより南側 奈良、反転復元
40	図28	図版15	79	342	Ⅱ区C段 H4-n-o8	——	28土坑 埋土一括	須恵器	坏A	口縁部～底部	約25%	奈良、反転復元
41	図28	図版15	78	342	Ⅱ区C段 H4-n-o18	——	28土坑 埋土一括	土師器	甕	口縁部～体部	口縁部 約25%	奈良
42	図28	図版15	52	379	Ⅱ区F段 H4-l07	——	252土坑 埋土一括	須恵器	太頸壺	口縁部～頸部	口縁部 約10%	西半一括 奈良、反転復元
43	図28	図版15	77	397	Ⅱ区D段 H4-jk12	——	300土坑	須恵器	甕	体部	体部 約50%	奈良、大小40片、最小1.5×6.0cm、最大14.0× 18.5cm
44	図29	図版16	53	327	Ⅱ区F段 H4-k6-7	——	186土坑 埋土一括	土師器	小皿	口縁部～底部	約15%	東半一括 鎌倉、反転復元
45	図29	図版16	55	306	Ⅱ区F段 H4-k6-7	——	186土坑 埋土一括	瓦器	椀	口縁部～底部 （高台部）	約45%	鎌倉

2007神野々Ⅰ遺跡 出土遺物一覧 Ⅰ・Ⅱ区

No. 2

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
46	図29	図版16	54	327	Ⅱ区F段 H4-k6-7	——	186土坑 埋土一括	瓦器	椀	口縁部～底部 (高台部)	約40%	東半一括 鎌倉
47	図29	図版16	56	315	Ⅱ区F段 H4-k6	——	187土坑 埋土一括	土師器	小皿	口縁部～底部	約50%	西半一括 鎌倉、反転復元
48	図29	図版16	57	315	Ⅱ区F段 H4-k6	——	187土坑 埋土一括	瓦器	椀	口縁部～底部 (高台部)	約30%	西半一括 鎌倉、反転復元
49	図29	図版16	58	328	Ⅱ区F段 H4-k6	——	187土坑 埋土一括	瓦器	椀	口縁部～底部 (高台部)	約70%	東半一括 鎌倉
50	図29	図版16	60	317	Ⅱ区F段 H4-k8	包第3層系掘削 時有り	246土坑 埋土一括	土師器	小皿	口縁部～底部	約65%	遺構検出時 鎌倉
51	図29	図版16	61	317	Ⅱ区F段 H4-k8	——	246土坑 埋土一括	瓦器	小皿	口縁部～底部	約80%	南半一括 鎌倉、反転復元
52	図29	図版16	62	487	Ⅱ区F段 H4-k8	——	246土坑 埋土一括	瓦器	椀	口縁部～底部 (高台部)	約30%	EWセクション 鎌倉、反転復元
53	図29	図版16	68	232	Ⅱ区F段 H4-k7	包第3層系 下部一括	——	無釉陶器 常滑	甕	口縁部～頸部	口縁部 約15%	鎌倉、反転復元、他破片有り
54	図29	図版16	69	386	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	188竪穴建物 D区埋土一括	無釉陶器 常滑	甕	体部～底部	不明	鎌倉、反転復元、他破片有り、登録394(Ⅱ区F段 188竪穴建物 D区埋土一括)・登録396(Ⅱ区F段 263南北区画溝 埋土下層)と接合
55	図29	図版16	67	333	Ⅱ区F段 H4-08	ベース直上	263区画溝 埋土一括	土師器	坏	口縁部～体部	約20%	南セクションより南側 奈良or平安、反転復元
56	図29	図版16	66	333	Ⅱ区F段 H4-08	ベース直上	263区画溝 埋土一括	土師器	皿	口縁部～底部	約25%	南セクションより南側 鎌倉、反転復元
57	図29	図版16	73	365	Ⅱ区D段 H4-0-m13	——	361溝状遺構 埋土一括	土師器	小皿	口縁部～底部	約40%	NSセクションより東側 鎌倉、反転復元
58	図29	図版16	74	366	Ⅱ区D段 H4-0-m13	——	361溝状遺構 埋土一括	瓦器	椀	口縁部～体部	約15%	NSセクションより西側 鎌倉
59	図29	図版16	63	515	Ⅱ区F段 H4-n10	——	470柱穴 埋土一括	瓦器	椀	口縁部～体部	口縁部 約10%	東半 鎌倉、断面のみ
60	図29	図版16	91	197	Ⅱ区C段 H4-m19	C段第4b層下面 ベース直上	79柱穴	土師器	小皿	口縁部～底部	約25%	南半一括 鎌倉、反転復元
61	図29	図版16	92	344	Ⅱ区C段 H4-m18・ 19	——	120土坑 埋土一括	瓦器	椀	口縁部～体部	約30%	鎌倉、反転復元
62	図29	図版16	96	69	Ⅱ区A段 H4-j19	C段第4b層下面	包落ち (1井戸状)	瓦器	椀	口縁部～体部	約10%	鎌倉、反転復元
63	図29	図版16	94	126	Ⅱ区A段 H4-k18	第3c層面から 切り込みあり	1遺構	瓦器	鉢	口縁部～体部	不明	鎌倉、断面のみ、登録259(Ⅱ区A段 H4-k18西半 1遺構 図の5)と接合
64	図29	図版16	177	239	Ⅱ区A段 H4-k18 西半	——	1トイレ状遺構 石組内	東播系須恵 質	甕	口縁部～体部	約40%	粗砂細礫層は第3c層系か？ 鎌倉、登録117(Ⅱ区A段 H4-k18 第4a層下部一括 包落ち)・登録124(Ⅱ区A段 H4-k17西半 第4a層上部一括 下部含む 包落ち)・登録125 (Ⅱ区A段 H4-k18 第4a層上部一括 第3層系 含む 包落ち)・登録227(Ⅱ区F段 H4-j7 包第 3層系下部一括)と接合
65	図29	図版16	95	253	Ⅱ区A段 H4-k18	——	1遺構 図4の上部	東播系須恵質	捏鉢	口縁部～体部	口縁部 約10%	鎌倉、断面のみ
66	図31	図版18	132	147	Ⅱ区A段 H4-j16	第4b層一括	谷地形包落ち	弥生土器	広口壺	口縁部～底部	約40%	NW-SEセクションより北東側 弥生後期
67	図31	図版18	135	175	Ⅱ区A段 H4-k17 中央	第4b層	谷地形包落ち	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	口縁部 約25%	弥生後期
68	図31	図版18	136	174	Ⅱ区A段 H4-k17 南西半	第4b層 上部一括(下部)	谷地形包落ち	弥生土器	広口壺	口縁部	口縁部 約30%	弥生後期
69	図31	図版18	138	178	Ⅱ区A段 H4-j16	第4b層一括	谷地形包落ち	弥生土器	甕	口縁部	口縁部 約25%	ベース直上、弥生中期、大和南西部、四分形甕(胎 土に片岩を含ませ、S・Mサイズの雲母を多量含む)
70	図31	図版19	163	166	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部	谷地形包落ち	弥生土器	甕	口縁部～体部	口縁部 約75%	弥生後期
71	図31	図版19	159	169	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部	谷地形包落ち	弥生土器	甕	口縁部～肩部	約15%	弥生後期
72	図31	図版19	164	168	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	坏部	約55%	弥生後期 登録128(Ⅱ区A段 H4-k17西半 第4a層下部一括 一部上部含む 包落ち)・登録132(Ⅱ区A段 H4- k17西半 第4b層上部一括 包落ち)・登録160(Ⅱ 区A段 H4-k17西半 第4a層下部 包落ち)と接 合
73	図31	図版19	165	160	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	坏部～脚台部	約65%	弥生後期
74	図31	図版18	143	175	Ⅱ区 A段 H4-k17 中央	第4b層	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	脚台部	約55%	弥生後期、外面は原体2本結束の粗いハケ調整
75	図31	図版19	169	129	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部一括	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	口縁部～裾部	約55%	弥生後期
76	図31	図版18	144	147	Ⅱ区A段 H4-j16	第4b層一括	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	脚台部	約40%	NW-SEセクションより北東側 弥生後期
77	図31	図版18	134	175	Ⅱ区A段 H4-k17 中央	第4b層	谷地形包落ち	弥生土器	器台	裾部	裾部 約25%	弥生後期
78	図32	図版19	166	167	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部	谷地形包落ち	弥生土器	鉢	口縁部～底部	約95%	弥生後期、外面に黒斑有り
79	図32	図版18	145	174	Ⅱ区A段 H4-k17 南西半	第4b層 上部一括(下部)	谷地形包落ち	弥生土器	鉢	口縁部～底部	約50%	弥生後期

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
80	図32	図版18	147	175	Ⅱ区A段 H4-k17 中央	第4b層	谷地形包落ち	弥生土器	小型鉢	口縁部～底部	約70%	登録176(Ⅱ区A段 H4-k17 北西半 包落ち 第4a層 +粗砂小縁層)と接合
81	図32	図版18	148	146	Ⅱ区A段 H4-j15・16 北端	第4b層一括	谷地形包落ち	弥生土器	甌	底部	底部100%	須恵器類は、B段 H4-k15 法面第4a層 弥生後期
82	図32	図版21	201	104	Ⅱ区A段 H4-o20	第4a層一括 黒褐色シルト	谷地形包落ち	土師器	坏C	口縁部～底部	約15%	体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる、口縁部端面が内傾する、体部外面に連続したユビオサエ、口縁反転復元
83	図32	図版21	200	122	Ⅱ区A段 H4-j16	第4a層一括	谷地形包落ち	土師器	坏A	口縁部～底部	約35%	口縁端部は内側に軽く巻き込む手法、沈線様の巻き込みは狭く丁寧な作り、口縁部は未接合破片を合成して図化
84	図32	図版21	199	122	Ⅱ区A段 H4-j16	第4a層一括	谷地形包落ち	土師器	坏A	口縁部～底部	約25%	口縁端部は内側に軽く巻き込む手法、反転復元、見込から口縁部にかけて放射状暗文、底部剥離、磨滅著しい
85	図32	図版21	203	104	Ⅱ区A段 H4-o20	第4a層一括 黒褐色シルト	谷地形包落ち	土師器	皿A	口縁部～底部	約15%	平坦な底部から口縁部は外反して立ち上がる、口縁端部は外反する、外面磨滅ぎみのため調整不明瞭
86	図32	図版21	202	148	Ⅱ区A段 H4-k16 東半	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	土師器	鉢B	口縁部～底部	約20%	第4層一括扱い 体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる、口縁端部は内側に軽く巻き込む手法、磨滅著しいため調整不明瞭、反転復元
87	図32	図版21	204	148	Ⅱ区A段 H4-k16 東半	第4b層一括 (第4a層混)	谷地形包落ち	土師器	鉢	口縁部～底部	約20%	第4層一括扱い 丸みのある底部から内湾して立ち上がり口縁部は肥厚する、底部外面は軽いヘラズリ様の調整、内面は丁寧なナデにより平滑、反転復元
88	図32	図版21	205	120	Ⅱ区A段 H4-j16西端	第4a層	谷地形包落ち	土師器	甕	口縁部～体部	口縁部約15%	膨らみのある体部から外反する口縁部、口縁端部は上方に揃み上げ肥厚する、体部外面は縦方向の粗いハケ、反転復元
89	図32	図版22	243	103	Ⅱ区A段 H4-k-o19	第3c層一括	谷地形包落ち	土師器	製塩土器	口縁部～体部	不明	極めて歪、内外面共に磨滅のため調整不明瞭、反転復元、図面化すると平安時代後期の砲弾形を呈する
90	図32	図版21	207	104	Ⅱ区A段 H4-o20	第4a層一括 黒褐色シルト	谷地形包落ち	土師器	製塩土器	口縁部～体部	約10%	内外面共に雑なユビオサエ後内面は丁寧なナデ、二次焼成、反転復元
91	図32	図版21	206	104	Ⅱ区A段 H4-o20	第4a層一括 黒褐色シルト	谷地形包落ち	土師器	製塩土器	口縁部～体部	約10%	内外面共に雑なユビオサエ後内面は丁寧なナデ、直線的に外傾して立ち上がり、口縁端部は一部を反転復元
92	図32	図版22	241	139	Ⅱ区B段縁 H4-k15 東半	第4a層一括 (第3c層含む)	谷地形包落ち	須恵器	坏A	口縁部～底部	約25%	見込強いナデにより凹む、底部回転ヘラ切り、断面7.5YR6/6橙色、反転復元、ロクロ回転方向：左回り、MT21・Ⅳ型式1段階
93	図32	図版22	240	114	Ⅱ区B段 H4-o17	第3c層一括	谷地形包落ち	須恵器	坏A	口縁部～底部	約20%	全体に丁寧な回転ナデ、底部回転ヘラ切り、反転復元、ロクロ回転方向：左回り、MT21・Ⅳ型式1段階
94	図32	図版21	217	104	Ⅱ区A段 H4-o20	第4a層一括 黒褐色シルト	谷地形包落ち	須恵器	坏A	口縁部～底部	約40%	底部回転ヘラズリ後ナデ、反転復元、体部～底部外面にヒダスキ状の痕跡、ロクロ回転方向：左回り、MT21・Ⅳ型式1段階
95	図32	図版21	219	148	Ⅱ区A段 H4-k16 東半	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	須恵器	碗A	口縁部～底部	約30%	第4層一括扱い 体部下端回転ヘラズリ、底部回転ヘラズリ後ナデ、反転復元、ロクロ回転方向：左回り、TK46?、Ⅲ型式2段階
96	図32	図版21	218	148	Ⅱ区A段 H4-k16 東半	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	須恵器	碗A	口縁部～底部	約25%	第4層一括扱い 体部下端回転ヘラズリ、反転復元、底部回転ヘラズリ後ナデ、ロクロ回転方向：左回り、TK46?、Ⅲ型式2段階
97	図33	図版21	220	111	Ⅱ区A段 H4-k-o19	第4a層一括	谷地形包落ち	須恵器	坏B	口縁部～底部 (高台部)	約40%	底部回転ヘラズリ後ナデ、反転復元、ロクロ回転方向：左回り、TK48～MT21、Ⅳ型式1段階
98	図33	図版22	244	103	Ⅱ区A段 H4-k-o19	第3c層一括	谷地形包落ち	須恵器	坏B	口縁部～底部 (高台部)	約30%	全体的に丁寧な回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、反転復元、ロクロ回転方向：左回り、MT21・Ⅳ型式1段階
99	図33	図版21	221	104	Ⅱ区A段 H4-o20	第4a層一括 黒褐色シルト	谷地形包落ち	須恵器	皿C	口縁部～底部	口縁部約10%	底部軽いヘラズリ後ナデ、反転復元、ロクロ回転方向：左回り、Ⅳ型式1段階
100	図33	図版22	245	103	Ⅱ区A段 H4-k-o19	第3c層一括	谷地形包落ち	須恵器	皿C	口縁部～底部	約15%	底部軽いヘラズリ後ナデ、全体に丁寧な回転ナデ、反転復元、ロクロ回転方向：右回り、Ⅳ型式1段階、ヒダスキ状
101	図33	図版21	224	149	Ⅱ区B段 H4-k15・16 北半	第4a層～ 第4c層一括	谷地形包落ち	須恵器	蓋	摘み部～口縁部	約70%	第4層扱い 天井部外面回転ヘラズリ、外面全体に自然釉薄く付着する、反転復元、ロクロ回転方向：左回り、MT21・Ⅳ型式1段階
102	図33	図版21	223	111	Ⅱ区A段 H4-k-o19	第4a層一括	谷地形包落ち	須恵器	蓋	天井部～口縁部	約10%	焼成やや軟質、磨滅ぎみ、反転復元、ロクロ回転方向：左回り、Ⅳ型式3段階
103	図33	図版21	222	124	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層上部一括 下部含む	谷地形包落ち	須恵器	蓋	天井部～口縁部	約10%	体部外面雑な回転ヘラズリ、反転復元、ロクロ回転方向：右回り、TK217・Ⅲ型式1段階
104	図33	図版21	208	144	Ⅱ区A段 H4-j16	第4a層一括	谷地形包落ち	須恵器	短頸壺	口縁部～体部	口縁部約10%	内湾する肩部からやや外反する短い口縁部が付く、肩部外面はカキメ、内面は青海波+軽いナデ、反転復元
105	図33	図版22	239	109	Ⅱ区A段 H4-k-o19	第3c層一括 第4a層含む	谷地形包落ち	須恵器	壺	頸部～体部	約20%	全体に丁寧な回転ナデ、外面全体に自然釉極めて薄く付着、反転復元、ロクロ回転方向：右回り
106	図33	図版22	238	139	Ⅱ区B段縁 H4-k15 東半	第4a層一括 (第3c層含む)	谷地形包落ち	須恵器	鉢A	口縁部～体部	口縁部約15%	全体に丁寧な回転ナデ、体部外面下半軽い回転ヘラズリ、反転復元、ロクロ回転方向：右回り
107	図33	図版17	112	246	Ⅱ区F段 H4-k7西半	包第3層系 下部一括	——	瓦	軒丸瓦	瓦当部	約15%	奈良、複弁蓮華文、瓦当拓本
108	図33	図版22	230	67	Ⅱ区A段 H4-k20 北半	第4層一括	谷地形包落ち	瓦	軒丸瓦	瓦当部	約15%	調査区東壁側溝 奈良、複弁蓮華文、拓本
111	—	図版13	1	181	Ⅱ区C段 H4-m17	第4b層下面	122柱穴 ベース直上	縄文土器	不明	体部	不明	縄文中期～後期、地元産
112	—	図版13	3	188	Ⅱ区C段 H4-o17	第4b層下面	63柱穴	弥生土器	壺	頸部	不明	弥生中期、河内(生駒山西麓産)
113	—	図版13	4	310	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物 B区中層一括	弥生土器	壺	頸部	不明	弥生中期、河内(生駒山西麓産)
114	—	図版13	5	310	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物 B区中層一括	弥生土器	壺	頸部	不明	弥生中期、河内(生駒山西麓産)

2007神野々Ⅰ遺跡 出土遺物一覧 Ⅰ・Ⅱ区

No. 4

遺物 番号	挿図 番号	写真 図版	実測遺物 登録番号	出土遺物 登録番号	地区 取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
115	—	図版13	6	346	Ⅱ区C段 H4—o17・ 18	——	42土坑 埋土一括	弥生土器	壺	体部	不明	弥生中期、河内（生駒山西麓産）
116	—	図版13	7	279	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物 B区上層一括	弥生土器	甕	口縁部	約5%	弥生中期、紀の川下流域産（紀伊形甕）
117	—	図版13	9	388	Ⅱ区F段 H4—k6	——	257柱穴 埋土一括	弥生土器	甕	底部	約40%	弥生中期、紀の川下流域産（紀伊形甕）
118	—	図版13	11	279	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物 B区下層一括	石器	石錐	——	100%	弥生中期、サヌカイト、長さ5.3cm・幅1.9cm・厚み0.7cm、重量7g
119	—	図版13	12	135	Ⅱ区 A・B段	第4a層一括 第3c層含む	谷地形包落ち	石器	搔器	——	100%	弥生中期、サヌカイト、長さ4.6cm・幅1.8cm・厚み0.6cm、重量7g
120	—	図版13	13	495	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物 C区南端サンプル ⑥⑦の下	石器	搔器	——	100%	弥生中期、サヌカイト、長さ3.6cm・幅2.2cm・厚み0.6cm、重量6g
121	—	図版13	14	406	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物	石器	楔形石器	——	100%	EWセクション東側一括 弥生中期、サヌカイト、長さ4.2cm・幅3.5cm・厚み0.9cm、重量17g
122	—	図版13	16	102	Ⅱ区A段 H4—k18	第3c層一括 灰黄褐色粗砂礫	谷地形包落ち	石器	石棒or 磨石（棒）	——	約30%	弥生時代中期か？、縁泥片岩、片先端に使用痕が認められる、縦位に破砕、長さ14.6cm・幅2.5cm・厚み1.9cm、重量92g
123	—	図版13	20	285	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物 B区中層一括	弥生土器	甕	体部	不明	弥生後期、大和南西部
124	—	図版13	21	285	Ⅱ区F段	——	173竪穴建物 B区中層一括	弥生土器	器台？	口縁部	不明	弥生後期
125	—	図版14	22	498	Ⅱ区F段 H4—k7	——	188竪穴建物内 柱穴1下部	土師器	埴	把手	不明	奈良
126	—	図版14	25	477	Ⅱ区F段 H4—e7	——	188竪穴建物 図の②	土師器	甕	体部	約20%	奈良
127	—	図版14	26	476	Ⅱ区F段 H4—e7	——	188竪穴建物	須恵器	甕	体部	不明	奈良
128	—	図版14	38	305	Ⅱ区F段 H4—k7	堆積層有り	188竪穴建物 C区上層一括	土師器	製塩土器	体部	不明	東側遺物を含む 奈良
129	—	図版14	39	305	Ⅱ区F段 H4—k7	堆積層あり	188竪穴建物 C区上層一括	須恵器	坏蓋	口縁部	不明	東側遺物を含む 奈良
130	—	図版14	40	412	Ⅱ区F段	——	188竪穴建物	土師器	埴	把手	不明	EWセクション東側一括 奈良
131	—	図版15	45	491	Ⅱ区F段 H4—k・e7	——	251土坑 埋土一括	土師器	蛸壺？	体部～底部	不明	NSセクションより西側 奈良
132	—	図版16	59	328	Ⅱ区F段 H4—k6	——	187土坑 埋土一括	瓦器	椀	口縁部～底部 （高台部）	約25%	東半一括 鎌倉
133	—	図版16	64	486	Ⅱ区F段 H4—e9	——	243土坑 埋土一括	瓦器	足釜	脚	不明	EWセクション 鎌倉
134	—	図版16	65	537	Ⅱ区F段 H4—n9	——	495柱穴	石器	台石	——	100%	東半部据え石 弥生時代後期か？
135	—	図版16	75	365	Ⅱ区D段 H4—e・m13	——	361溝状遺構 埋土一括	瓦	丸瓦	玉縁部～丸瓦部	不明	NSセクションより東側 奈良
136	—	図版15	82	185	Ⅱ区C段 H4—n17	C段第4b層下面 ベース直上	58柱穴	土師器	蓋	口縁部	約5%	南半一括 奈良
137	—	図版15	83	205	Ⅱ区C段 H4—n18・ 19	C段第4b層下面 ベース直上	103柱穴	須恵器	壺	頸部～体部	不明	南半一括 奈良
138	—	図版15	84	349	Ⅱ区C段 H4—n16・ 17	——	76柱穴 埋土一括	須恵器	坏A	口縁部～底部	約10%	奈良
139	—	図版15	85	355	Ⅱ区C段 H4—u15	——	160土坑 埋土一括	土師器	蓋	口縁部	約10%	セクションより北側 奈良
140	—	図版15	86	360	Ⅱ区C段 H4—e・ m15・16	——	160落ち 埋土一括	須恵器	皿	口縁部～底部	約5%	EWセクションより南側 奈良
141	—	図版15	87	354	Ⅱ区C段 H4—m15	——	162柱穴 埋土一括	土師器	製塩土器	口縁部～体部	不明	南半一括 奈良
142	—	図版15	88	352	Ⅱ区C段 H4—m15	——	159土坑 埋土上層一括	弥生土器	壺	口縁部	約5%	弥生後期
143	—	図版15	89	347	Ⅱ区C段 H4—n17・ o17・18	——	42土坑 最下層一括	弥生土器	壺	底部	底部 100%	弥生後期
144	—	図版15	90	346	Ⅱ区C段 H4—n17・ o17・18	——	42土坑 最下層一括	弥生土器	高坏	坏部 （椀形）	約10%	弥生後期、登録347（Ⅱ区C段 H4—n17・o17・18 42土坑 最下層一括）と接合
145	—	図版16	93	199	Ⅱ区C段 H4—n19	C段第4b層下面 ベース直上	98柱穴	瓦器	椀	口縁部～底部 （高台部）	約25%	南半一括 鎌倉
146	—	図版16	97	445	Ⅱ区A段 H4—k18 西半	——	1遺構	土師器	小皿	口縁部～底部	約25%	鎌倉
147	—	図版16	98	126	Ⅱ区A段 H4—k18	第3c層面から 切り込みあり	1遺構 1井戸状遺構	瓦器	椀	底部 （高台部）	約20%	鎌倉
148	—	図版13	99	233	Ⅱ区F段 H4—k6	包第3層系 下部一括	——	弥生土器	広口壺	口縁部	口縁部 約10%	弥生中期、産地不明（胎土に垂角礫の長石・石英を 多量含む）
149	—	図版13	100	93	Ⅱ区D段 H4—i13・14	包第3層一括 包第4層一括	攪乱含む	弥生土器	壺	体部	不明	調査区南東壁側溝 弥生中期、河内（生駒山西麓産）
150	—	図版13	101	233	Ⅱ区F段 H4—k6	包第3層系 下部一括	——	弥生土器	甕	口縁部～頸部	不明	弥生中期、大和南西部（四分形甕）Ⅱ—1様式
151	—	図版13	102	246	Ⅱ区F段 H4—k7西半	包第3層系 下部一括	——	弥生土器	甕	底部	底部 45%	弥生中期、外面粗いハケ調整、大和南西部

遺物 番号	挿図 番号	写真 図版	実測遺物 登録番号	出土遺物 登録番号	地区 取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
152	—	図版13	103	86	Ⅱ区F段 H4-j6	包第3層一括 (包第4層一括)	——	弥生土器	甗	底部	底部 100%	調査区東壁側溝 弥生中期、産地不明（胎土に垂角礫の長石・石英を 多量含む）
153	—	図版13	104	89-90	Ⅱ区F段D段 H4-j10	包第4層一括 (包第3層一括)	——	石器	搔器	——	100%	調査区東壁側溝 弥生中期、サヌカイト、長さ7.0cm・幅3.8cm・厚み 0.9cm、重量27g
154	—	図版13	105	236	Ⅱ区F段 H4-u8	包第3層系 下部一括	——	石器	搔器	——	100%	サヌカイト、長さ4.8cm・幅2.0cm・厚み0.8cm、重量 8g
155	—	図版13	106	89-90	Ⅱ区F段D段 H4-j10	包第4層一括 (包第3層一括)	——	石器	磨石 (敲石)	——	100%	調査区東壁側溝 石英斑岩、長さ7.7cm・幅7.0cm・厚み6.8cm、重量 413g
156	—	図版17	107	237	Ⅱ区F段 H4-u7	包第3層系 下部一括	——	土師器	甗	口縁部～頸部	不明	奈良
157	—	図版17	108	232	Ⅱ区F段 H4-k7	包第3層系 下部一括	——	土師器	短頸壺	口縁部～頸部	不明	奈良
158	—	図版17	109	236	Ⅱ区F段 H4-u8	包第3層系 下部一括	——	土師器	製塩土器	口縁部～体部	約10%	奈良
159	—	図版17	110	229	Ⅱ区F段 H4-j6	包第3層系 下部一括	——	土師器	製塩土器	口縁部～体部	約15%	奈良
160	—	図版17	111	233	Ⅱ区F段 H4-k6	包第3層系 下部一括	——	須恵器	坯蓋	天井部～口縁部	約10%	奈良
161	—	図版17	113	234	Ⅱ区F段 H4-u9南端 ・u10	包第4層系一括 一部包第3層系 含む	——	土師器	小皿	口縁部～底部	約70%	鎌倉
162	—	図版17	114	234	Ⅱ区F段 H4-u9南端 ・u10	包第4層系一括 一部包第3層系 含む	——	土師器	小皿	口縁部～底部	約100%	鎌倉
163	—	図版17	115	234	Ⅱ区F段 H4-u9南端 ・u10	包第4層系一括 一部包第3層系 含む	——	土師器	小皿	口縁部～底部	約90%	鎌倉
164	—	図版17	116	233	Ⅱ区F段 H4-k6	包第3層系 下部一括	——	土師器	皿	口縁部～底部	約80%	鎌倉
165	—	図版17	117	227	Ⅱ区F段 H4-j7	包第3層系 下部一括	——	瓦器	碗	口縁部～体部	約15%	調査区東壁で第4層系に対応 鎌倉
166	—	図版17	118	227	Ⅱ区F段 H4-j7	包第3層系 下部一括	——	瓦器	碗	口縁部～体部	約15%	調査区東壁で第4層系に対応 鎌倉
167	—	図版17	119	227	Ⅱ区F段 H4-j7	包第3層系 下部一括	——	東播系須恵質	捏鉢	口縁部～体部	約5%	調査区東壁で第4層系に対応 鎌倉
168	—	図版17	120	232	Ⅱ区F段 H4-k7	包第3層系 下部一括	——	無釉陶器 備前	壺	口縁部	約4%	鎌倉
169	—	図版17	121	228	Ⅱ区F段 H4-k18	包第3層系一括	大半中世土坑含 む 2トレンチ南側	無釉陶器 常滑	片口鉢	口縁部～体部	口縁部 約10%	試掘2トレンチ埋土含む 鎌倉、13世紀中頃
170	—	図版17	122	228	Ⅱ区F段 H4-k18	包第3層系一括	大半中世土坑含 む 2トレンチ南側	瓦器	小皿	口縁部～底部	約100%	試掘2トレンチ埋土含む 鎌倉
171	—	図版17	123	228	Ⅱ区F段 H4-k18	包第3層系一括	大半中世土坑含 む 2トレンチ南側	瓦器	小皿	口縁部～底部	約100%	試掘2トレンチ埋土含む 鎌倉
172	—	図版17	124	215	Ⅱ区F段 H4-j6	包第3層系一括	——	青磁	碗	口縁部～体部	口縁部 約10%	試掘2トレンチ埋土含む 鎌倉、龍泉窯系、草花文
173	—	図版17	125	288	Ⅱ区F段 H4-k18	包第3層系一括	大半中世土坑含 む 2トレンチ南側	瓦器	碗	口縁部～底部 (高台部)	約15%	試掘2トレンチ埋土含む 鎌倉
174	—	図版17	126	211	Ⅱ区F段 H4-j10	包第3層系一括	——	須恵器	坏A	口縁部～底部	約45%	奈良
175	—	図版17	127	288	Ⅱ区F段 H4-k18	包第3層系一括	大半中世土坑含 む 2トレンチ南側	土師器	小皿	口縁部～底部	約30%	試掘2トレンチ埋土含む 鎌倉
176	—	図版17	128	229	Ⅱ区F段 H4-j6	包第3層系下 部一括	——	瓦器	碗	口縁部～底部 (高台部)	約10%	調査区東壁で第4層系に対応 鎌倉
177	—	図版17	129	294	Ⅱ区D段 H4-k12	包落ち 須恵器 甗土坑含む	包第3層系一括	土師器	皿	口縁部～底部	約20%	NW-SEセクションより北東側 鎌倉
178	—	図版17	130	481	Ⅱ区D段 H4-k12	——	包第4層系 (第3層系)	須恵器	小型短頸壺	口縁部～底部	約45%	NW-SEセクション一括 奈良
179	—	図版17	131	86	Ⅱ区F段 H4-j6	包第3層一括 (包第4層一括)	——	青磁	碗	口縁部～体部	約5%	調査区東壁側壁 鎌倉、龍泉窯系、雷文帯
180	—	図版18	133	484	Ⅱ区A段 H4-k16-j17	第4a層系一括 (第4b層系混)	谷地形包落ち	弥生土器	異形壺	口縁部～体部	約30%	NW-SEセクション 弥生後期
181	—	図版18	137	178	Ⅱ区A段 H4-j16	第4b層一括	谷地形包落ち	弥生土器	甗	口縁部	口縁部 約10%	ベース直上、弥生中期、産地不明（胎土に垂角礫の 長石・石英多量に含む）
182	—	図版18	139	178	Ⅱ区A段 H4-j16	第4b層一括	谷地形包落ち	弥生土器	壺	底部	底部 約25%	ベース直上 弥生後期、河内（生駒山西麓産）？
183	—	図版18	140	485	Ⅱ区A段 H4-k16-j17	第4b層系一括	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	口縁部～基部	約25%	NW-SEセクション 弥生後期
184	—	図版18	141	147	Ⅱ区A段 H4-j16	第4b層一括	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	口縁部	約15%	NW-SEセクションより北東側 弥生後期
185	—	図版18	142	175	Ⅱ区A段 H4-k17 中央	第4b層	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	脚台部	約20%	弥生後期
186	—	図版18	146	175	Ⅱ区A段 H4-k17 中央	第4b層	谷地形包落ち	弥生土器	手焙り形土器	体部	約10%	弥生後期
187	—	図版18	149	154	Ⅱ区A段 H4-j16 西半	第4b層 下部一括	谷地形包落ち	弥生土器	鉢	体部～底部	底部 100%	弥生後期

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
188	—	図版18	150	154	Ⅱ区A段 H4-j16 西半	第4b層 下部一括	谷地形包落ち	石器	磨石	——	100%	弥生後期、石英斑岩、長さ14.0cm・幅4.2cm・厚み4.2cm、重量414g
189	—	図版18	151	174	Ⅱ区A段 H4-k17 南西半	第4b層上部一括 (下部)	谷地形包落ち	弥生土器	甕	口縁部～体部	口縁部 約50%	弥生後期
190	—	図版18	152	150	Ⅱ区A段 H4-k16・17	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	弥生土器	甕	口縁部～体部	口縁部 約35%	第4層扱い、NW-SEセクション 弥生後期、登録485(Ⅱ区A段 H4-k16・j17 第4b層系一括 包落ち)と接合
191	—	図版18	153	144	Ⅱ区A段 H4-j16	第4a層一括	谷地形包落ち	須恵器	(長頸)壺	体部～底部	約30%	NW-SEセクションより北西側 奈良、登録145(Ⅱ区A段 H4-j16 第4b層上部一括 包落ち)・登録147(Ⅱ区A段 H4-j16 第4b層一括 包落ち)と接合
192	—	図版18	154	483	Ⅱ区A段 H4-k16	第4b層系一括 (第4a層系混)	谷地形包落ち	須恵器	蓋	天井部～口縁部	約25%	NW-SEセクション 奈良、登録484(Ⅱ区A段 H4-k16・j17 第4a層系一括(第4b層系混)包落ち)と接合
193	—	図版18	155	157	Ⅱ区A・B段 法面 H4-j15西半	第4b層一括	谷地形包落ち	須恵器	高台付鉢	口縁部～底部 (高台部)	約50%	ベース直上、B段法面第4a層、奈良、細片化著しい 登録146(Ⅱ区A段 H4-j15・j16北端 第4b層一括包落ち)・登録147(Ⅱ区A段 H4-j16 第4b層一括 包落ち)・登録177(Ⅱ区A段 H4-j17 第4b層一括 第4a層含む 包落ち)・登録210(Ⅱ区A・B段 第4層系一括 第3層系含む 包落ち)・登録483(Ⅱ区A・B段 H4-k16 第4b層系一括(第4a層系混)包落ち)と接合
194	—	図版18	156	483	Ⅱ区A・B段 H4-k16	第4b層系一括 (第4a層系混)	谷地形包落ち	須恵器	蓋	口縁部	約10%	NW-SEセクション 奈良
195	—	図版18	157	485	Ⅱ区A段 H4-k16・j17	第4b層系一括	谷地形包落ち	須恵器	坏身	口縁部	口縁部 約10%	NW-SEセクション 古墳
196	—	図版19	158	129	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部一括	谷地形包落ち	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	約15%	弥生後期
197	—	図版19	160	129	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部一括	谷地形包落ち	弥生土器	壺	底部	底部 100%	弥生後期
198	—	図版19	161	129	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部一括	谷地形包落ち	弥生土器	甕	底部	底部 100%	弥生後期
199	—	図版19	162	129	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部一括	谷地形包落ち	弥生土器	鉢	口縁部～体部	約15%	弥生後期、高坏の可能性有り
200	—	図版19	167	116	Ⅱ区A段 H4-j・k17	第4a層下部一括	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	口縁部～体部	約35%	弥生後期 登録117(Ⅱ区A段 H4-k18 第4a層下部一括 包落ち)と接合
201	—	図版19	168	161	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	口縁部～裾部	約75%	弥生後期
202	—	図版19	170	168	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	基部～裾部	約60%?	弥生後期、登録129(Ⅱ区A段 H4-k17西半 第4a層下部一括 包落ち)・登録166(Ⅱ区A段 H4-k17西半 第4a層下部 包落ち)と接合
203	—	図版19	171	117	Ⅱ区A段 H4-k18	第4a層下部一括	谷地形包落ち	土師器	甕	口縁部～体部	約10%?	粗砂細礫層は第3c層系か? 奈良
204	—	図版19	172	143	Ⅱ区A段 H4-j17西半 ・k17東半	第4a層下部一括	谷地形包落ち	土師器	甕	口縁部	約10%	NW-SEセクションより南西側 奈良
205	—	図版19	173	116	Ⅱ区A段 H4-j・k17	第4a層下部一括	谷地形包落ち	須恵器	皿	口縁部～底部	約30%	奈良
206	—	図版19	174	143	Ⅱ区A段 H4-j17西半 ・k17東半	第4a層下部一括	谷地形包落ち	須恵器	坏A	口縁部～底部	約30%	NW-SEセクションより南西側 奈良
207	—	図版19	175	143	Ⅱ区A段 H4-j17西半 ・k17東半	第4a層下部一括	谷地形包落ち	須恵器	広口壺	口縁部～頸部	約20%	NW-SEセクションより南西側 奈良
208	—	図版19	176	142	Ⅱ区A段 H4-k16 西半	第4a層下部一括	谷地形包落ち	須恵器	甕	口縁部他	約20%	NW-SEセクションより南西側 奈良、粗い波状文+直線文
209	—	図版20	178	123	Ⅱ区A段 H4-j・k17 東半	第4a層上部一括 (下部)	谷地形包落ち	弥生土器	広口壺	口頸部	約35%	弥生後期、登録485(Ⅱ区A段 H4-k16・j17 第4b層系一括 包落ち)と接合
210	—	図版20	179	124	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層上部一括 下部含む	谷地形包落ち	弥生土器	広口壺	口縁部	約10%	弥生後期、器台裾部の可能性有り
211	—	図版20	180	484	Ⅱ区A段 H4-k16・j17	第4a層系一括 (第4b層系混)	谷地形包落ち	弥生土器	広口壺	口縁部	約10%	弥生後期
212	—	図版20	181	128	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部一括 一部上部含む	谷地形包落ち	弥生土器	広口壺	口縁部～体部	約10%	弥生後期、外面に黒斑
213	—	図版20	182	112	Ⅱ区A段 H4-k18	第4a層上部一括	谷地形包落ち	弥生土器	短頸壺	口縁部	約25%	粗砂細礫層上部は3c層系か? 弥生後期
214	—	図版20	183	150	Ⅱ区A段 H4-k16・17	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	約30%	第4層扱い 弥生後期、高坏の可能性有り
215	—	図版20	184	149	Ⅱ区B段 H4-k15・16 北半	第4a層～ 第4c層一括	谷地形包落ち	弥生土器	短頸壺	口縁部～肩部	約30%	第4層扱い 弥生後期

2007神野々Ⅰ遺跡 出土遺物一覧 Ⅰ・Ⅱ区

No. 7

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
216	—	図版20	185	484	Ⅱ区A段 H4-k16・j17	第4a層系一括 (第4b層系混)	谷地形包落ち	弥生土器	甕	口縁部～肩部	約20%	NW-SEセクション 弥生後期、外面頸部以下薄く煤付着
217	—	図版20	186	128	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部一括 一部上部含む	谷地形包落ち	弥生土器	甕	口縁部～体部	約10%	弥生後期
218	—	図版20	187	484	Ⅱ区A段 H4-k16・j17	第4a層系一括 (第4b層系混)	谷地形包落ち	弥生土器	甕	口縁部～肩部	約15%	NW-SEセクション 弥生後期
219	—	図版20	188	148	Ⅱ区A段 H4-k16 東半	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	弥生土器	甕	口縁部～頸部	約10%	第4層一括扱い、NW-SEセクションより北東側 弥生後期
220	—	図版20	189	150	Ⅱ区A段 H4-k16・j17	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	弥生土器	甕	口縁部～肩部	約10%	第4層扱い、NW-SEセクションより南西側 弥生後期
221	—	図版20	190	110	Ⅱ区A段 H4-ø20	第4a層一括	谷地形包落ち	弥生土器	甕	口縁部	約5%	口縁部 約5% 庄内式併行期
222	—	図版20	191	150	Ⅱ区A段 H4-k16・j17	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	弥生土器	高坏(桃形)	口縁部～脚台裾部	約30%	第4層扱い、NW-SEセクションより南西側 弥生後期
223	—	図版20	192	128	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部一括 一部上部含む	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	脚台部	約75%	弥生後期
224	—	図版20	193	148	Ⅱ区A段 H4-k16 東半	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	弥生土器	鉢	口縁部～体部	約15%	第4層一括扱い、NW-SEセクションより北東側 弥生後期
225	—	図版20	194	128	Ⅱ区A段 H4-k17 西半	第4a層下部一括 一部上部含む	谷地形包落ち	弥生土器	高坏(桃形)	口縁部～体部	約15%	弥生後期
226	—	図版20	195	123	Ⅱ区A段 H4-j・k17 東半	第4a層上部一括 (下部)	谷地形包落ち	弥生土器	高坏	脚台部	約60%	弥生後期
227	—	図版20	196	177	Ⅱ区A段 H4-j17	第4b層一括 第4a層含む	谷地形包落ち	弥生土器	手焙り形土器	体部	約15%	東壁側溝 弥生後期
228	—	図版20	197	148	Ⅱ区A段 H4-k16 東半	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	弥生土器	有孔土製品	——	約95%	第4層一括扱い、NW-SEセクションより北東側 弥生後期、上部径3.0cm・下部径4.0cm・高さ3.0cm、 重量(54g)
229	—	図版20	198	484	Ⅱ区A段 H4-k16・j17	第4a層系一括 (第4b層系混)	谷地形包落ち	弥生土器	土製装飾品	——	約95%	NW-SEセクション 弥生後期、外径7.5cm・内径3.5cm・厚み0.9～1.2cm、 重量(59g)
230	—	図版21	209	122	Ⅱ区A段 H4-j16	第4a層一括	谷地形包落ち	須恵器	壺	底部 (高台部)	約35%	奈良
231	—	図版21	210	173	Ⅱ区 A段 H4-k18	第4b層 第4a層含む	谷地形包落ち	須恵器	把手付壺	体部	約30%	東壁側溝 古墳、体部外面に櫛描波状文
232	—	図版21	211	148	Ⅱ区A段 H4-k16 東半	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	須恵器	壺	口縁部	約15%	第4層一括扱い、NW-SEセクションより北東側 奈良
233	—	図版21	212	122	Ⅱ区A段 H4-j16	第4a層一括	谷地形包落ち	須恵器	甕	口縁部～頸部	約15%	奈良
234	—	図版21	213	484	Ⅱ区A段 H4-k16・j17	第4a層系一括 (第4b層系混)	谷地形包落ち	須恵器	甕	口縁部	約10%	NW-SEセクション 奈良
235	—	図版21	214	104	Ⅱ区A段 H4-ø20	第4a層一括 黒褐色シルト	谷地形包落ち	緑釉	皿	底部 (高台部)	約45%	奈良
236	—	図版21	215	140	Ⅱ区B段縁 H4-k15 東半	第4a層上部一括	谷地形包落ち	土師器	甕	口縁部～体部	不明	奈良
237	—	図版21	216	148	Ⅱ区A段 H4-k16 東半	第4b層一括 (一部第4a層混)	谷地形包落ち	土師器	甕	口縁部～体部	不明	第4層一括扱い、NW-SEセクションより北東側 奈良、登録111(Ⅱ区A段 H4-k・ø19 第4a層一括 包落ち)・登録122(Ⅱ区A段 H4-j16 第4a層一括 包落ち)・登録149(Ⅱ区B段 H4-k15・k16北半 第4a層～第4c層一括 第4層扱い 包落ち) 他2片と接合
238	—	図版21	225	149	Ⅱ区B段 H4-k15・16 北半 (H4-j・k17)	第4a層～ 第4c層一括 (第4a層上部一括)	谷地形包落ち	須恵器	壺	体部～底部	不明	第4層扱い 体部外面方キ目、外面全体に自然釉薄く付着、底部 は雑なユビオサエ、体部は内湾して球形を呈する、 登録113(Ⅱ区A段 H4-j・k17 第4a層上部一括 包落ち)と接合
239	—	図版21	226	484	Ⅱ区 A段 H4-k16・j17	第4a層系一括 (第4b層系混)	谷地形包落ち	須恵器	坏B	口縁部～底部 (高台部)	約15%	NW-SEセクション 奈良
240	—	図版21	227	482	Ⅱ区 A・B段 H4-k16	第4a層一括	谷地形包落ち	須恵器	脚台付壺	脚台部	約85%	NW-SEセクション 奈良
241	—	図版22	228	71	Ⅱ区A段 H4-j18南半	第4層一括	谷地形包落ち	須恵器	高坏	脚台部 (基部～裾部)	約60%	調査区東壁側溝 奈良
242	—	図版22	229	65	Ⅱ区A段 H4-ø20	第4層一括	谷地形 包第4層落ち	須恵器	坏B	口縁部～底部 (高台部)	約15%	調査区南壁側溝 奈良
243	—	図版22	231	77	Ⅱ区C段 東縁 H4-ø17	第4層一括	包落ち	弥生土器	甕	底部	約25%	弥生中期
244	—	図版22	232	59	Ⅱ区C段 H4-m15	包第4層一括 包第3層含む	包落ち	須恵器	蓋	天井部～口縁部	約20%	奈良
245	—	図版22	233	60	Ⅱ区C段 H4-m16	包第4層一括 包第3層含む	包落ち	弥生土器	甕	口縁部	約20%	攪乱含む 弥生中期、紀伊形甕
246	—	図版22	234	59	Ⅱ区C段 H4-m15	包第4層一括 包第3層含む	包落ち	土師器	高坏	脚柱部	約20%	奈良
247	—	図版22	235	59	Ⅱ区C段 H4-m15	包第4層一括 包第3層含む	包落ち	土師器	甕	口縁部～体部	約20%	奈良
248	—	図版22	236	94	Ⅱ区A段 H4-j16	第3層一括 第4層一括	試掘1グリット 埋土一括	土師器	坏	口縁部～底部	約45%	奈良

遺物 番号	挿図 番号	写真 図版	実測遺物 登録番号	出土遺物 登録番号	地区 取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
249	—	図版22	237	119	Ⅱ区A段	第4a層一括 (第3c層含む)	谷地形包落ち	土師器	甕	口縁部～体部	約15%	奈良
250	—	図版22	242	141	Ⅱ区B段縁 H4-k16 東半	第4a層一括 (一部第3c層混)	谷地形包落ち	土師器	蓋	口縁部	約10%	奈良
251	—	図版24	246	27	Ⅱ区 H4-m23	第2層	——	石器	石燧木製品	——	約100%	サヌカイト 長さ2.8cm・幅2.3cm・厚み0.4cm、重量2g
252	—	図版24	247	40	Ⅲ区 H4-p24	——	15溝	石器	剥片石器	——	約100%	C-B段法面含む サヌカイト 長さ4.5cm・幅2.3cm・厚み0.4cm、重量6g
253	—	図版24	248	40	Ⅲ区 H4-p24	——	15溝	石核	石核	——	約100%	C-B段法面含む サヌカイト 長さ5.3cm・幅3.3cm・厚み0.4～1.2cm、重量31g
254	—	図版24	249	16	Ⅰ区 H4-m22	——	谷肩部 第5層	土師器	坏	口縁部～底部	約10%	機械掘削 奈良
255	—	図版24	250	8	Ⅰ区 H4-u21	——	谷部 上層	須恵器	皿	口縁部～底部	約60%	機械掘削 奈良
256	—	図版24	251	8	Ⅰ区 H4-u21	——	谷部 上層	須恵器	坏A	口縁部～底部	約15%	機械掘削 奈良
257	—	図版24	252	16	Ⅰ区 H4-m22	——	谷肩部 第5層	須恵器	坏B	口縁部～底部 (高台部)	約10%	機械掘削 奈良
258	—	図版24	253	8	Ⅰ区 H4-u21	——	谷部 上層	須恵器	蓋	天井部～口縁部	約20%	機械掘削 奈良
259	—	図版24	254	18	Ⅰ区 H4-m22	——	谷部 上層	須恵器	壺	体部～底部 (高台部)	約15%	機械掘削 奈良
260	—	図版24	255	17	Ⅰ区 H4	——	1落ち込み	瓦	平瓦	——	不明	機械掘削 奈良、凹面が布目、凸面が縄目
261	—	図版24	256	7	Ⅰ区 H4-m21	——	谷肩部 第4層	土師器	皿	口縁部～底部	約15%	鎌倉
262	—	図版24	257	11	Ⅰ区 H4-u22	——	谷部 下層	土師器	土釜	口縁部	約15%	機械掘削 鎌倉
263	—	図版24	258	16	Ⅰ区 H4-m22	——	谷肩部 第5層	土師器	擂鉢	口縁部～体部	約10%	機械掘削 室町
264	—	図版24	259	12	Ⅰ区 H4-m22	——	谷肩部 第4層	土師質	擂鉢	体部～底部	底部 約20%	機械掘削 室町
265	—	図版24	260	33	Ⅱ区 H4-m23	——	谷部 下層	須恵器	壺	底部 (高台部)	約10%	奈良
266	—	図版24	261	32	Ⅱ区 H4-n23	——	谷部 第3層	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	約10%	奈良
267	—	図版24	262	24	Ⅱ区 H4-n23	第2層	——	白磁	碗	口縁部～体部	約10%?	機械掘削 鎌倉
268	—	図版24	263	26	Ⅱ区 H4-n23	第2層	——	瓦器	碗	口縁部～体部	約10%	鎌倉
269	—	図版24	264	27	Ⅱ区 H4-m23	第2層	——	瓦質土器	羽釜	口縁部	約20%	室町
270	—	図版24	265	30	Ⅱ区 H4-m22～ 23	——	谷肩部 第3層	陶器	天目茶碗	口縁部～体部	約5%	室町
271	—	図版24	266	40	Ⅲ区 H4-p24	——	15溝	須恵器	坏身	口縁部～底部	約10%	古墳
272	—	図版24	267	40	Ⅲ区 H4-p24	——	15溝	須恵器	壺	口縁部	約5%	奈良
273	—	図版24	268	41	Ⅲ区 H4-p25	——	15溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約10%	鎌倉
274	—	図版24	269	47	Ⅲ区 H4-q24	——	15溝	土師器	土釜	口縁部～体部	約10%	鎌倉
275	—	図版24	270	43	Ⅲ区 H4-q25	——	15溝	土師器	土釜	口縁部	約15%	ベース直上遺構含む 鎌倉
276	—	図版24	271	50	Ⅲ区 H4-q24	——	16土坑	瓦器	碗	口縁部～底部 (高台部)	約60%	鎌倉
277	—	図版24	272	43	Ⅲ区 H4-q25	——	15溝	瓦器	碗	口縁部～底部 (高台部)	約10%	鎌倉
278	—	図版24	273	46	Ⅲ区 H4-p25	——	15溝	瓦器	碗	口縁部～体部	約15%	鎌倉
279	—	図版24	274	47	Ⅲ区 H4-q24	——	15溝	瓦器	碗	口縁部～体部	約35%	鎌倉

2007神野々Ⅰ遺跡 出土遺物（金属製品・木製品他）一覧

残存率は、図示できた部位での割合

No. 9

遺物 番号	挿図 番号	写真 図版	実測遺物 登録番号	出土遺物 登録番号	地区 取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
8	図26	図版23	M2	302	Ⅱ区F段 H4-	——	173竪穴建物 C区南端焼土上部	鉄製品	曲刀鎌 or(刀子)	——	約80%	長さ(13.4cm、錆部分含む)、刃部：幅2.5cm・厚さ0.4cm(実物寸法)、重量(121g)
9	図26	図版23	M1	455	Ⅱ区F段 H4-	——	173竪穴建物 南端高床部直上	鉄製品	直刀鎌	——	100%	長さ(8.9cm、錆部分含む)、刃部：幅2.4cm・厚さ0.4cm(実物寸法)、重量(65g)
25	図27	図版23	M3	384	Ⅱ区F段 H4-k-07	——	188竪穴建物 A区埋土一括 焼土塊の直上	鉄製品	和釘状?	——	不明	長さ(12.8cm)、幅0.7～0.5cm・厚さ0.45～0.35cm、重量(12g)
280	—	図版23	M4	246	Ⅱ区F段 H4-k7	包第3層系 (第3層含む) 下部一括	——	鉄製品	釘	——	不明	長さ(5.0cm・錆部分含む)、厚さ0.3×0.3cm(実物寸法)、重量(7g)
281	—	図版23	M5	284	Ⅱ区D段 H4-i13	包第3層系一括	包落ち	鉄製品	釘	——	不明	長さ(5.5cm・錆部分含む)、幅1.0cm・厚さ0.8cm(共に錆含む)、重量(6g)
282	—	図版23	M6	330	Ⅱ区F段 H4-07・8	——	263区画溝 埋土一括	鉄製品	釘	——	不明	長さ(8.1cm・錆含む)、幅0.8cm・厚さ1.1cm(共に錆含む)、重量(15g)
283	—	図版23	M7	232	Ⅱ区F段 H4-k7	包第3層系 下部一括	——	鉄滓	鉄滓	——	不明	長さ7.1cm(錆含む)、幅2.9cm・厚さ2.3～1.6cm(共に錆含む)、重量86g
284	—	図版23	M8	149	Ⅱ区B段 H4-k15・ k16北半	第4a層～ 第4c層一括 第4層扱い	包落ち	鉄製品	鉄鏃	——	約100%	NW-SEセクションより北東側 長さ(4.5cm)・幅2.5cm・厚さ0.3cm、重量(12)g
W1	図30	図版23	W1	70	Ⅱ区A段 H4-j19	第4層一括 (第3層含む)	1井戸状遺構 谷地形包落ち	木製品	下駄	右足用か?	約95%	長さ(22.9cm)・幅11.4cm 前歯：幅3.2～2.8cm・長さ11.4cm・高さ1.8～1.1cm 後歯：幅3.0～2.8cm・長さ11.0cm・高さ1.3～1.0cm 歯の左側の磨減り度合い強い、男性用の右足用か? (樹種未特定)(水漬けで保管)
W2	—	図版23	W2	443	Ⅱ区A段 H4-k18 西半	——	1遺構	木製品	曲物	皮継ぎ目	——	長さ(14.5cm)、幅8.3cm・厚さ0.35cm 曲物(樹種未特定)、桜の皮 長さ(7.5cm)・幅1.5cm(2本あり)、間隔6.5cm、(水漬けで保管)
W3	図30	図版23	W3	438	Ⅱ区A段 H4-k18 西半	——	1遺構	木製品	曲物 底板	底板	約50%	長さ(37.7cm)・直径39.0cm復元値・厚さ0.8cm 表面に何かで押されたような痕有り、側面に止め具 用の孔有り※止め具1個遺存、(樹種未特定)(水漬 けで保管)
W4	図30	図版23	W4	427	Ⅱ区A段 H4-k1西半	——	1遺構	木製品	水溜め 遺構側板	側板	約90%	高さ59.0cm・幅49.8～46.8cm・厚さ2.9cm、針葉樹 (樹種未特定)(自然乾燥で保管)、表面に丸い石の ようなもので押された痕有り
W5	—	図版23	W5	493	Ⅱ区F段 H4-k7	——	188竪穴建物 柱穴1	木製品	柱材	柱材	不明	長さ(23.0cm)・幅14.0cm、芯の部分朽ち果てている (樹種未特定)(水漬けで保管)
W6	—	図版23	W6	469	Ⅱ区A段 H4-k18 西半	——	1遺構	木製品	曲物	側板	約100%	登録470と同一 (樹種未特定)
285	—	図版23	S1	430	Ⅱ区A段 H4-k18 西半	——	1遺構 図の5	石材	側石	——	約100%	高さ(78.0cm)・幅56.0cm・厚さ7.0cm

【引用・参考文献】

今後の調査の活用に資するために、現時点での神野々Ⅰ遺跡周辺での既往の調査報告書を中心に文献を列記しておく。町域合併による旧高野口町分、一部、隣接するかつらぎ町・九度山町分についても作成した。

【調査報告書・調査報告】

〔旧橋本市域〕（発行西暦年順）

橋本市教育委員会 1989『上田遺跡発掘調査』〈発掘調査現地説明会資料〉橋本市教育委員会

前田敏郎 1969『紀の川用水水路予定地内遺跡分布調査』和歌山県教育庁社会教育課

羯磨正信・吉田宣夫 1973『南海電鉄橋本地区住宅開発計画区域内 文化財調査概報』和歌山県教育委員会

吉田宣夫 1973『陵山古墳発掘調査概報』橋本市教育委員会

笠井保夫 1973『血縄遺跡緊急発掘調査報告書』和歌山県教育委員会

吉田宣夫 1974『市脇遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会 文化財課

久貝 健 1977『神野々廃寺跡緊急発掘調査報告書』橋本市教育委員会

松下 彰 1978『血縄遺跡』『紀の川用水建設事業に伴う発掘調査報告書』和歌山県教育委員会

松田正昭 1982『神野々廃寺跡発掘調査概報』橋本市教育委員会

松田正昭 1983『神野々廃寺跡発掘調査概報Ⅱ』橋本市教育委員会

土井孝之他 1984『東家遺跡発掘調査概報―橋本市立橋本小学校屋内運動場建設事業に伴う緊急発掘調査―』
橋本市教育委員会

大岡康之 1986『血縄遺跡発掘調査概報』橋本市教育委員会

大岡康之 1988『利生護国寺』橋本市遺跡調査概報第1輯 橋本市教育委員会

大岡康之 1989『昭和63年度 橋本市遺跡調査概報 血縄遺跡・上兵庫古墳群』橋本市埋蔵文化財調査概報
第14輯 橋本市教育委員会

大岡康之・井馬好英 1990『平成元年度 橋本市遺跡調査概報 血縄遺跡 第4次・医王寺跡 第1次』
橋本市埋蔵文化財調査概報第15輯 橋本市教育委員会

井馬好英 1991『平成2年度 橋本市遺跡調査概報 血縄遺跡 第5次・利生護国寺旧境内遺跡 第2次』
橋本市埋蔵文化財調査概報第16輯 橋本市教育委員会

井馬好英 1991『平成2年度 山田瓦窯跡発掘調査概報 第1次』橋本市埋蔵文化財調査概報第18集
橋本市遺跡調査会

井馬好英 1992『平成3年度 市脇遺跡発掘調査概報 第6次』橋本市埋蔵文化財調査概報第20集
橋本市遺跡調査会

井馬好英・大岡康之 1993『平成4年度 橋本市遺跡発掘調査概報 芋生小島遺跡』橋本市埋蔵文化財 調査
概報第21集 橋本市教育委員会

大岡康之 1996『平成7年度 和歌山県橋本市 柏原遺跡発掘調査概報』橋本市埋蔵文化財調査概報
第25集 橋本市遺跡調査会

大岡康之他 1997『平成7・8年度 血縄遺跡第7次発掘調査概報』橋本市埋蔵文化財調査概報 第27集 橋
本市遺跡調査会

大岡康之他 1999『平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報』橋本市埋蔵文化財調査概報 28 橋本市
教育委員会

大岡康之 1996『平成7年度 柏原遺跡発掘調査概報』橋本市遺跡調査会

- 村田 弘・佐伯和也 2000「垂井女房ケ坪・北馬場遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 1999』(財)和歌山県文化財センター
- 村田 弘 2002「北馬場遺跡の第2次発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2001』(財)和歌山県文化財センター
- 井石好裕 2003「柏原遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2002』(財)和歌山県文化財センター
- 佐伯和也 2003「北馬場遺跡の第3次発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2002』(財)和歌山県文化財センター
- 井石好裕 2004「柏原遺跡の第2次発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2003』(財)和歌山県文化財センター
- 井石好裕 2005「柏原遺跡の第3次発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2004』(財)和歌山県文化財センター
- 井石好裕・佐伯和也他 2007『垂井女房ケ坪遺跡・野口遺跡・北馬場遺跡・柏原遺跡 ― 一般国道24号京奈和自動車道(橋本道路)建設工事に伴う発掘調査報告書一』(財)和歌山県文化財センター
- 土井孝之 2008「神野々Ⅰ遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2007』(財)和歌山県文化財センター
- 和歌山県教育委員会 2010「15 神野々Ⅰ遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報―平成20年度―』和歌山県教育委員会
- 和歌山県教育委員会 2011「9 神野々Ⅰ遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報―平成21年度―』和歌山県教育委員会

〔九度山町域〕(発行西暦年順)

- 河内一浩 1988「慈尊院Ⅱ遺跡の調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 1987』(財)和歌山県文化財センター
- 齋藤有美 2000「慈尊院遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 1999』(財)和歌山県文化財センター
- 九度山町史編纂委員会 2003『改定 九度山町史 史料編』九度山町
- 堀田啓一 2003「一 考古」『改定 九度山町史 史料編』九度山町史編纂委員会・九度山町
- 九度山町史編纂委員会 2009『改定 九度山町史 通史編』九度山町

〔旧高野口町域〕(発行西暦年順)

- 佐伯和也他 1989『和歌山県伊都郡 高野口町内遺跡詳細分布調査報告書』高野口町教育委員会
- 和歌山県教育委員会 1990『和歌山県埋蔵文化財調査概報』和歌山県教育委員会
- 黒石哲夫 1994「名古屋Ⅰ遺跡の発掘調査」『和歌山県文化財センター年報 1993』(財)和歌山県文化財センター
- 黒石哲夫 1994『名古屋Ⅰ遺跡―高野口町町道福島一之戸線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要―』(財)和歌山県文化財センター
- 井石好裕 1995『高尾遺跡一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』(財)和歌山県文化財センター
- 井石好裕 1996「高尾遺跡の発掘調査」『和歌山県文化財センター年報 1995』(財)和歌山県文化財センター
- 佐伯和也 2007「名古屋墳墓の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2006(平成18)年度』(財)和歌山県文化財センター

〔旧かつらぎ町域〕(発行西暦年順)

- 上田秀夫・松村重貴 1977『佐野遺跡発掘調査概要』かつらぎ町教育委員会
- 笠井保夫 1977『佐野廃寺発掘調査概報』和歌山県教育委員会・(社)和歌山県文化財研究会

- 村田 弘 1991「佐野遺跡の調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 1990』(財)和歌山県文化財センター
- 村田 弘・佐伯和也 1990『佐野遺跡発掘調査概報』(財)和歌山県文化財センター
- 佐伯和也 1997「佐野遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 1996』(財)和歌山県文化財センター
- かつらぎ町史編集委員会 2006『かつらぎ町史 通史編』かつらぎ町
- 藤井保夫・富加見泰彦 2006「第一章 原始時代の伊都郡・那賀郡」『かつらぎ町史 通史編』かつらぎ町史編集委員会・かつらぎ町
- 前田義明 2007「西飯降Ⅱ遺跡、丁の町・妙寺遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2006 (平成 18) 年度』(財)和歌山県文化財センター
- 田中元浩他 2010『西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡— 一般国道 24 号京奈和自動車道(紀北東道路)改築事業に伴う第 1 次・第 2 次発掘調査報告書—』(財)和歌山県文化財センター
- 手島芙実子・富加見泰彦 2008「西飯降Ⅱ遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2007』(財)和歌山県文化財センター
- 田中元浩 2008「丁ノ町・妙寺遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2007』(財)和歌山県文化財センター
- 富永里菜 2009「中飯降遺跡・大谷遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2008』(財)和歌山県文化財センター
- 富永里菜 2009「西飯降Ⅱ遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2008』(財)和歌山県文化財センター
- 富永里菜 2010「中飯降遺跡、加陀寺前経塚の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2009』(財)和歌山県文化財センター
- 佐伯和也 2010「神野々Ⅰ遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報 2009』(財)和歌山県文化財センター

【論考・報告他】(発行西暦年順)

- 金谷克己他 1956「第 5・6 古佐田出土瓦」『考古学図説』樫原考古学研究所
- 瀬崎清一 1966「高野口だより」『きのくに文化財』和歌山県文化財研究会
- 橋本市史編さん委員会 1974『橋本市史』上巻 橋本市教育委員会
- 小池洋一・水田義一他 1980『歴史の道調査報告書(Ⅱ)— 南海道・大和街道他—』(社)和歌山県文化財研究会編集・和歌山県教育委員会発行
- 小池洋一・水田義一他 1980『歴史の道調査報告書(Ⅲ)— 高野山参詣道 1—』(社)和歌山県文化財研究会編集・和歌山県教育委員会発行
- (有)平凡社地方資料センター 1983『和歌山県の地名』日本歴史地名体系 第 31 巻 平凡社
- 和歌山県史編さん委員会 1983『和歌山県史 考古資料』和歌山県
- 安藤精一編 1988『図説 和歌山県の歴史』図説 日本の歴史 30 河出書房新社
- 中野榮治 1989『紀伊国の条里制』(株)古今書院
- 和歌山県史編さん委員会 1994『和歌山県史 原始・古代』和歌山県
- 水島大二監修 1995『定本・和歌山県の城』(株)郷土出版社
- 前坂尚志 1995「五條文化の始まり」『常設展 五條の歴史と文化』市立五條文化博物館

- 紀の川水の歴史街道編纂委員会 1996『紀の川—水の歴史街道—』建設省近畿地方建設局和歌山工事事務所
- 前田敬彦 1996「紀ノ川流域の弥生遺跡」『みずほ』第18号 大和弥生文化の会
- 橋本歴史研究会（代表：宮本佳典） 1999『文化橋本』第20号（特集 橋本歴史研究会会報 第51号～第100号）橋本歴史研究会
- 土井孝之 1999「紀伊の弥生集落の様相—集落構成の特質と画期を求めて—」『みずほ』第31号 大和弥生文化の会
- 紀の川流域荘園詳細分布調査委員会（会長：小山靖憲） 2000『紀の川流域荘園詳細分布調査概要報告書Ⅰ 紀伊国隅田荘現況調査』和歌山県教育委員会
- 前田正明 2001「紀ノ川流域に形成された「島」の開発と景観復元—紀伊国伊都郡安田島とその周辺—」『和歌山県立博物館 研究紀要』第六号 和歌山県立博物館
- 和歌山井堰研究会 2002『紀ノ川流域堤防井堰等遺跡調査報告書Ⅰ（橋本市・伊都郡編）』和歌山井堰研究会（代表：海津一朗）
- 紀の川流域荘園詳細分布調査委員会（会長：小山靖憲） 2003『紀の川流域荘園詳細分布調査概要報告書Ⅱ 官省符荘現況調査』（高野柊をつくらせた荘園—もうひとつのカタカナ書き百姓申状の世界—）紀の川流域荘園詳細分布調査委員会・和歌山県教育委員会
- 堀田啓一 2003「考古」『改定九度山町史 資料編』改定九度山町史編さん委員会
- 井石好裕 2004「橋本市柏原遺跡の調査から—弥生時代中期の方形周溝墓群—」『第7回 近畿弥生の会 大阪場所』近畿弥生の会
- 水稻文化研究所・紀ノ川流域研究会 2005『紀伊国相賀荘地域総合調査』21世紀COEプログラム アジア地域文化エンハンシング研究センター水稻文化研究所（代表：海老澤 衷）
- 土井孝之 2005「変化するムラと墓 紀の川流域を中心として」『弥生時代の和歌山—変化するムラと墓—』紀伊考古学研究会 第8回大会 発表資料集
- 高木徳郎 2006「紀ノ川流域荘園における混作と出作」『和歌山県立博物館 研究紀要』第十二号 和歌山県立博物館
- 和歌山県教育委員会 2007『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』和歌山県教育委員会
- 手島英実子 2007「〔資料紹介〕西飯降Ⅱ遺跡出土の絵画土器」『（財）和歌山県文化財センター年報2006（平成18）年度』（財）和歌山県文化財センター
- （財）和歌山県文化財センター 2007『京奈和自動車道橋本道路発掘調査報告会—考古資料から見た紀ノ川上流域の弥生文化—』（財）和歌山県文化財センター
- 日置 智 2007「京奈和自動車道関連遺跡の発掘調査」『地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会—発表要旨資料集』（財）和歌山県文化財センター
- 井石好裕 2007「柏原遺跡の調査」『京奈和自動車道橋本道路発掘調査報告会—考古資料から見た紀ノ川上流域の弥生文化—』（財）和歌山県文化財センター
- 仲原知之 2007「柏原遺跡出土の管玉の原産地」『京奈和自動車道橋本道路発掘調査報告会—考古資料から見た紀ノ川上流域の弥生文化—』（財）和歌山県文化財センター
- 前田義明 2008「紀伊国伊都郡妙寺条里区（指理郷）の発掘調査—和歌山県かつらぎ町丁ノ町・妙寺遺跡、西飯降Ⅱ遺跡—」『条里制古代都市研究』24 条里制古代都市研究会
- 田中元浩 2008「京奈和自動車道（紀北東道路）遺跡の第2次発掘調査—西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡の

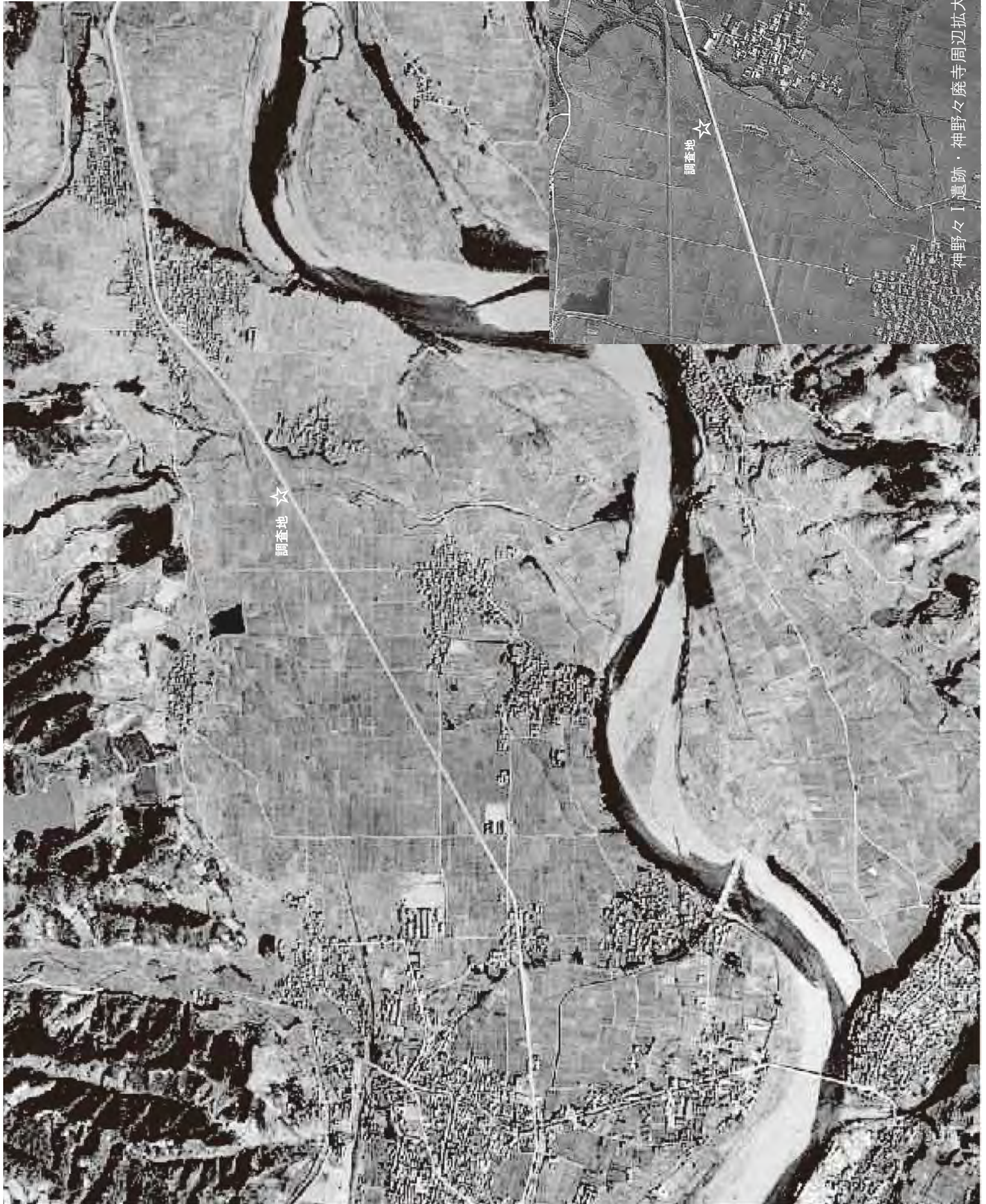
- 発掘調査』『第3回 地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会—』(財) 和歌山県文化財センター
- 土井孝之 2008「橋本市神野々Ⅰ遺跡の発掘調査」『第3回 地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会—』(財) 和歌山県文化財センター
- 富永里菜 2008「[資料紹介] 西飯降Ⅱ遺跡の製塩土器」『(財) 和歌山県文化財センター年報 2007』(財) 和歌山県文化財センター
- 田中元浩 2008「[資料紹介] 丁ノ町・妙寺遺跡の蛇紋岩製石斧」『(財) 和歌山県文化財センター年報 2007』(財) 和歌山県文化財センター
- 和歌山県立博物館 2008『特別展 没後四百年 木食応其—秀吉から高野山を救った僧—』和歌山県立博物館
- 富永里菜 2009「京奈和自動車道関連遺跡の発掘調査—西飯降Ⅱ遺跡・中飯降遺跡」『地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会—』(財) 和歌山県文化財センター
- (財) 和歌山県文化財センター 2009『公開シンポジウム「紀ノ川流域の縄文文化」資料集』(財) 和歌山県文化財センター
- 富永里菜 2009「[資料紹介] 中飯降遺跡 縄文時代の大型堅穴建物」『(財) 和歌山県文化財センター年報 2008』(財) 和歌山県文化財センター
- 田中元浩 2009「[資料紹介] 丁ノ町・妙寺遺跡の弥生土器—弥生時代中期最後の土器群—」『(財) 和歌山県文化財センター年報 2008』(財) 和歌山県文化財センター
- 田中元浩 2010「丁ノ町・妙寺遺跡出土の石錐」『(財) 和歌山県文化財センター年報 2009』(財) 和歌山県文化財センター
- 田中元浩 2011「和歌山県丁ノ町・妙寺遺跡の縄文集落」『特集 西日本の縄文集落と地域社会』『季刊考古学』第114号 (株) 雄山閣
- 富永里菜 2011「中飯降遺跡における大型堅穴建物の出現」『特集 西日本の縄文集落と地域社会』『季刊考古学』第114号 (株) 雄山閣

写真図版



2007-Ⅱ区 173竪穴建物掘削状況(北から)

写真図版1 旧高野口町・橋本市
応其条里周辺の航空写真（昭和23年）



神野々「遺跡・神野々廃寺周辺拡大



2007-Ⅰ・Ⅱ区 航空写真(デジタルモザイク写真)



1 2007-II区 調査地全景航空写真(北側上空から)



2 2007-II区 調査地全景航空写真(西側真上から)



3 2007-II区 調査地全景(北から)



4 2007-II区 調査地全景(南から)



1 2007-Ⅱ区E・F段 173竪穴建物 焼失状況
(北から)



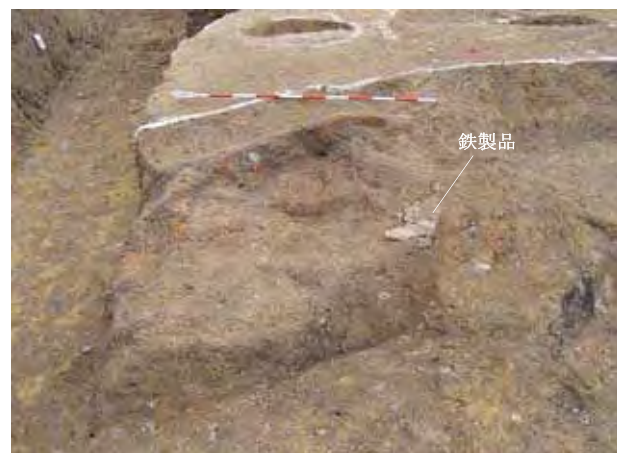
2 2007-Ⅱ区E・F段 173竪穴建物 建築部材
倒壊炭化状況(東から)



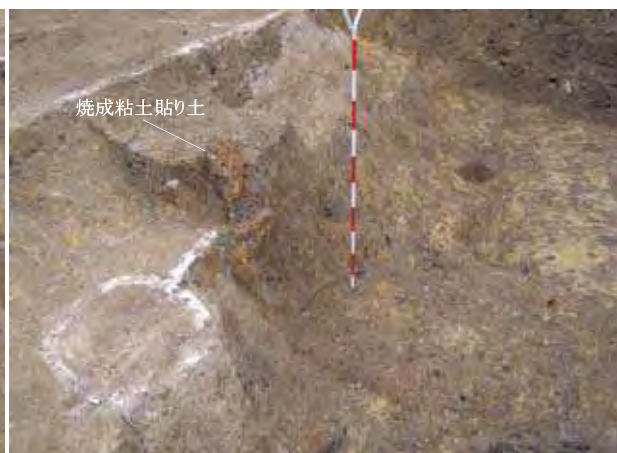
3 2007-Ⅱ区E・F段 173竪穴建物 北側高床部焼成粘土
貼り土状況(南から)



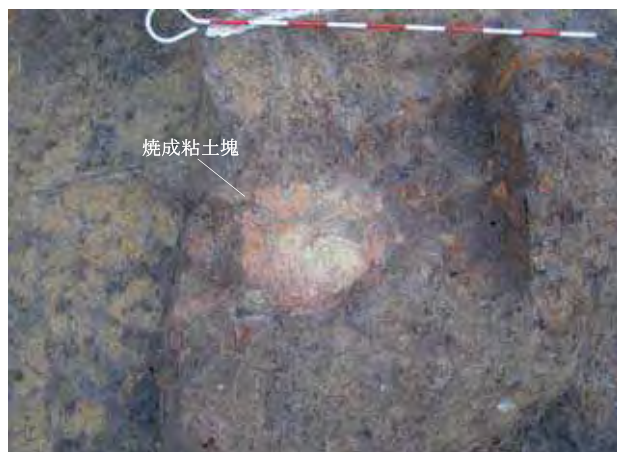
4 2007-Ⅱ区E・F段 173竪穴建物 北側高床部焼成粘土
貼り土断面土層(東から)



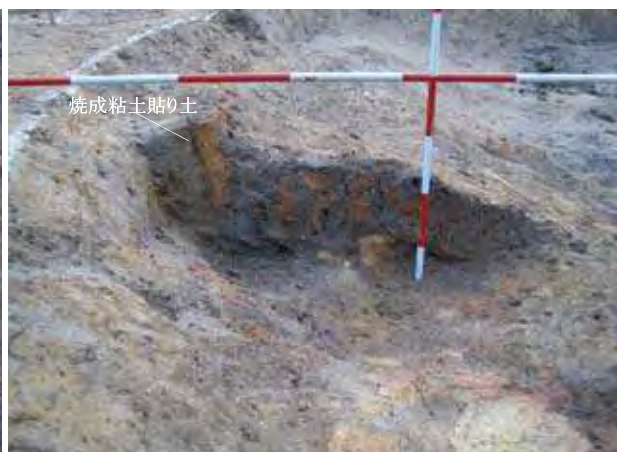
5 2007-Ⅱ区E・F段 173竪穴建物 南側高床部焼成粘土
検出状況(北北東から)



6 2007-Ⅱ区E・F段 173竪穴建物 北端壁面焼成粘土
貼り土状況(西南ら)



7 2007-Ⅱ区E・F段 173竪穴建物 南側高床部
下部焼成粘土塊検出状況(北北東から)



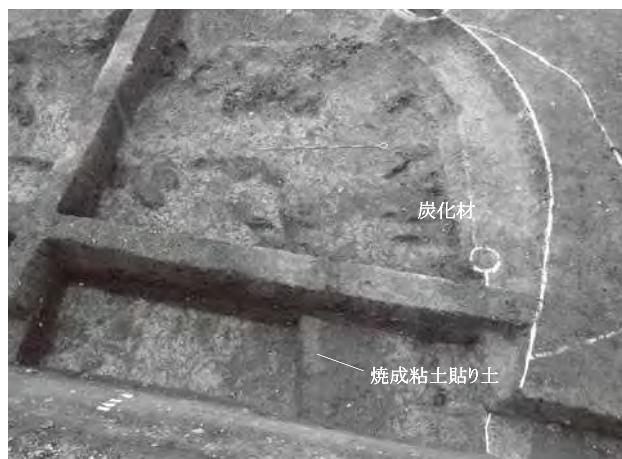
8 2007-Ⅱ区E・F段 173竪穴建物 南端壁面焼成粘土
貼り土断面土層(東から)



1 2007-Ⅱ区E段・F段 遺構検出状況(北から)



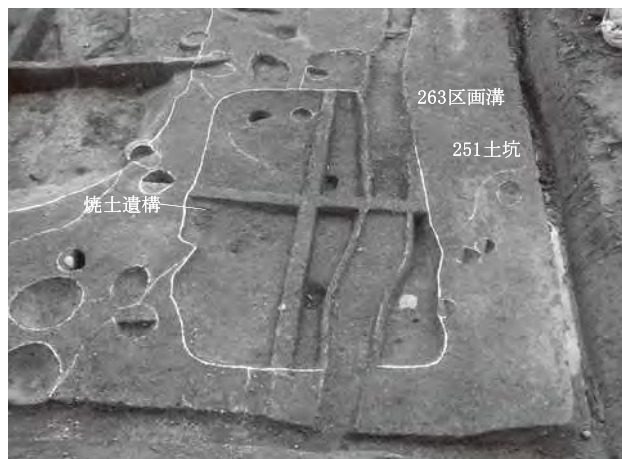
2 2007-Ⅱ区E段・F段 173竪穴建物掘削状況(北から)



3 2007-Ⅱ区E段・F段 173竪穴建物炭化材・焼成粘土貼り土検出状況(東から)



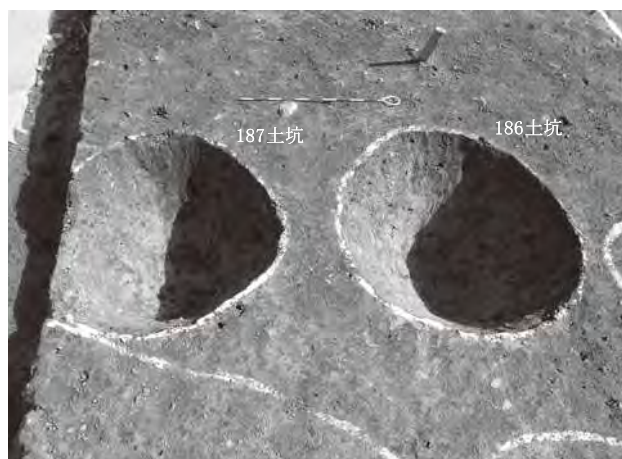
4 2007-Ⅱ区E段・F段 173竪穴建物 焼成粘土塊検出状況(北から)



5 2007-Ⅱ区F段 188竪穴建物掘削状況(北から)



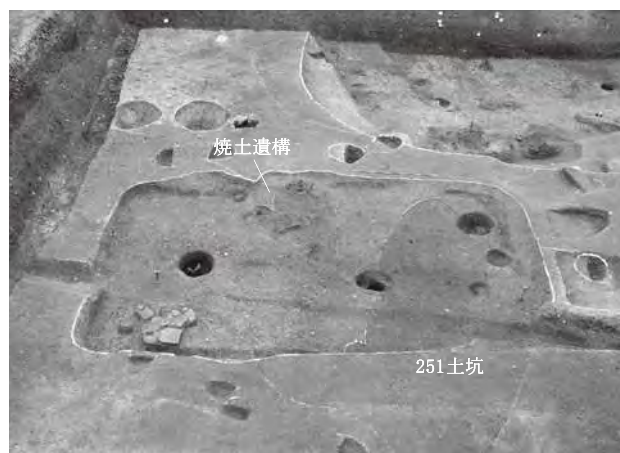
6 2007-Ⅱ区F段 188竪穴建物堆積土断面土層・焼土遺構(北から)



7 2007-Ⅱ区F段 186・187土坑(西から)



8 2007-Ⅱ区F段 186土坑南北断面土層(西から)



1 2007-Ⅱ区F段 188竪穴建物(西から)



2 2007-Ⅱ区F段 188竪穴建物 北西隅貯蔵穴
遺物出土状況(東から)



3 2007-Ⅱ区F段 188竪穴建物 柱穴1柱材据付状況
(西から)



4 2007-Ⅱ区F段 188竪穴建物 焼土遺構検出状況
(北から)



5 2007-Ⅱ区F段 188竪穴建物 柱穴5丸瓦出土状況
(188竪穴建物に先行する柱穴)(東から)



6 2007-Ⅱ区F段 251土坑掘削状況
(188竪穴建物に先行する土坑)(東から)



7 2007-Ⅱ区D段 300土坑 遺物出土状況
(南東から)



8 2007-Ⅱ区D段 362土坑墓 遺物出土状況
(南西から)



1 2007-Ⅱ区C段南西範圍 遺構検出状況
(北から)



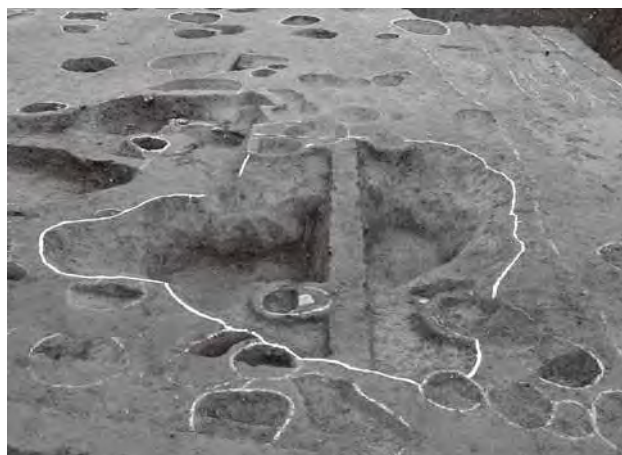
2 2007-Ⅱ区C段南西範圍 遺構掘削状況
(北から)



3 2007-Ⅱ区C段南西範圍 掘立柱建物1
(北北東から)



4 2007-Ⅱ区C段南西範圍 鎌倉時代の耕作跡
(北から)



5 2007-Ⅱ区C段南西範圍 42土坑掘削状況
(北から)



6 2007-Ⅱ区C段南西範圍 42土坑南北断面土層
(西から)



7 2007-Ⅱ区D段 遺構検出状況(北東から)



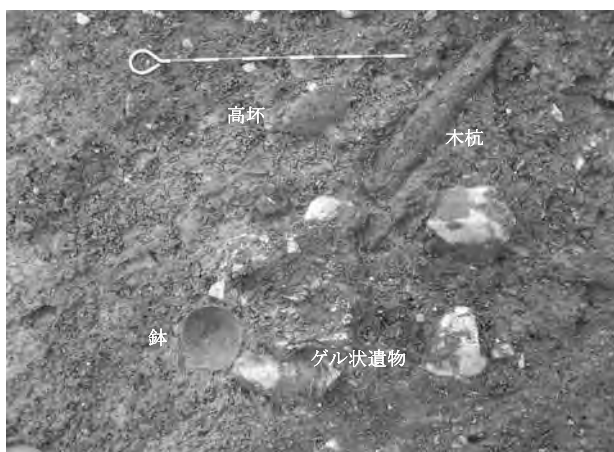
8 2007-Ⅱ区D段 遺構掘削状況(北東から)



1 2007-Ⅱ区A段・B段 谷地形堆積層掘削状況 (北北東から)



2 2007-Ⅱ区A段・B段 谷地形法面堆積層断面土層 (南南東から)



3 2007-Ⅱ区A段 谷地形堆積層 第4b層 遺物出土状況 (東から)



4 2007-Ⅱ区A段 1水溜め遺構上部構造と 石組み崩壊状況 (南から)



5 2007-Ⅱ区A段 1水溜め遺構上部構造 (南から)



6 2007-Ⅱ区A段 1水溜め遺構上部構造 (北西から)



7 2007-Ⅱ区A段 1水溜め遺構下部構造 (東から)



8 2007-Ⅱ区A段 1水溜め遺構下部構造 (東から)



1 2007-I 区 調査地全景航空写真(北側上空から)



2 2007-I 区 調査地全景航空写真(西側真上から)



3 2007-I 区 調査地全景(北北東から)



4 2007-I 区 遺構検出状況全景(北北東から)



1 2007-I区 調査地全景(南から)



2 2007-I区D段・C段 調査地全景(北北東から)



3 2007-I区F段 掘立柱建物3(北から)



4 2007-I区F段 柱穴列1(北から)



5 2007-I区F段 土坑群(西から)



6 2007-I区F段 柱穴列1 495柱穴台石出土状況(東から)



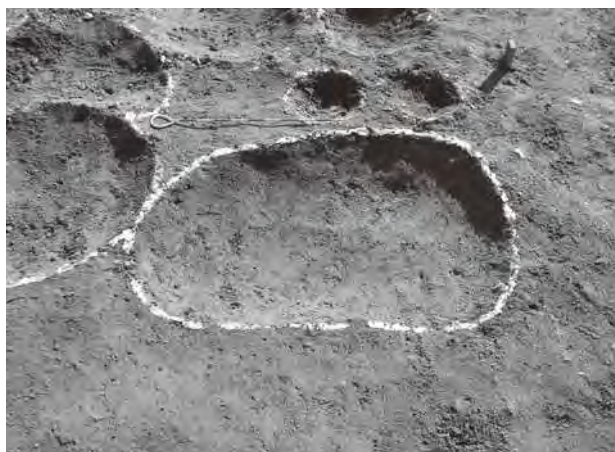
7 2007-I区F段 454土坑(北北東から)



8 2007-I区F段 455土坑(北北東から)



1 2007-I区F段 473土坑(北から)



2 2007-I区F段 490土坑(北西から)



3 2007-I区F段 517土坑(北西から)



4 2007-I区F段 521土坑(北から)



5 2007-I区F段 527土坑(南西から)



6 2007-I区F段 537土坑(西から)



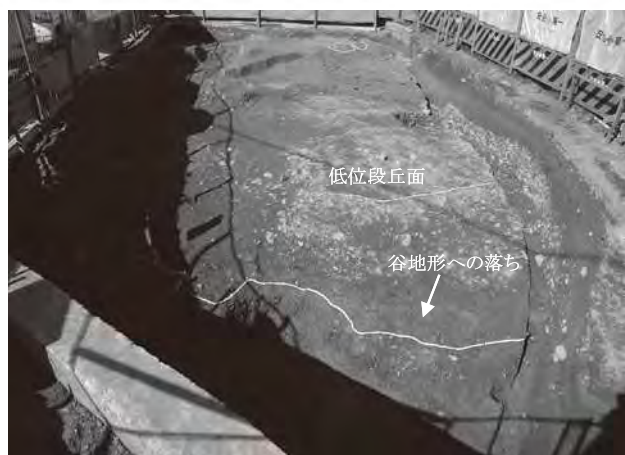
7 2007-I区F段 542土坑(北西から)



8 2007-I区F段 555土坑(東から)



1 2009-Ⅰ～Ⅲ区
航空写真
(デジタルモザイク写真)
(手前が北)



2 2009-Ⅰ区 調査地全景(東から)



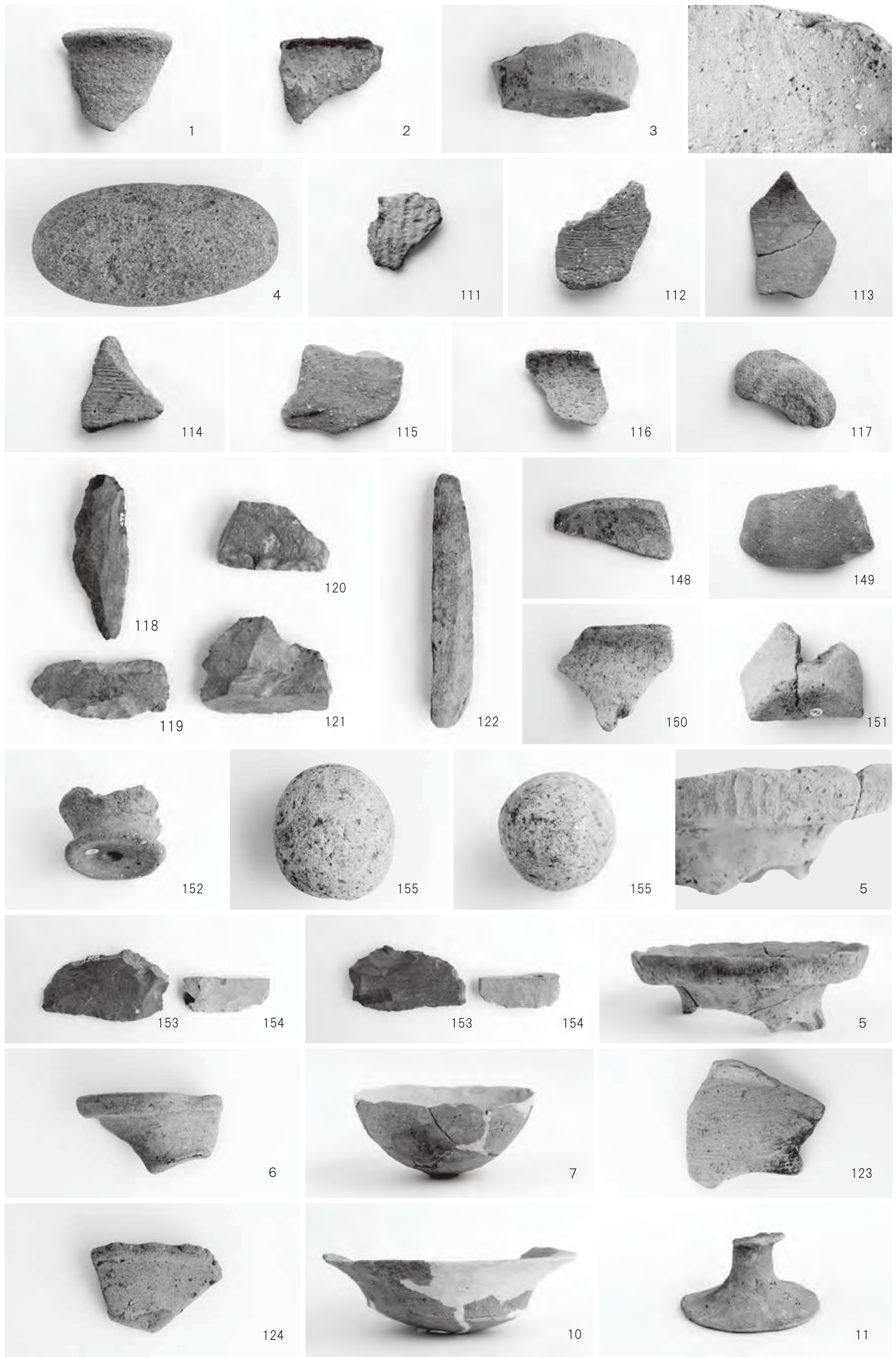
3 2009-Ⅰ区 調査地東半部(南から)



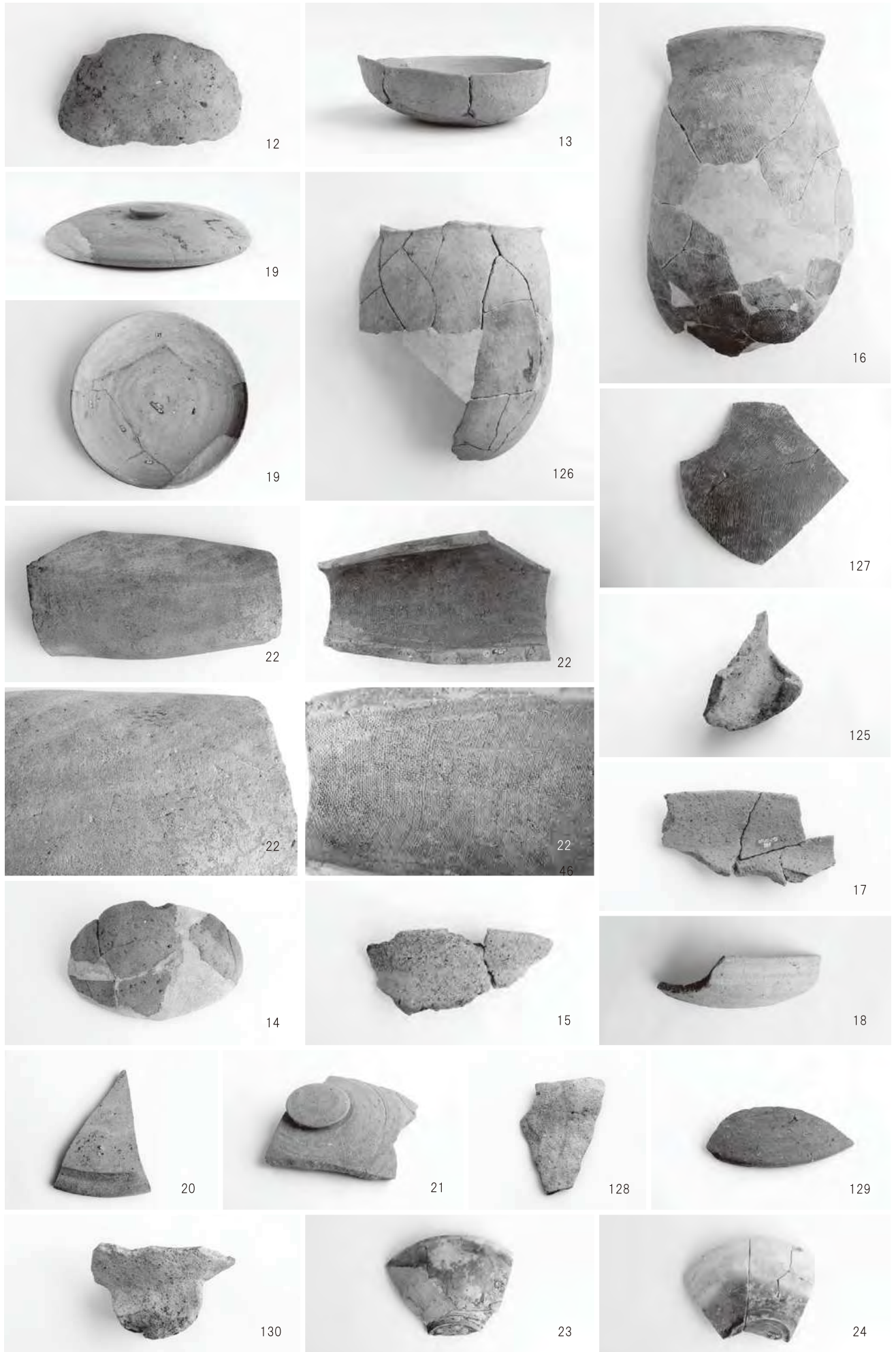
4 2009-Ⅱ区 調査地全景(東から)



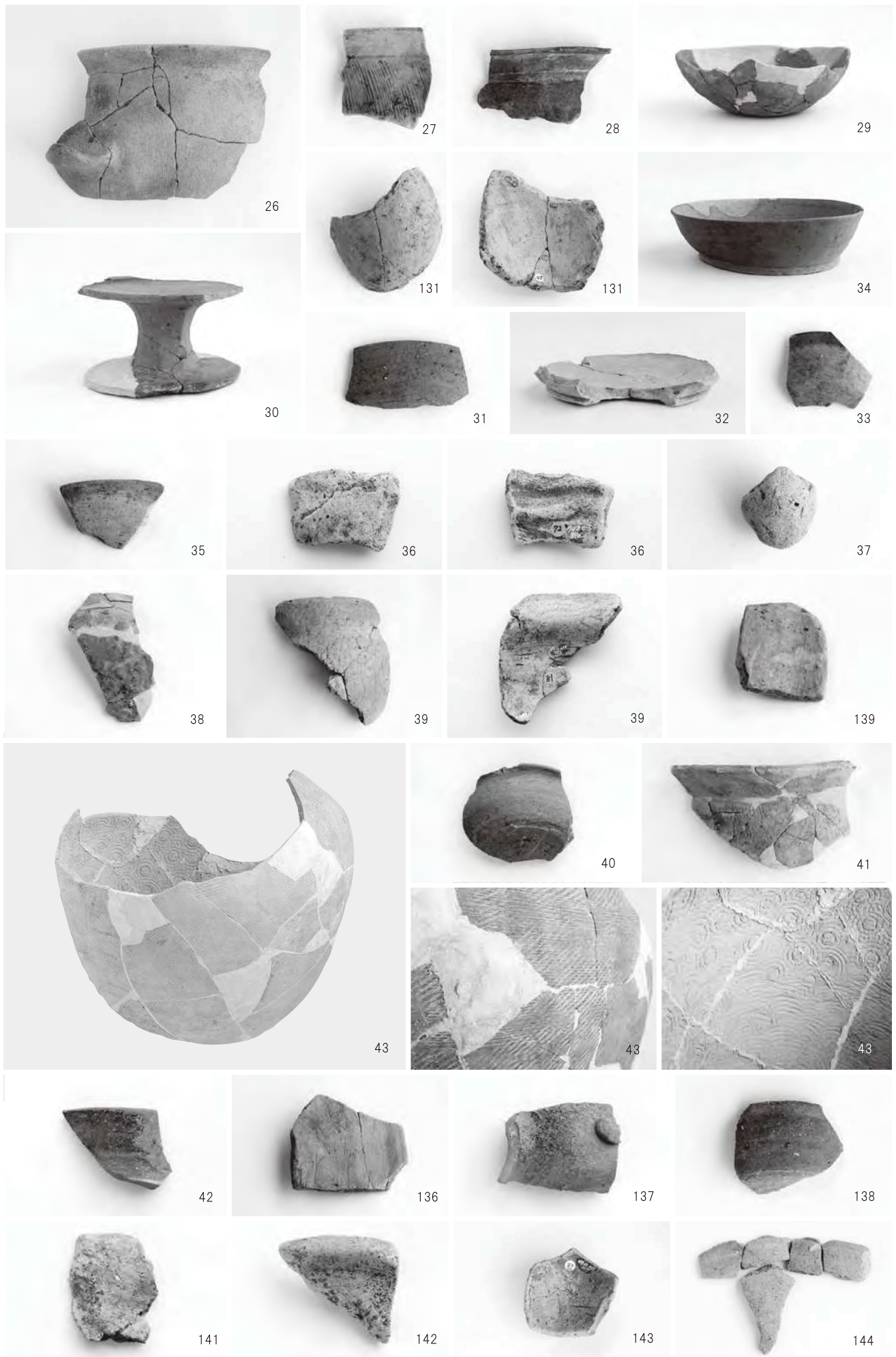
5 2009-Ⅲ区 調査地全景(北東から)



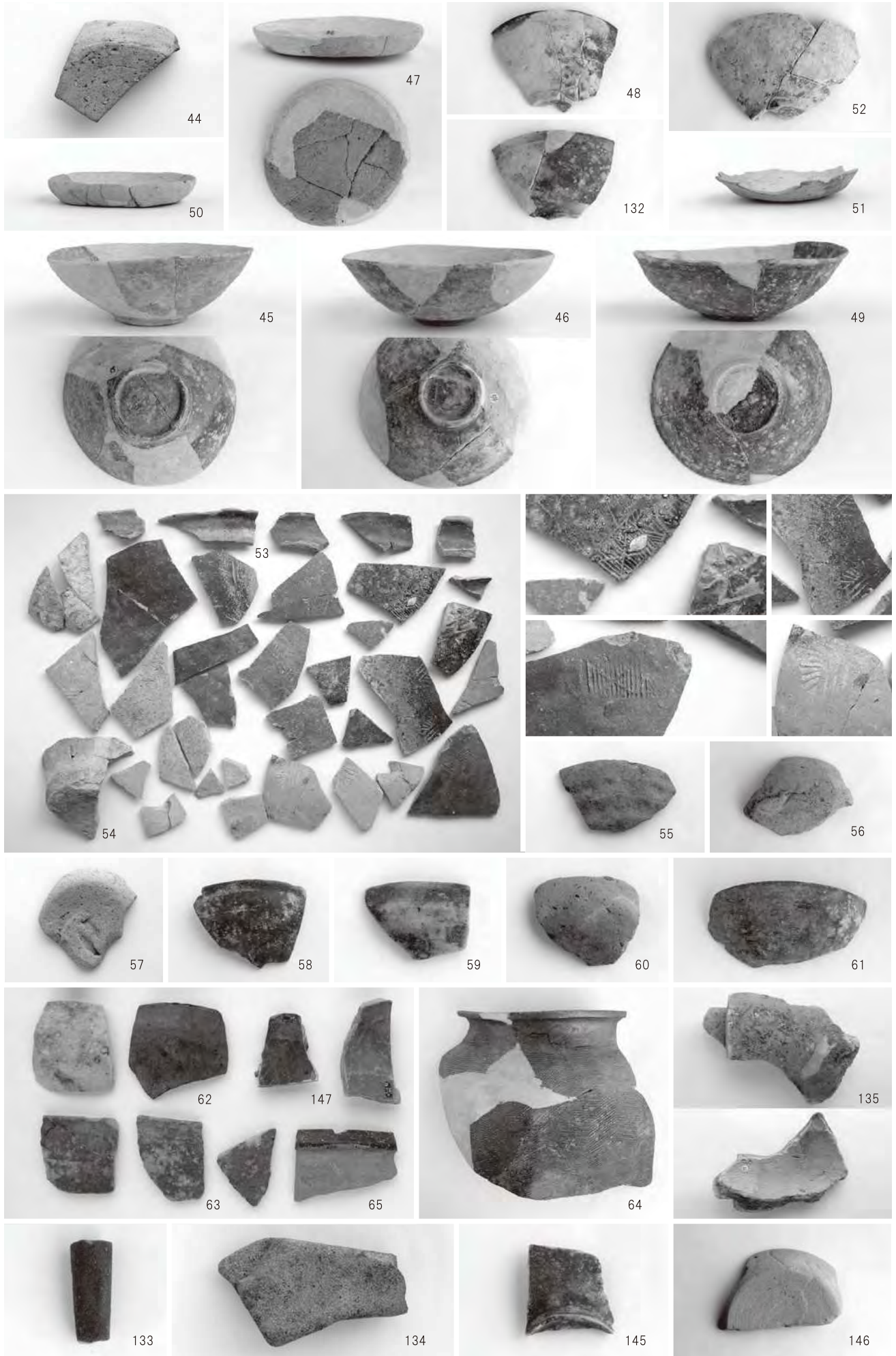
1: 251 土坑、2: 271 土坑、3・113・114・116・118・120・121: 173 竪穴建物、4: 試掘1グリッド、111: 122 柱穴、112: 63 柱穴、115: 42 土坑、117: 257 柱穴、119: 谷地形第4a層・第3c層、122: A段谷地形第3c層、148～155: E・F・D段遺物包含層第3層・第3層系下部・第4層(弥生時代中期)
5～7・123・124: 173 竪穴建物、10・11: 318 土坑



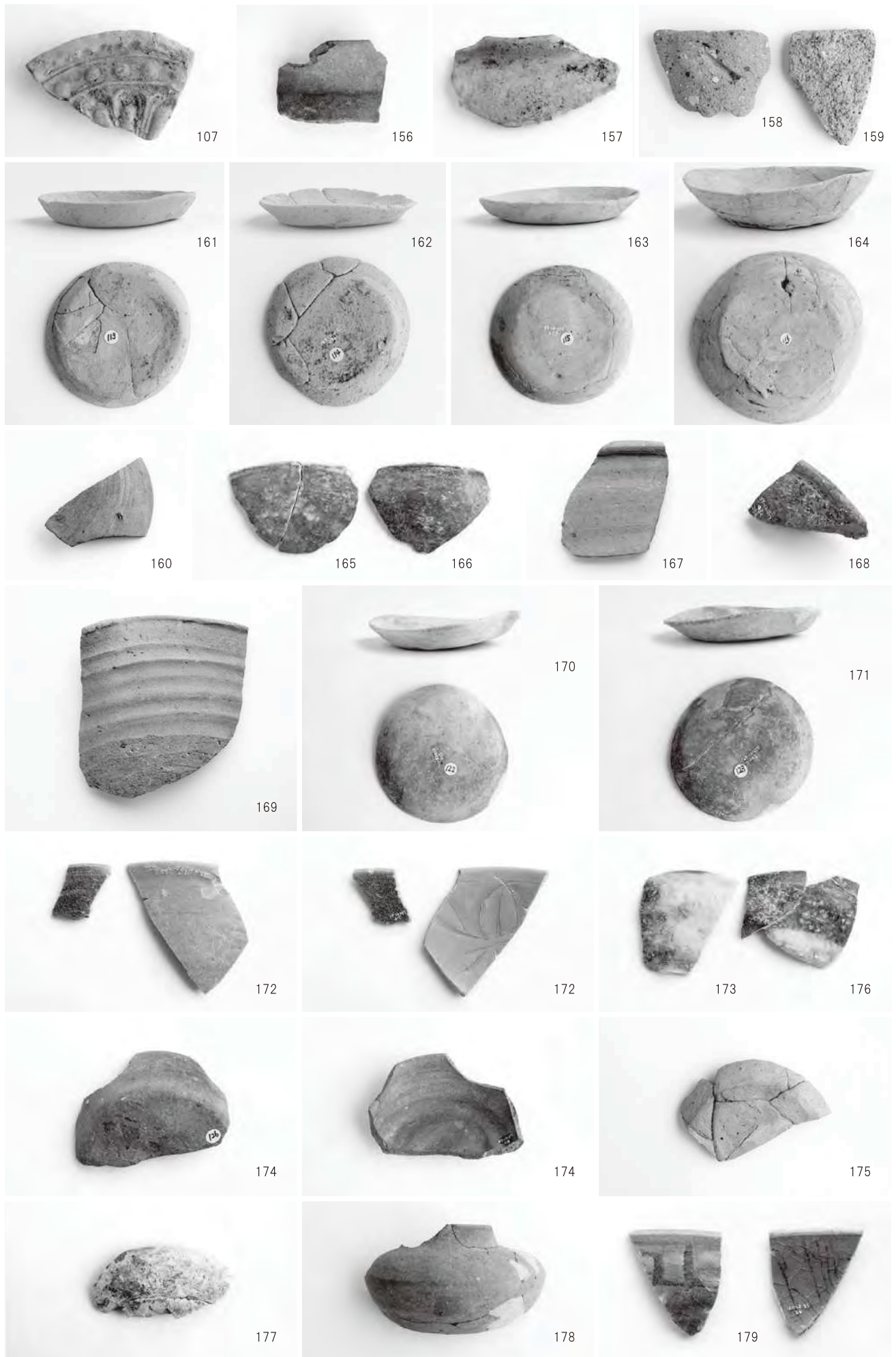
12・16・19・126・127: 188 竪穴建物 貯藏穴、13: 188 竪穴建物 壁溝
 14・15・17・18・20・21・128～130: 188 竪穴建物 埋土
 22: 188 竪穴建物内 柱穴5、125: 188 竪穴建物内 柱穴1
 23・24: 188 竪穴建物 (重複遺構 263 区画溝)



26～33・131: 251 土坑、34: 362 土坑墓、35: 446 柱穴、36: 341 土坑、37: 261 柱穴
 38・39・139: 160 土坑、40・41: 28 土坑、42: 252 柱穴、43: 300 土坑、136: 58 柱穴
 137: 103 柱穴、138: 76 柱穴、141: 162 柱穴、142: 159 土坑、143・144: 42 土坑



44～46: 186 土坑、47～49・132: 187 土坑、50～52: 246 土坑、53: F 段遺物包含層第3層系下部、
 54: 188 竪穴建物、55・56: 263 区画溝、57・58・135: 361 溝状遺構、59: 470 柱穴、60: 79 柱穴、61:
 120 土坑、62: 1井戸状遺構、63～65・146・147: 1水溜め遺構、133: 243 土坑、134: 495 柱穴、145:
 98 柱穴



107・156～160・164～168・176：F段遺物包含層第3層系下部、161～163：F段遺物包含層第4層系、169～175：F段遺物包含層第3層系（大半中世土坑含む）、177・178：D段遺物包含層第3層系、179：E段遺物包含層第3層系



66・67・69・74・76・77・80・81・181～186・190・193・195：谷地形堆積層第4b層（第4層系）、68・79・189：谷地形堆積層第4b層上部、180・191・192・194・：谷地形堆積層第4a層（第4b層系混）、187・188：谷地形堆積層第4b層下部

66～69・74・76・77：図31に対応
79～81：図32に対応

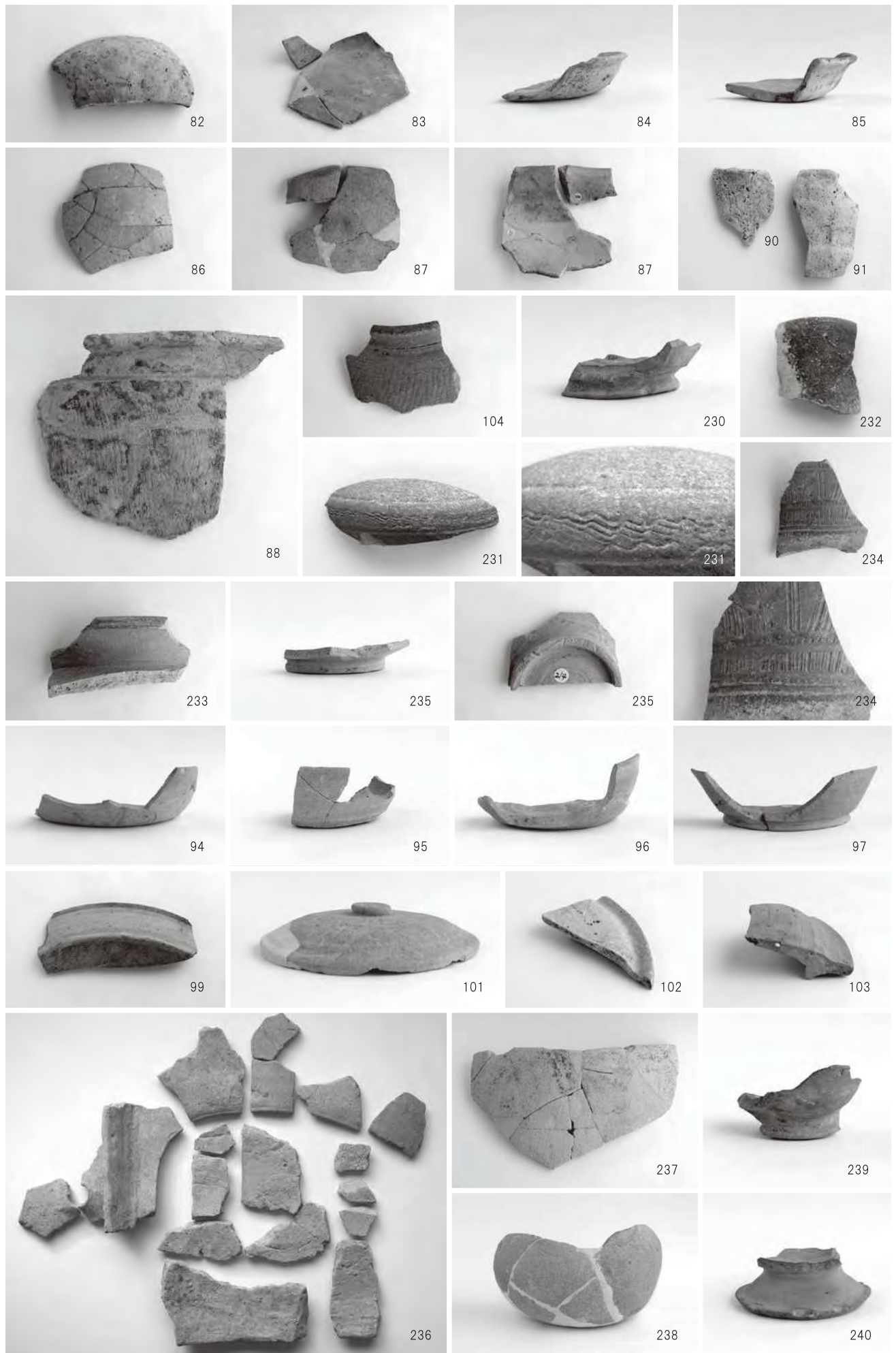


70 ～ 73・75・78・196 ～ 208 : 谷地形堆積層 第4a層下部



209・210・212・213・217・223・225～229：谷地形堆積層第4a層上部

211・214～216・218～222・224：谷地形堆積層第4a層



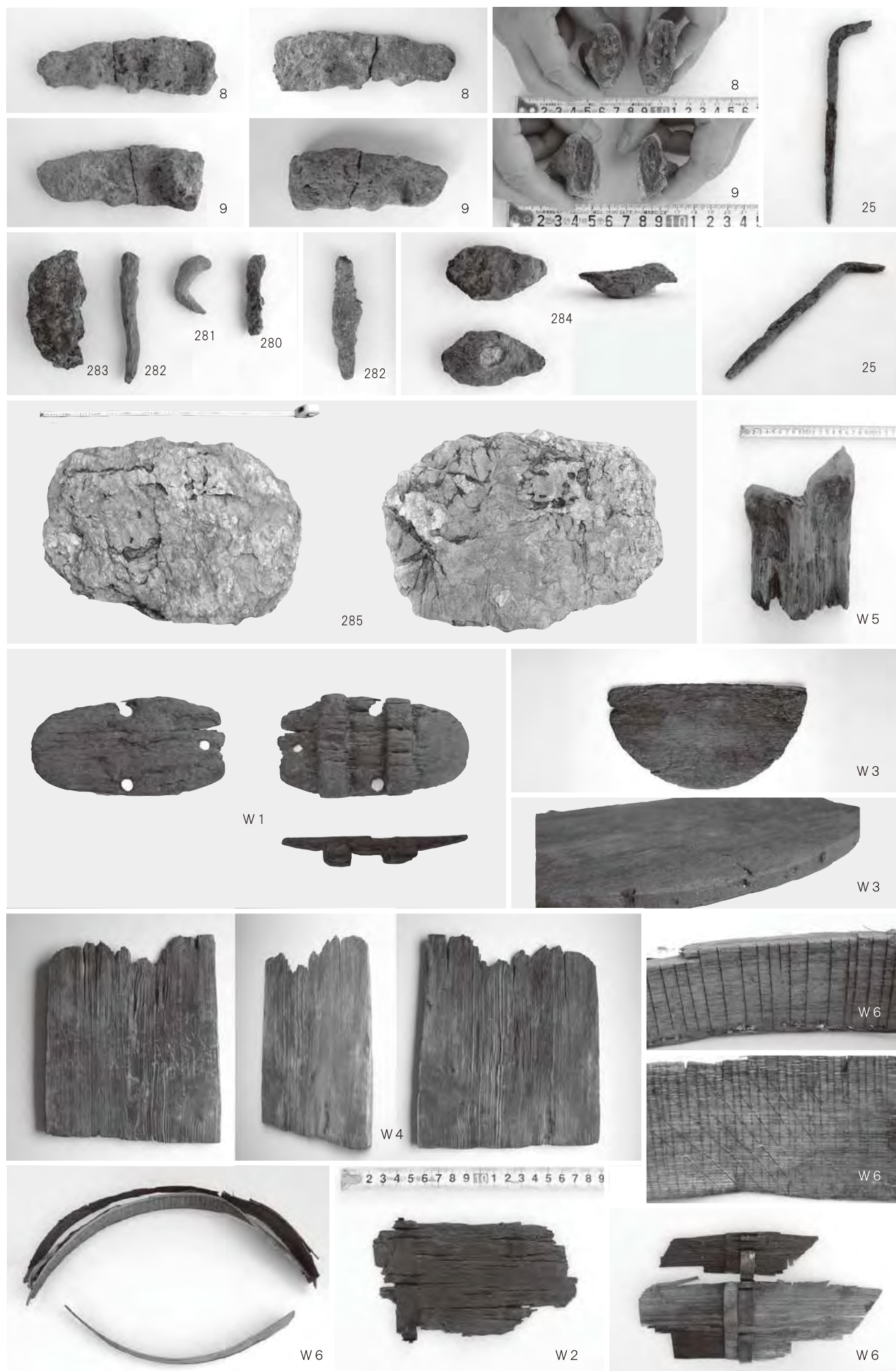
82～88・90・91・94～96・97・99・101～104・230～235・237・238～240：谷地形堆積層第4a層
 236：谷地形堆積層第4a層上部

82～88・90・91・94～96：図32に対応
 97・99・101～104：図33に対応



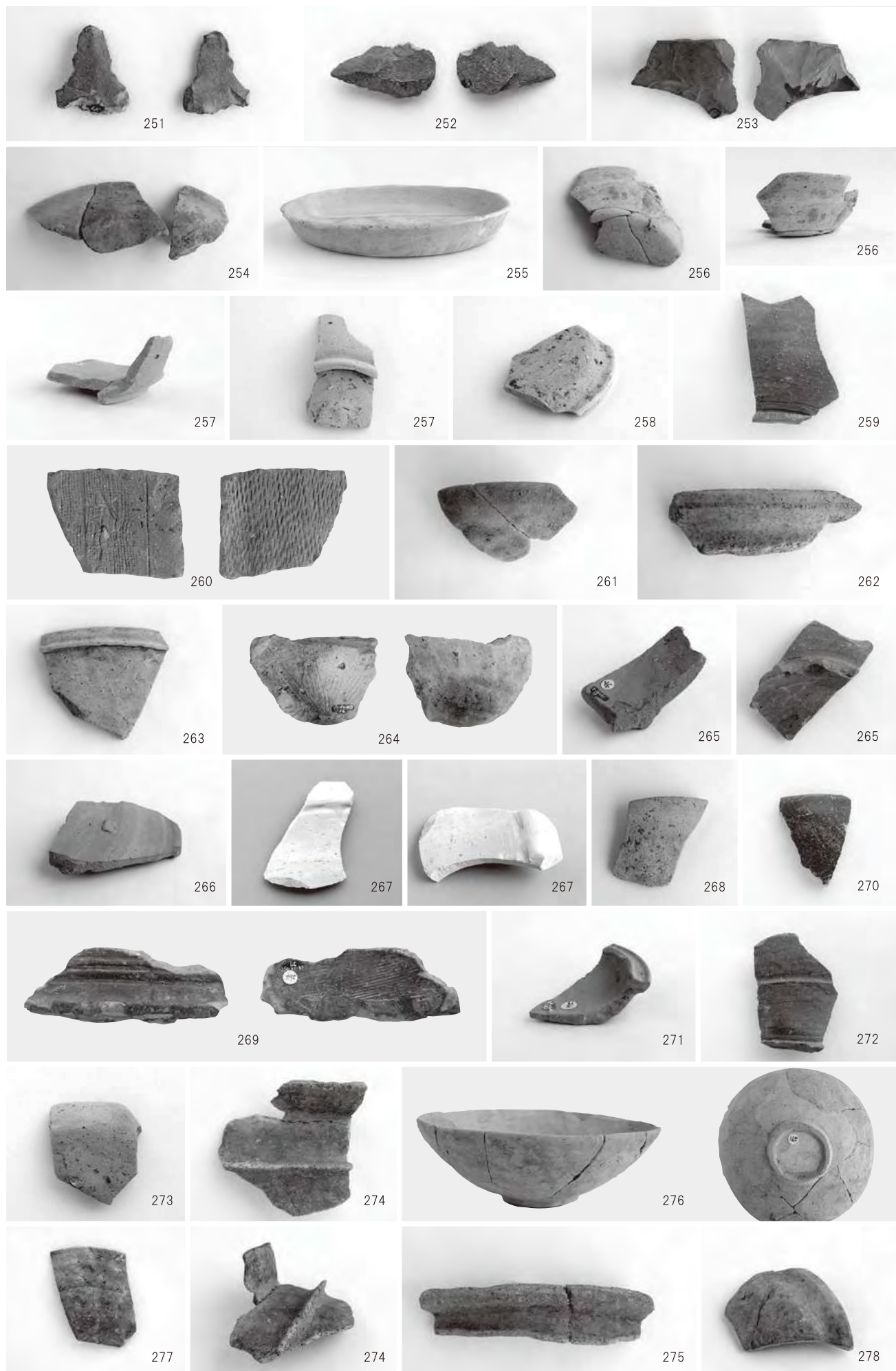
108・241・242：谷地形堆積層 第4層、92・93・89・98・100・249：谷地形堆積層 第3c層、105・106・250：B段遺物包含層 第3c層、248：谷地形 試掘1グリッド、243：C段遺物包含層 第4層、244～247：C段遺物包含層 第3層

92・93・98：図 32 に対応
100・105・106：図 33 に対応



8・9 : 173 竪穴建物、25 : 188 竪穴建物、W1 : 1井戸状落ち
 280・283 : F 段遺物包含層第3層系下部、281 : D 段遺物包含層第3層系、282 : F 段 263 区画溝
 284 : B 段谷地形第4a 層、285・W2~4・W6 : 1水溜め遺構、W5 : 188 竪穴建物 柱穴1

8・9 : 図 26 に対応、25 : 図 27 に対応
 W1・W3・W4 : 図 30 に対応



251・267～269：第2層、252・253・271～275・277・278：15 溝状遺構、254・257・263：谷肩部第5層、255・256・258・259：谷部上層、260：1落ち込み状遺構、261・264：谷肩部第4層、262・265：谷部下層、266・270：谷部第3層、276：16 土坑状遺構

報告書抄録

ふりがな		こののいちいせき						
書 名		神野々Ⅰ遺跡						
副 書 名		県道山田岸上線道路改良工事に伴う発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名		土井孝之・佐伯和也						
編集機関		財団法人 和歌山県文化財センター						
所 在 地		〒640-8404 和歌山市湊571-1 TEL 073-433-3843						
発行年月日		西暦2011年 3 月18日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
こののいちいせき	わかやまけん はしもとし このの	30203	橋本地区 55	34° 18' 26"	135° 34' 56"	第1次調査 20070904 ～ 20071214	1, 300	県道山田 岸上線道 路改良工 事
神野々Ⅰ遺跡	和歌山県 橋本市神野々					第2次調査 20091103 ～ 20100420		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
神野々Ⅰ遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物、土坑		中期弥生土器(壺・甕) サヌカイト製石器・剥片 後期～終末期弥生土器 (壺・甕・高坏・鉢・蓋・ 有孔土製品・土製装飾品)		中期弥生土器は、僅 かながら当該地域の 搬入状況を端的に表 している。後期弥生 土器は、纏まった遺 物量がある。	
		古墳時代	特に遺構なし		須恵器(坏身)など		古墳時代終末期との 関係を示す内容。	
		奈良時代	竪穴建物、掘立柱建物、 土坑		土師器(坏・皿・蓋・高 坏・甕・移動式竈)、須 恵器(坏・皿・蓋・高坏 ・壺・甕)、緑釉陶器(皿) 瓦(軒丸瓦・丸瓦・平瓦) など		遺物全体の中では、 約1／3の比率を占 める。今後の課題と して、神野々廃寺と の関係を十分に検討 する必要がある。	
		鎌倉時代	掘立柱建物、柱穴列、屋 敷地の区画溝、土坑		土師器(皿・小皿・土釜)、 瓦器(椀・皿・鉢・甕)、 須恵器(甕・捏鉢)、陶器 (常滑・瀬戸美濃)、磁器 (青磁・白磁) など		土坑の大半は、鎌倉 時代の遺構群の北西 側に集中する傾向が あり、土坑墓の可能 性が考えられる。	
要約	平成19年度と平成21年度に行った神野々Ⅰ遺跡の調査では、南側約200mに位置する神野々廃寺との関係を想起させる奈良時代の多くの土器や瓦などの遺物がある。これらの内、大半の遺物は、調査地の東側に位置する開析谷へ押し出された堆積層の中から出土したものである。 遺物整理の結果、弥生時代中期前葉～中葉の土器(母数121点)は、地元(不明含む)・大和(盆地南西部)・河内(生駒山西麓)・紀伊(紀の川下流域)の物が混在し、河内産が約半数(46%)を占めることが明らかとなった。その他、弥生時代後期中葉から庄内式併行期、奈良時代、鎌倉時代などの総数9,745点の遺物がある。 遺物の内、開析谷への遺物の埋積が神野々Ⅰ遺跡の西側一帯に広がる応其条里の土地開発の時期と密接に関係し、鎌倉時代の遺構・遺物の混在状況の有無から、土地開発の一端が奈良時代と鎌倉時代にあることが明らかとなった。							

神野々 I 遺跡

－ 県道山田岸上線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 －

発行年月日：2011年3月18日

編集・発行：財団法人和歌山県文化財センター
和歌山県和歌山市湊571-1

印刷・製本：白光印刷株式会社
和歌山県和歌山市雑賀崎2021-3

[illegible]